明治二十七年八月二十五日第三種郵便物認可

明治四十年三月二十日發行（毎月一回二十日發行）

March 20th 1907.

Report of the Sericultural Association of Japan.

No. 178.

大日本蠶絲會報

第百七拾八號

本號要目

●蠶絲業に關する經濟組織に就て　農學士　加賀山辰四郎
●卒倒園の毒素に就て　東京蠶業講習所技手　高橋伊勢次郎
●蠶體内に存する大なる腺細胞組織に就て　農學士　石渡繁胤
●「ペルソン」氏の論文
●農蠶の研究　秋田縣農學校教諭　田村兼藏
●蠶絲業に就て　男爵　船越衛
●本年養蠶業の豫想　東京蠶業講習所技師　土屋泰
●繭度の說　京都蠶業講習所技手　服部柳太郎
●蠶絲業家と割烹　大日本製茶會會長　石井泰次郎
●同盟罷工と消費組合　法學博士　桑田熊藏
●蠶絲業界多年の輿論　衆議院議員　工藤善助
●工場主と職工　伯爵　正親町實正
●絲質の均一は器械の改良に在り　三重縣農業技師　安潛
●渋米及絹布に就て　法學士　東
●「フォルマリン」檢定法　農學士　内田定槌
●製絲原料繭について　東京蠶業講習所教諭　辻畅太郎
●滿州の蠶業に就て　小野くわ子
●伊國の栽桑業　小田宗孝
●韓國の蠶業　峯村喜藏
●臨時桑園經濟調査　秋田縣農事試驗場技手　長岡哲三
　　木下富之助

TOKYO.
The Association;
No. 2 Mitoshirocho, Sunchome, Kanda, Japan.

特許中原式生繭乾燥器

本器は火熱蒸氣の兩式あり小形は壹回に生繭壹石五斗入より參石入六石入拾貳石入貳拾四石入六拾石入百八拾石入參百石入の大中小あり養蠶家製絲家の最も便利品なり

本器の大裝置は丹波國郡是製絲株式會社にして六石入參拾四臺据付生繭より全乾燥一晝夜に八百石出來得其他拾五臺貳拾臺は各地方に据付あり

本器は生繭より全乾燥六時間内外に繭籠の差替なくして生繭と同等の色澤に乾燥均一に出來得るは旋風器と繭を乘せたる棚枠の回轉に依りて溫度低き割合に乾燥時間の早き事

本器は僅六ヶ年間に全國及清國上海芝罘滿洲等に至る迄數百臺据付生繭乾燥器中の大王と稱せられ陸續御注文あり昨年は四月上旬に乍遺憾御好意を空ふして各新聞雜誌を以て御注文を一時謝絶したる事あり

本器は空氣を作用する爲め燃料の少量なるは使用者の了知せらるゝ所なり

各地方の當業者諸君より本春据付の分昨年中に數拾臺の御注文に付何日に御注文を謝絶する哉難計本春御施設の諸君は至急御下命あらん事を希望す

他の乾燥裝置を本器棚枠回轉旋風器附に改造廉價に出來得る事

說明書圖面は御請求に依り送呈す

東京市本所區櫓石衞門町三十四番地(長)(電話浪花貳貳貳六番)(電略ナカ)

特許中原式生繭乾燥器製作販賣所

天下憂國の士に檄す

天漸く暖かならんとして百花將に破蕾せんとす、自然界の光彩之れより陸離たるものあらん。時乎無慮一萬五千有餘の會員を有せる本會は、此好機に際して其機能の完を期し、目的の存するところに向て一大發展を試みんと欲す、一大發展とは何ぞや、蠶絲業に關與せらるゝ人と否とを問はず、廣く憂國の士に入會を請ひ、互に提携し共に我國是なる蠶絲消長の責任を增ひ、以て帝國富强の基礎を築くこと是れなり。

本會は客年臨時總會に於て定欵を變更し、一度規定の會費を納付せる方を終身會員と爲し、之れに對して本會は年々一回特に趣味あり實益ある年報を編纂して、永遠に無代配布を爲し、以て蠶絲界の進歩を鼓吹せんとす。

夫れ戰後の我經濟界は如何にして其歩を進め、平和的活戰場裡に凱歌を奏せんとはするか、實に今後に於ける帝國の發展は一に經濟界の戰捷に俟つべく經濟界の戰捷は蠶絲業の發展に俟つべく、蠶絲業の發展は之れを國民の發憤に俟たざるべからず、本會が新年と共に一大革新を爲したる所以のもの、亦全く之れが發憤を促さんとせる微衷に外ならざるなり。

若し夫れ我國民にして本邦唯一の富力の源泉たる我蠶絲業に冷かなることあらんか、經濟界の前途否國家將來の運命に及ぼす影響洵に測り知るべからざるものあり、庶幾ば帝國の發展を期し、國利民福を增進せんとするの士は、宜しく進んで本會に入り以て共に俱に蠶絲業の振興を企圖せられんことを、謹て天下憂國の士に檄す。

東京勸業博覽會開會の日

大日本蠶絲會

佐野理八氏と金山製絲場
M. R. Sano et la filature de Kanayama.

第百七十八號　大日本蠶絲會報

目次

論叢

●蠶絲業に關する經濟組織に就て　農學士　加賀山辰四郎
●卒倒病の毒素に就て　東京蠶業講習所技手　高橋伊勢次郎
●蠶體内に存する大なる酸細胞組織に就て　農學士　石渡繁胤
●「ペルソン」氏の論文　農學士　田村愛藏
●蠶蛾の研究　戰田蠶業學校教諭

演壇

●蠶絲業に就て　男爵　船越衛

思潮

●本年養蠶業の雅想　東京蠶業講習所技師　土屋泰

拾芳

●緩度の說　大日本勸業學會長　石井泰次郎

家庭

●蠶絲業家と獨立

叩門

●同盟罷工と消費組合　法學博士　桑田熊藏
●蠶絲業界多年の輿論　衆議院議員　工藤善助
●工場主と職工　伯爵　正親町實正
●絲質の均一は器械の改良に任ず　三重縣農業技師　安東潛
●浸水及絹布に就て　法學士　內田定槌

講筵

●「フォルマリン」檢定法　農學士　辻暢太郎
●製絲原料繭について　東京蠶業講習所教諭　小野くわ子

心影

●蠶業界の恩人佐野理八君　小田宗孝
●器械製絲の恩人　峰村喜藏

遠響

●滿洲の蠶業に就て　秋田縣農業試驗場技手　長岡哲三
●伊國の栽桑業
●露國の蠶業
●佛國昨年の收繭額

問答

●不眠蠶其他に就ての質問竝答●桑樹の病害に就ての質問竝答●「ゴム」質に就ての質問竝答●不要存置國有林野拂下に就ての質問竝答

說林

●天蠶及柞蠶飼育の利益（青木勸平）●蠶種鄭返に對し當局者の注意を望む（馬場政五郎）●貿大に研究を要す（鳥羽久吾）

資料

●臨時桑園經濟調査　木下富之助

絲況

●横濱市場●里昂市場●紐育市場●廣東市場●上海市場

時報

●會務錄事●文會長の巡視●地方會長の巡視●山形支會第二回總會●受賞者人名●會員動靜●蠶業補報●山梨縣製絲工女の功績●蠶種鄭返に就て●製絲組合の創立●明治三十九年度の各縣生繭の收繭高●蠶業講習會●本年の病蛆生繭檢査所月報●蠶況消息●無題●新刊紹介●雜報●文會錄

大日本蠶絲會報　第百七拾八號

蠶絲業に關する經濟組織に就て（承前）

農學士　加賀山辰四郎

蠶絲に關する業務中共同經濟の方法に依り營爲するに可なるもの甚だ多し、今其主なるものを擧ぐれば左の如し。

肥料、農蠶具、蠶桑用器具及藥品、桑の種苗又は蠶種の購買、蠶種の貯藏及催青、稚蠶飼育、殺蛹乾繭、繭の貯藏、蠶種又は繭の販賣、生絲の揚返及荷造販賣、

而して、是等の業務を營爲せんには、如何なる手段に依るべきか、予輩は産業組合を組織し其運用に依るを以て最も良策なりと信ず、請ふ少しく說く所あらん。

産業組合は如何なる目的を有するやは、産業組合法第一條の規定する處にして、之を概括すれば、産業組合は組合員に産業の資金を貸付け、貯金の便利を與へ、組合員の生産物を取纏め、其後又は加工して賣却し、組合員の産業又は生計に必要なる物品を購入し更に之を組合員に賣却し、生産に必要なる機械器具等を備付け、之を以て、組合員の生産したる物に加工するか、又は之を組合員に貸付使用せしむる目的を以て設立する社團法人を謂ふものにして、前に掲げたる各種の業務は、一として産業組合に依りて營爲せられざるものあるなし、即ち購買組合を設けて、肥料其他生産上必要なる各種物品の購入を爲し、生産組合を設けて蠶種又は繭の貯藏、催青、稚蠶飼育、殺蛹乾繭、消毒用器具の共同使用を行ひ、販賣組合に依りて繭又は蠶種の販賣、生絲の揚返及荷造販賣を營爲するを得べし、又信用組合を設けて、蠶絲業の經營に必要の資金の融通及組合員餘財の貯蓄を爲すを得べく、而して、是等の組合は相兼營するを以て便利とする場合尠なからざるべし。

或は說をなすものあり、曰く、本邦蠶絲業の規模小にして共同勤作の必要なるは之を領す、而も必しも之を産業組合の設置に待つの要を見ず、隨時同志者相集まり一時の團體を作り共同勤作を爲せば則ち足る、現に共同購入の如きは近時各地に行はるゝも、必しも産業組合の組織に依るものにあらず金融及貯金の如きも、信用組合の組織に依らずして、其實を行ふもの尠なからず、何ぞ其名に拘泥するを要せん、須らく其實を取るべきなりと、是れ或は一說たるべし、予輩か徒に

形式を云爲するものにあらず、實際に於て共同的に經濟上の活動を爲すを以て目的となす、若し產業組合の設立以外の方法に依り此目的を達するを得は是亦可なり、現在極めて簡單なる申合規約の下に結合せる團體の作用に依り又は單に口頭の約束に基き、共同事業をなし其成蹟の良好なるものあるは予輩の認むる處にして、團體の區域狹く、團體の數少く、且つ事業の性質單純なる場合、團體員に對し絶對的信用を有する人物が經營の局に當り、其人の一言が團體員間にあり て定然の規定と同一の効力を有するが如き場合、又は多年の經驗が一種の不文定欵となり、此不文定欵の下に自由の活動を爲し得るが如き場合等に於て多く此例を見る、然りと雖も、將來社會の趨勢は法律關係益繁雜となるは免るべからざるを以て、此間に立つて鞏固なる基礎を保ち十分の活動を爲さんとせば人的資格を有し財產の所有其他法律行爲を爲し得べきものならざるべからざるは、予輩の信じて疑はざる處にして、產業組合は實に此資格を具備するのみならず、他に一種の重要なる目的を包含する事實竹て產業組合と組合員との關係を選べたる一節に曰く

產業組合は、組合員の產業又は經營の發達を企圖する爲め設立するものなるを以て、資金の貸付を受け、貯金の預金を爲し賣買賃貸又は生產上の便益を受くるものは必ず組合員に限られ、決して他に及ばず、即ち組合は組合員の出資共他組合の信用に依り團結したる資本金及び組員の產業上の便益に及ぼす、ふるものなるに依り、共同自活の形式と精神を有する點に、恰も殖力加度に於ける市町村と相似たるものあり、故に一旦組合を設立したる以上は、個々其組合は眞立の團體たるに相違なきも、其實組合の組織したるものの自身が組合に依りて便益を受くるものなる者故に、組合員と組合との關係は、市町村住民か市町村に對する如きものあり、是ゆえに見れは、產業組合は共同の產業を以て團體を組織し業務を營む點に於て、又其業務の種類に於ても商事社に類似するものあり と雖も其根本の性質に於て兩者の間大差あり云々。

東京博覽會會場（其一）

又產業組合は信用を基礎とすべき事に就き述べて曰く。

產業組合は組合員各自の信用と僅少の資本とを提供し、合同したる信用と資本とを以て組合の事業を營むものなれば、組合員の人的信用か以て組合の基礎となさるべからず云々。

是を以て見れば、產業組合は單に經濟機關たるのみにあらずして、人的信用を基礎とし自治自助の精神を有する經濟團體なりと謂ふべし、而して各種の經濟事務を營み組合員に於て物質的便益を與ふると同時に、一方に於て其運用上自然の結果として、益自治自助の精神を涵養し、組合員の社會的結合を堅固にし、國家の福利を增進するに於ても有力のものたり、產業組合法に於て、產業組合を認めて社團法人となし、所得稅及營業稅を免除し、登記に就ては營利を目的とせざる社團法人と同一の登錄稅を納めしめ、組合員名簿の記載は登記と見做し、其記載に對しては全く登錄稅を課せざる等の特典を與ふるも、果竟產業組合は前述の如き一種の公益上の目的を含有すればなり

予輩の產業組合の設置を勸奬し、其巧妙なる運用を切望する所以亦實に茲に存す、而して予輩は其設立の一日も速ならんを希望して止まず、蓋し設立一日の早きは即ち一日の長たるを思へばなり惟ふに產業組合の如き一時の利益のみを目的とせず、徐々に其結合を堅固にし、其活動の範圍を擴張すべき性質のものにありては、決して一朝一夕に其成効を期すべからず、かの坐繰製絲の共同販賣を以て有名なる上州の碓氷、甘樂、下仁田三社の如き、明治三十八年の現在に於て、三百の組と、五萬餘の社員を有し、七百萬圓に近き生絲の販賣をなせるは明治十一年以來幾多の苦心慘憺の結果に外ならずして、此間何等法律の據るべきなく、單に相互の申合規約の下に、幾萬の社員は重役の誠實と伎倆とに信賴して其經營を任し、退年社員の數及製絲高を增進し、能く今日の大を致せるなりといふ、組合の設立及經營の局に當るものの功を一擧に收ひるに急ならんよりも、最も秩序ある漸進的發達を目的となさるべからず。

其上陳ぶる處を總括して之を約言すれば、

一、世界蠶絲の需要と益增進し生糸賣易は將來有望なる事

一、世界の競爭に於て能勝の位置を占めんには其品位及價位に依賴するの工夫肝要なる事。

一、此目的を達するには、技術上の改良を期すと共に、生產及販賣に關する經營組織に改善を加ふる必要とする事。

一、本邦現在の蠶絲業に關する經營組織は概して小規模にして經營上幾多の不便不利を免れざる事。

一、故に其業中興共同經營に適するものは共同經營の方法に依り營爲すべき事。

一、產業組合は之を奮行するに最も適當なる機關なるを以て速に之を設立利用すべき事。

といふに歸着す、當業者にして、現時本邦蠶絲業經營方法の決して時勢の要求に適するものにあらざるを思ひ、斷然之を改造するの必要を自覺し、養蠶家にありては、蠶種の購入より收繭の處理に至るまで、製絲家にありては原料の購入より製品の販賣に至るまでの業務中、共同經營に適するものは擧げて之を產業組合に依りて營爲し、生產及販賣に關する費用を省減すると共に、生產品の品質を整理改良するに至らば、本邦の蠶絲業は眞に堅固なる基礎に立ちて、健全なる發達を遂げ國家の福利を增進する蓋し偉大なるものあらん。

農商務省會員
東京蠶業講習所技手　高橋伊勢次郎

卒倒菌の毒素に就て

蠶の卒倒病は軟化病の一種にして、劇烈なる傳染性の蠶病なりとす、而して其原因は卒倒菌と稱する病原菌の寄生に因りて起るものにして、此病原菌は已に世人の知る如く石渡農學士に依りて發見せられたるものなり。

同菌の所在分布は頗る廣くして猶り蠶に寄生して病原をな

すのみならず、近縁の昆蟲にも亦寄生すること甚だ少からず、然と云ふ、尙土壤中に於ても其存在を認することあり、或は又桑葉面にも附着存在することあり、從て屢々蠶の消食管にも亦存在することありとす、近來岩澤氏の研究によれば蠶蛾の體内にも亦存在すと云ふ。

卒倒菌は此の如く廣く存在するものなるが故に、蠶兒の消食管内には屢々桑葉と共に入り來るものなれども其數少なきを以て其だしく繁殖せざる間は、蠶兒は本病を發することなく、然りと雖ども今若し試みに多量の卒倒菌を採り、之を桑葉に塗抹して蠶兒に添食するときは、蠶兒は激烈に發病して十數分にして斃死するものを認むるなり、斯の如く蠶兒が本菌を多量に食するときは、死に至る時間甚だ短くして、菌の繁殖すると雖あらざれば、繁殖寄生し養養分を奪取し、或は組織を破壊したる爲めにあらざるべきは自ら明かなりとす、何んとなれば本菌が蠶體内に於て繁殖し蠶兒を斃すに至るまでの時間は、比較的長時間を要するものにして、本菌を蠶兒の皮下に接種したる場合に微するに、少くも二十時間内外を經過するにあらざれば蠶兒は斃死せざるを常とす、加之添食によりて斃死したる蠶兒を死後直ちに剖檢するに、其消食管内には常に添食したる卒倒病菌の消食管内に於けるが如く多數にして、自然に發したる卒倒病菌の消食管内に於けるが如く多數繁殖し又は寄生したる形跡を認むることを能はざるなり、然らば添食により起る發病の原因は如何なる理由に基くものなりや今之れを發病したる蠶兒の狀態に微するに蠶兒が甚だしく苦悶して恰も毒物に中毒したるものの如き狀態を呈するよと云ふ、推測するときは、其發病の原因は恐らく已に本菌が生産せる毒素の作用なるべし。

本菌の病原作用は之を培養したる培養基の固體たると液體たるとにより、或は培養後の時日の長短によりて著しき差あり、即ち「ペプトン」水等の如き液體培養基に培養したるものは、病原作用極めて微弱にして、寒天、腥質等の如き固體培養基に培養したるものは前者に比して毒力强く病原作用の强烈なるを常とす、又培養後時日を經ること長きものは短きものに比し、病原作用激甚なりとす。

又毒力强き本菌を蒸汽或は其他の高熱に觸るゝときは、數時間の長短に從ひ毒力を減ぜしめ、或は全く失はしむることを得べし、之れ病原作用のみを減ぜしめ、或は全く失はしむることを得べし、之れ病原作用のみを減ぜしめ、或は分解するに因るなるか、又液體に培養せる本菌の毒力弱きは、本菌の性質として空氣の供給豊かならざる液體中にありては、毒素を生産するの量少きに基因するものならんか。

毒素を生産する病原菌中の或ものは、其培養液を「チアンバーランド」氏の濾過器にて濾過するときは、菌體と毒素とを分離し得て毒素の生産を證明し得るものあれども、本菌にありては毒素が菌體外に產出されゝと少きか、或は菌體に密着して水に溶解し難き形質にて存在するものか、普通「チャンバーランド」氏の濾過法によりて分離するなり、故に若し本菌が毒素を生産するや否やを證明せんとするには毒素に變化を及ぼさゝる方法によりて菌體の生活力を殺き之を蠶兒に試みて發病するや否やを調査せざるべからず、然るに本菌は固體培養基に於ては速かに胞子を形成し、其胞子は抵抗力頗る强きが故に、殺菌力弱き藥品及「エネルギー」によりては胞子を殺滅すること頗る困難なり、若し夫れ殺菌の大なるものを用ひんか、能く之が胞子を殺すことを得べしと雖ども、同時に毒素を變化を及ぼすを以て好果を收め得ざること多し、更に又胞子の形成遲き液體培養基を用ひんか、比較的容易に殺菌の目的を達し得るも、毒力の微弱なると該培養液は蠶兒が甚だしく嫌忌して、容易に之を食せざるとにより、試驗の目的を達すること頗る困難なりとす、從來本菌の病原作用に就き研究に從來したる者が毒素の分離を企て大に苦心したるも、果竟するに如上の困難ありたるに由るものにして、能く其目的を遂げたる者あらざりしなり、近年に至り澤村農學博士及石澤農學士は、殺菌する方法によりて之を證せられたり、即ち其殺菌の方法は澤村博士は寒天培養基に培養する卒倒菌に「フォルマリン」の少量を加へ、同菌を殺滅して試驗に供し、石澤農學士は寒天培養基に培養せる同菌の既に胞子を形成せるものを、瑪瑙の乳鉢にて磨碎し、尙之に二十五倍の稀釋したる石炭酸の同量を注加して殺滅したるものを用ひたり、斯の如くして殺菌したる本菌を蠶兒に添食して蠶兒の中毒發病するものなることを證せられ、以て本菌の病原作用は毒素の生産に基因するものなることを報せられたり。

余も亦嘗つて卒倒菌の研究に從事し、毒素の分離を企て之が毒素は濾過法によりて分離すること能はざるを知るや、殺菌法によりて之を獲んとし、各種の化學的殺菌劑を用ひ、或は蒸汽、日光及其他の理學的方法により、毒素に變化を及ぼすことなく、殺菌し得る方法を探究せんも、多くは其目的を達することと能はざりしなり、昨三十八年偶々水銀を用ひて之を試みゝ其生活力を失ひたり本菌を添食せしに、蠶兒は卒倒病の病徵を呈し、遂に斃るゝもの八十%の多きに達せるを認めたり、元來水銀は生物に對して有毒なるものなれば其死因は之が中毒に基因したるものにあらざるゝものやを疑ふ者あるべきも、その然らざるは非病原菌を前者と同一の處理を施し、同時に添食せる蠶兒が異狀を呈せざりしによりて明かなりとす、若し其死因水銀の中毒なりせば卒倒菌を添食せるものと同樣非病原菌を添食せるものに於ても、水銀の中毒によりて斃死せざるべからざるに、其然らざりしは水銀の中毒にあらざりしを證するものなり。以下余が研究して得たる成績を記載し參考に資せん。

供試の卒倒菌は寒天培養基に培養して後七日を經たるものにして、毒力の强きものを採用せり、殺菌の方法は臺「ガラス」に之を塗り、其水分の揮發したるものを採り、之を水銀の小箱を容れたる二重皿（ペトリー氏シャーレ）内に架を設けて、其上に置き、又對照として非病原菌を同一に處置したるものを、同器内に容れ置き、後二週日を經て生活力の有無を檢する爲め、之を培養せしに、菌は發育せずして悉く生活力を失ひたることを知り得たり、依て右細菌を秋蠶白龍の三眠起後二日間絶食し置きたる蠶兒に添食したりしに、非病原菌を添食したるものは、何等の異狀を現はさざりしも、卒倒菌を添食したるものにありては添食後約二十分にして發病し

豚管の後背部は頻りに鼓動し、蠶兒は呼吸切迫したるもゝ如き狀を呈し、次て體の前半部を擡げ左右に振りて頗る苦悶せし末、翌食後一時四十時を經て一頭斃れ、次て續々斃死し、二頭は死を免れたりと雖も、遂に滿足なる發育を遂ぐること能はざりしなり、而して此等の斃蠶を數日の檢割檢し、卒倒菌の存否を調査せしに何れの部に於ても本菌の存在を認めざりしなり、今左に添食後斃死に至る時間及び斃蠶數を表示すべし。

區別	目標	三十八年八月十二日午後二時十分	同日午後四時	同日午後四時	同日午後八時	同日午後十一時	同十一日午前七時	同日午前十時	同日午前十一時	同日午後三時	總數	合計
卒倒蠶	十頭に添食す	病蠶を斃す	一頭死す	同上	同上	同上	同上	同上	同上	二頭死す	八頭	
非病原環狀蠶	十頭に添食すし	異狀なし	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	〇	

有の成蹟によりて之を觀るに、卒倒蠶は毒素を生產するところの細菌にして、同菌の病原作用は即ち生產毒素の中毒作用に基くものなること詳かなり、彼の蠶兒に多量の同菌を添食したるときは、少時にして劇烈に發病するが如きものにして、即ち同菌の生產したる多量の毒素に中毒するに因るものにして、同菌の繁殖寄生に基因するものに非るは明かなりとす。

蕉笠

みのむしとは知れつゝ梅のさかり 微

蠶體内に存する大なる腺細胞組織に就て「ペルソン」氏の論文（承前）

蠶業講習所技師
學藝委員農學士 石渡繁胤

（一）、氣門下腺（Cellule glandulari ipostog mateche）は細胞の大なるものと云はれたるものなり、是等は腹部氣門の附近に存在し、胚子發達の末期に於て出來たるものなり、而して幼蟲より蛹及蛾の狀態に於ける經過中、數に於ては變化なしと雖ども其形に於ては中止することなく常に增大す、不明の成分の分泌をなすものなり。

（二）、周氣管組織及同心組織（Cellule glandulari perimeteliio pertracheiali）の二者は其形狀同樣にして區別不明なり蠶兒の背面の皮膚を正中線にて截り之れを左右に擴げ、消食管及絲腺を除去するときは速に脂肪組織の白くして錯雜せるものあるを見るべし而して尙之れに混じ黃味を帶たる絲狀の網狀をなせるものを見出すべし、黃繭種に於ては最も脂肪組織との區別分明なりとす、肉眼に於ても尙之れを區別するに困難ならず、此組織は蠶體の兩側を縱走せる大氣管に沿ふて存在するものとす。

腹面に於ては全く之れを缺く、然れども第三環節に於ては一つの首飾狀をなしたるもの存するあり、之れは左右の氣管に沿へる組織と連絡せるなり、即ち食道と胃の界に於ける消

食管の下部を抱くものなり。

黃色の網狀の此組織の一部は背脈管及之れに附着したる扇狀筋肉に關係するものにして、實に其原を背脈管に發するものなり、之れを同心組織とす。

細走氣管に沿ふて存在せるものは之れを周氣管組織と稱するを通常とす、但し此二者の區別に至りては判然せざるなり

核は一般に後じ、而して多少周圍に於て分裂せり、又組織の接合部に於ては其核を大にせるものあり。

組織は幼蟲の時代に於ては脫皮の際に於て或る速度を以て其數增加す。

蛹に變化するときに於ては兩者の區別を明にするものあり即ち同氣管組織は分解消失すと雖も、同心組織は其後に至りても尙存在す。

膿蠶の研究

農學士 田村兼蔵

其一　新舊膿汁傳染力の研究

明治三十九年六月二日前年春蠶期に採集したる膿汁を桑葉に塗抹し、第二眠起の又昔三拾頭に與へたりしに六月十一日に至り二頭の膿蠶を頭出せり。

同月同日新鮮の膿蠶を採集し其液汁を採り之を桑葉に附着し與へたりしに、六月十一日に至り三拾頭の試驗蠶中拾四頭の膿蠶を生ぜり。

これに依りて之を見れば新鮮の膿汁は傳染力强くして滿一ケ年を經過したるものは其傳染力著しく減退せることを知るべし。

其二　膿蠶と蛆害に關する研究

蛆害を受けたる蠶兒は膿蠶となるとの說あれども此れ蛆害を受けたる蠶兒膿蠶となるにあらずして、一頭の蠶兒にして蛆害と膿病とを併發せるものにして、必ず蛆害を受けたるものは膿蠶となるものにあらざるなり、該問題に對しては昨三十九年に於て予は之を研究せり、即ち蛆害を受けたる蠶兒蠶蛹を數十頭採集し之を檢査したるも一頭だに多角體を存するものなし、是れによりて之を見れば、蛆害を受けたるものは、必ず膿蠶となることなし、若し偶膿蠶となりたるものあるも、之は即ち兩病を併發せるものなり、故に必ずしも蛆害を受けたるものは膿蠶となるものにあらず。

其三　膿蠶病原體の研究

本病原體は球圓なる細胞寄生微生動物にして自動の性なし其發育は細胞内に於てし成長極度に達すれば全體に被膜を發生して以て圓疎す、而して其内容は數多の胞子に分裂し、胞子は厚き胚胞膜にて包有せらるゝものなり。

本病原體の染養眞を攝收して自體の成長を營まんとする其の發育の間は常に細胞内に寄居して、其發育を遂げ自體を包圍すべき包囊發生するに至れば即ち此處を去る、蓋し從來寄

生せしところの細胞は全く桑養質を吸收し、又病原體の用に供するものなきに至ればなり、而して包囊は是れより機關の組織中に入りて活するものなり、本病原體は單食性微生動物にして、主に蚕管膜及脂肪組織に寄生するものなり、此等の寄生を受けたる細胞は病原體のために侵傷せられ遂に全く枯死す、而して其の害たるや主に器械的傷害にして、病原體の細胞より桑養を採りて成長するに際し細胞核をその側壁に壓して細胞内の大部分は自ら其體を充滿するに至る、而して細胞は時を經過するに隨ひ大に膨脹ず是れ蓋し一は其實性肥大と一は成長しつゝある病原體の壓迫とに因るものなり病蠶の肥大なるは病原體の細胞に侵入するや、大に之を刺戟して以て之を肥大なるむ、困るかゝし、然らされば寄生をを受けたる細胞肥大し又其蠶見肥大なるの原因他に之れあるを見出し得べからざるなり、斯の如く細胞の損傷より進んでは蠶體全部に傷害を來たし遂に死せしむるものなり。

本病原體の寄生を受けたる蠶見は傷害を被むり、液汁と共に胞子一時に暴生現出して、蠶室蠶具に附着し、桑葉と共に又他蠶見の體内に混入し、再び蠶體内に於て幾多の增殖をなすものなり。

〈其二〉 東京帝國美術館

病原體の形狀は略球形にして、胚胞は多角形をなせり、元來胚胞も亦球形なれども、厚き包囊内に多數に存在し、互に壓迫せられ爲めに多角形となれるものなり。

病原體の大さは種々にして〇、〇二乃至〇、〇二「ミメ」位なり、而して蠶齡の進むさるものに寄生せるものは其形小にして蠶齡の進みたるものに寄生せるものは其形大なり、此れ被寄生細胞の充間的關係に起因せらるゝものゝ如し。

病原體内に顆粒質存在の多少によりて着しく暈色し、或は然らさることあり、概ね透明にして少しく黄色若しくは青色を帶ぶ。

實體の構造は甚だ簡單にして、只數多の顆粒質と一個の核を含有する成形元體より成る。

幼期に於ける病原體の成形元は甚だ微細なる顆粒性にして其質殆ど透明なり而して既に成熟するものに於ては、その成形元質内に數多の顆粒發生して、屢々成形元質を蔽ふ。

桑養は主として寄生せる細胞よりその流動、桑養質を自體に吸收し以て之を營む、該桑養質は胞子の成大に能く適するものなるが如く、又該質は顆粒質の形成にも供せらるゝものなり。

既に成長したる蠶體には自動の性なきも、胞子には運動性を有するものゝ如し、而して胞子の細胞内に侵入するや、忽ち運動止みて包囊を形成し了るまでは持續靜息するなり。

而して寄生生活の一順期終りて成長極度に達すれば、即ち包囊膜發生して增殖の機能起る、包囊膜は薄き成形元層にして透明滑澤なり。

胚胞は囊膜の破裂を待て初めて外に出づるものなり、胚胞は多角形にして包囊内の內容分裂すれば胚胞化生す、胚胞の內容胞子に化成するものにして成熟たる胚胞は胞子を收むるものなり。

胚胞の外面は滑澤平等にして、胚胞の大さは蠶齡によりて異なるべきも概して〇、〇三七「ミメ」内外なり、胞壁緻密堅剛にして二層に區別し得べし、即ち外胞膜及び内胞膜是なり胞子は胚胞より生出するものにして、胚胞内の成形質は透明なり、胚胞内に生ずる胞子は包囊破れて後胚胞膜等て破るゝにあらざれば遊離する能はざるものなり、故に胚胞の蠶見の腸内に入るや一二晝夜位にして外胞膜壁に一の裂隙を生し内胞膜は内に存する胞子の强盛なる運動の爲めに自然破裂するならん。

病原體の成熟胚胞は桑葉に附着して蠶見の消化器内に收容せらるゝや以て、本病の傳染は口部よりするを普通とす、胚胞消化器内に入るや、此處に溜留するより消化液の作用によりて胞膜破解し、胞子並離して腸壁内に突入し氣管膜若くは脂肪の細胞内に侵入して、細胞核と其胞壁との間に寄生するものなるべし、斯の如くなれば胞子は宿主細胞より桑養質を奪收して、漸く成長發育し、自體愈大となれば細胞核を側方に排し細胞壁は次第に外方に向て壓迫せられ、擴張膨大し發育既に完く豫備桑養質を多量に製作すれば、蟲體の周圍に被膜發生して、病原體こゝに於て包繞態に變し、これより時を經て其の包囊中に數多の胚胞を化成す。

胚胞は其質全く耐久性あり、是れ蓋し其の胞子が蠶見の體内に存するときも、赤體外に排除せられしときも、外襲あるに能く抵抗し、以て生活力を保持せんがためなり即ちこの性あるが爲め春蠶より夏蠶に、夏蠶より秋蠶に、秋蠶より翌年の蠶見へと傳染播殖するものなり。

其四　農蠶病原體の染色に關する研究

農蠶の胚胞は之を染色する方法未だ研究せられず、全く染色せざるものとなせり、然れとも著者の研究によれば胚胞の包囊内に存するものにありては、二三分時にして「アニリン」水、「サフラニン」に能く染色し包囊外に出でたるものは永く染するも尚ほ完全に染色せず、包囊内に存ずる胚胞染色劑の製法は左の如し。

「サフラニン」

一

無水アルコール　一〇

「アニリン」水（水一〇〇中に「アニリン」油五を加へ攪拌して四分間靜置し後濾過して用ゆ）九〇

其五　農蠶豫防驅除に關する研究

本研究は左の方法によりて之を施行し其効あることを認めたり。

（一）浸渫法　明治三十九年六月六日鑑蠶より鑑汁を採集し、之を硝子板に塗抹して乾燥し、六月七日華氏百五十度の温湯に二十五分間浸し、後之を水にて温し桑葉に塗抹して三十頭の蠶に給與せしに一頭の鑑蠶なる顯出せず。

前年に採集したる鑑汁を以て有効樣の試驗を行ひたりしも其成績前者に同じ。

（二）フォルマリン撒布法　三五瓦冗の「フォルマリン」を三倍に稀釋し「ムラット」式噴霧器にて之を撒布し以て消毒の手段をなせり、本試驗も亦其方法浸渫法に同じ、而して一頭の鑑蠶なる顯出せず。

（三）蟻酸「アルデヒード」瓦斯燻蒸法　蟻瓦斯に六時間接觸せしめたるものなり其他の手續は浸渫法に同じ而して又一頭の鑑蠶なる發生せず。

（四）比較の爲め硝子板に鑑汁を塗抹し靜に乾燥して後水にて温し、之を桑葉に塗抹給與せり、然るに六月十八日新鮮の鑑汁を塗食せしめたる成對に、二頭の鑑蠶を生じ前年の鑑汁を以て施行せし區劃には一頭だも鑑蠶を顯出せず。

以上の成績によれば華氏百五十度以上の温湯に二十五分間浸すときは、病原菌は撲殺せらるゝこと明かなり、又「フォルマリン」及び蟻酸「アルデヒード」瓦斯も其効あること知るべきなり。

結論

（一）膿蠶は傳染病なり。

（二）膿蠶の病原體は原生動物中胞子蟲に屬すべきものなり。

（三）膿蠶病原體は新鮮のもの程其傳染力强し。

（四）病原體は主として桑葉に附着し消化器内より傳染す。

（五）膿蠶は熱湯「フォルマリン」蟻酸「アルデヒード」瓦斯等にて消毒すべし。

（六）就眠の際不眠蠶光蠶等を除去すべし。

（七）膿蠶は之を見當り次第拾ひ取りて燒棄すべし。

蠶絲業に就て

（本會臨時總會に於て）

特別會員　貴族院議員　男爵　船越衛

諸君此度は大日本蠶絲會臨時總會を開かれまして、私も臨席するやうに會員より招狀を忝ふし此に臨場致しました偖て此會を此所で開かれましたのは誠に適當なことであると思ひます。

又今日御來會の諸君も多數であつて、私も會員の一人として誠に欣喜に堪へませぬ、就ては何か一言述べまして祝辭に代へやうと存じます。

國家の富强と特殊の物産

抑も國の生産の盛衰人民の勤惰と云ふことは國家の貧富强弱に關すること大なるものである、それ故文明各國に於ては

殖産を發達せしめ、富を計り國家の富强を計るのである諸君も御承知の通り往昔仁德帝は、高き家に上りて見れば烟立つ民の竈は賑にけり

と御製遊ばされました、即ち民が富めば國家が富むと云ふことを御讀み遊ばされたのであらうと恐察し奉る次第でありまして、而して國を富ますには、ドウしても農工商の三つが相列んで進歩して行かねば眞の富國にはならぬと思ふ、然し國に依つては工商を以て立國の大本として居る、所もあり、我日本などでも工商立國と唱へて居る人があるが論商工も盛にならねばならぬが、併し我國には工業製作の其原料は多くは農から出てそれを工で製作し之を商で商賣するのであるから、此の三者は環の廻るが如く共に輪一廻偏一廻すべきものにあらず、私は考へる、即ち內では農工水産を發達し、外に對しては商業を益々擴張し、進歩を謀ることが肝要と思ふ、而して其農工商と云ふものが何れの國が相列んで進んで行くか其內に特殊の物産と云ふものが何れの國にもある、其の一二を擧げますと御承知の通り英國では鐵、石炭或は木綿織物、其外種々ありますが、大きなものでは造船業が餘程進んで居る、米國では綿、小麥がある、露國では石油麥、佛蘭西では葡萄酒、絹織物、其他美術品では「コブランツ」の織物、セーブルの陶器も亦世界に最も名が顯れて居る獨逸では麥酒などを盛んに他國に出して居る、近來獨逸では最も實業と學問と相俟つて進んで行く誠に驚くべきことである。

東京博覽會機械館及遠天橋（其三）

本邦に於ける特種の物産

而して日本では、昔封建時代のまだ外國へ輸出などを計らぬ時に日本中の國々藩々万に特殊の物産がありました、即ち米澤の織物などは私共幼少の時から聞及んで居る、又土佐の紙なども余程盛大に生産して居る、或は薩摩の砂糖……之に重ねて琉球及大島で生産したのであります、薩摩が藩力で生産させて之を大坂などに出して余程商賣を盛んにしつゝあつたのであります、又筑前からは博多織が出て、或は奥州南部仙臺の馬にして曾て官民相俟つて名聲を揚げることが出來たのであります、或は富士縣の甲斐絹郡内などは一物産である、之等は皆藩々及其所の有志の奬勵と勉强の結果にして今日は海外に輸出して居るものが多くある、昔は封建時代ですら既に斯の如し、然るに封建時代は去つて今日の新代になつて日本全國一致して事は昔から世間に名聲を博して居る或は一物産である、之等は皆藩々及其所の有志の奬勵と勉强の結果にして今日は海外に輸出して居るものが多くある、昔は封建時代ですら既に斯の如し、然るに封建時代は去つて今日の新代になつて日本全國一致して事

をすることになつた以上は彌々日本全國一致して生産を盛んに御承知であるが、其實易即ち我國より諸君が疾に賀易を盛大にしなくてはならぬ、夫等は私ども海外に輸出する物産の中で何が一番大なるものであるかと云ふと、綿糸、絹糸、綾、茶、石炭之等は皆な千萬圓以上の輸出であつて、然して蠶糸、絹織物は實に我國特殊の物産にて、三十七年の統計で見ても一億三千萬圓であつて、日本輸出の三分の一以上を占めて居る、それ故之は益々盛大にして國の富強を計らねばならぬと考へる、諸君も御同感であらうと、又光刻田中君も段々述べられた如く、蠶糸家も相俟つて共同して進歩を計る為め、私も同感である、又養蠶家も、諸君は私も御勧め申すが、君が最も桑を益々繁殖させることを考へて居るために諸君には諸君の御熟知になつて居ることを順みず、私の希望を述べた次第であつて益々御奮勵の上本業の改良發達に御盡力あらんことを希望の至りに堪へんのであります。

昨年の世界造船噸數

昨年に於ける世界の造船噸數は特別に之なく如き能はざるも其大體を算すれば米國は四十六萬五千噸伊國は六萬千五百噸に比して他の歐洲各國は前年に比して稍別異なる事なく日本は九萬六千噸にして前年の二倍以上に達せり而して英國殖民地の造船噸數は二萬八千七百噸を數ふべく世界の總噸數は百百三十五萬千噸に上り前年に比して四十萬九千噸餘を年に較ぶれば十萬噸の增加なりと云ふ

と其の發達進歩は計られない、諸君は疾に御講じてもあらうが、どうか此上學理を一層研究されて出來るだけ桑を繁殖させる事を御講じあらんことを希望致します。

是等は既に諸君が御熟知なる蚕人の私が斯くも貧賤なるを嘆ずる如く絹織物を交ぜて我輸出價額の三分の一以上を占めて居る、其盛衰と云ふものは實に國家經濟に關する業にて而かも諸君は國家に盡す責任を負はるる人であるから、然し責任と云ふも法律上や規則上にて云ふには非ず、諸君が盡されば別に其人なきを以てある、實に此事業は國家經濟上必要なるものである故、私も本會の一員であるから諸君に及ぶだけの力を盡さうと考へて居るために諸君の御熟知になつて居ることを順みず、私の希望を述べた次第であつて益々御奮勵の上本業の改良發達に御盡力あらんことを希望の至りに堪へんのであります。

予が今一つの希望

それから學理の應用は前に田中君の他々有益の御演說があつて別に申上げることは無いが總ての事が學理を應用しないことが出來ない、て產業（組合なり、其他育蚕なり）になつて之を利用して益々本業の發達を圖られんことを希望致します。

思潮

本年養蠶業の豫想

學士會員
東京蠶業講習所技師　土屋泰

昨年の養蠶業は頗る多難であつた樣に思ふ、彼の編島群馬及び栃木縣の一部に於ける桑葉凍害の慘狀は今より回想するも戰慄する、又岐阜愛知を始め全國各地に於ける蠶繭の害も隨分甚だしかつた、然れども當業者か戰後の勇氣を鼓して業務を復活したる結果と、それから横濱市場の好況なる結果とは、生絲の輸出金額は無慮一億一千萬餘圓に達したのである、蠶絲は吾國の經濟を維持する唯一の命脈であると云ふことは久しく前代無比の巨額に達したのである、又我邦の命脈たる常套語であつたが、戰後第一年目の豫業なる年柄に當り是を現實にしたのは吾々の補償とする處である。

戰後第一年の蠶絲業は其名の如く作柄の上に於て滿足する程ではなかつたが、結局右の如き好果を奏することが出來た、今や戰後第二年の蠶絲業は早くに既に六合目に達つたのである、其結果は如何であろうか、今から豫め之を知ることは素より難事であるが冬季に氣溫が平年より少しく高かつた爲に、種々悲觀的の說を耳にする向きもあるのである。

昨年十二月已來の氣候は少しく常規を逸し各地とも例に反かずであつたのは事實である、冬季暖かであつた年は夏秋季に至りて低溫であると云ふ言も古來の俚言の樣に思ふ悲觀說も此等の俚言を根據として多くは農作物の爲めに將た蠶種の爲めにも喜ぶべき筈ではあるまいか、成程冬季に溫かなことは農作物の爲め氣溫の高低に據りて直ちに蠶業の結果を喜憂するのは誤りである、勿論氣溫の高低に就て何度迄は宜しいか何度以上は不良と云ふ樣な判然たる境界はない、故に十二月以降の氣溫が平年に比して如何程の差があるか、又此冬季と同じ樣に暖かであつた年がありとすれば、其年の豐凶は如何であつたか調べて見れば彼の悲觀說の當否も自ら解決せらるゝ譯である、依て中央氣象臺で調べた最近拾貳年間の東京に於ける冬季の氣溫を見るに左の如く表示の通である、但し此表は福氏の度である。

年度	月次				
明治二十八年	十二月	一月	二月	三月	冬期平均
同　二十九年	五、三七	二、〇六	三、九五	八、五二	五、七三

明三十年	四、七七	三、六八	三、四六	三、九七
同三十一年	三、六六	三、六二	四、四三	三、九〇
同三十二年	六、三六	三、一八	四、一九	四、五八
同三十三年	五、四四	一、五六	三、〇六	三、三五
同三十四年	五、五三	四、〇九	三、七二	四、四五
同三十五年	四、五二	二、四三	三、七七	三、五七
同三十六年	七、一二	四、六〇	四、〇五	五、二六
同三十七年	四、〇九	一、九三	四、二五	三、四二
同三十八年	五、二四	四、三〇	二、七三	四、〇九
同三十九年	六、八二	二、一六	二、六〇	三、八六
同四十年	五、九〇	四、〇〇	未詳	
平均	五、五七	三、一三	四、〇六	

前表の如く昨年十二月の温度は、最近拾二年間に於ける平均温度よりも三度三分程高かりしも、之を三十五年、三十八年等に比較すれば却て低いのである、本年一月の温度も亦拾貳ケ年の平均に比べては〇、八分七厘程高いけれ共之を三十八年三十四年等に比べては却て低温である而して二月中の平均温度は未詳なれども立春以後の氣候は先づ順調の方であるから、累年の平均温度と大差はなからうと思ふ、今假りに累年平均と同度であるとしたならば、冬期間の平均は四度八分三厘にして、之を三十九年二十六年等に比して却て低いのである、故に本年の冬期は平年に比べて暖かであつたに相違ないが、之が爲に悲觀すべき理由はない、何となれば本年より暖かな二十九年三十六年等にあつても、相當の結果を掛たではないか。

要するに冬季間の氣温の高低と農蠶の豐凶との關係に就て古來傳ふる處の俚言は殆んど根據のない無稽の說と云ふべしである、從て本年の養蠶業は、冬季以來氣候の上に於ては悲觀すべき程の缺點を認めぬのであるけれ共、蠶種貯藏を等閑に付して省みざるもの、如きは多少の害を被つたかも知らない、桑葉凍害の有無も是亦豫知し難き事である、而して本年に限り特に憂慮すべき理由はないが、元來凍害なるものは高低氣壓の配置如何に由りて俄かに起る災害であるから、一朝此災害が襲ひ來たならば、一望際涯なき綠野も滿目荒涼たる慘狀を呈するは能く人の知る處である、故に養蠶家は年々豫め之を防ぐの設備を爲し、萬一に備ふるの必要なることは更に云ふ迄もなく、又敢て本年のみに限りたる譯ではない。

自然的關係の上より觀たる本年の養蠶業は、今日迄の處に於て未だ悲觀すべき理由のない事は既に述べた通りである然るに人爲的の關係上より觀察すれば却て大に警戒すべき事があると思ふ、外の事柄ではない、桑葉の供給如何が甚だ懸念に堪へないのでなり。

昨年來横濱絲況の良好なるに眩惑したる當業者は何んでも一攫千金と云ふ考へて、蠶室蠶具類の設備や桑葉の供給や將た人夫の手配などには頓着なく、妄りに過大の計畫をして中途に於て桑不足の爲に狼狽し惜むべき蠶を河川に投じたり又渡り掛けた橋で止むを得ぬとて無算當に不廉なる桑を購入し蠶は豐作したが大損害を被むる等の事實は得て此樣なる年柄に多いのである、所謂鹿を逐ふ獵師は山を見るの暇がない道理で人情の常ではあるが、養蠶家としては大に警むべきことである。

或人は云ふ昨年は凍害や蠁蛆の害で蠶種製造額は少い、其

上に各地とも桑樹の増殖に務めて居るから本年は桑不足は萬々あるまいと、成程一應尤もな樣であるが、現に昨年秋季以來蠶種缺乏の聲は各地とも盛んなものである、是が單に製造額が少ない爲ばかりではないと、當業者が需要する額が平年より多い關係も與かつて居ると思ふ、假に蠶種は平年より少額としても平年なれば一割位は賣り殘りのある種屋も本年は全く箱の底を叩いて供給し盡して居るから、養蠶家の手に歸して居る蠶種は平年と殆ど同額と見ることが出來る、夫れでも養蠶家は滿足する程蠶種が得られぬから、ハシリ蠶も晩出蠶も悉く掃立するであらう、多數の人の心が皆一樣にそうなるから、蠶種の數量よりも蠶兒は割合に多くなる、往昔から蠶種掃底の蠶澤山と云ふ俚言がある、之に反して當業者が一樣に業務を縮少せようと云ふ氣運のときは、蠶種製造額は多くなくとも餘りが出來る、假令之を養蠶家に賣り付けても掃立の際に先後を掃き棄てたり、飼育中も惜氣なく淘汰したりするから、蠶種澤山の蠶掃底と云ふ結果になる、而して本年は蠶種掃底の蠶澤山と云ふ年柄で桑相場の暴騰する年ではあるまいかと思ふ。

桑園も近年増殖してあるには相違ないが、是と同時に夏秋蠶に摘葉する爲に既設の桑園が衰微して收穫を減ずることも忘れてはならぬ、殊に昨年の如きは繭相場の高かりし爲めに夏秋季の摘葉は一層苛酷を極めてある、故に増設の桑園位は差引ゼロかも知らぬ。

要するに養蠶家が業務を擴張するは吾々の喜ぶ處であつて生絲の輸出額は一億一千萬圓は愚か二億三億にもして欲しいが、無謀山師的の計畫は今更ではなく止めて貰いたい、秩序ある眞面目の計畫を立て、萬々蹉跌失敗のない樣にして欲しい、少しの蠶を飼育して多くの利益を確實に得る方法は即ち是である、而して春蠶を飼育し、若し桑に餘剩があつたならば夏蠶を飼育すべしだ、畢竟一度に大なる計畫をして大養蠶を行ふと云ふことは一年一回の外蠶を飼育せぬ時代即ち三四十年前の行り方で桑葉の青い間何時でも蠶を飼ひ得ると云ふ現時に於ては甚だ不得策の行り方であると思ふのです、前述べた處を繰り返して約言すれば本年是迄の氣候は悲觀すべき程の不良の氣候ではないから、充分奮發して養蠶をなさる樣に願ひたい。併し繭相場が高かろうと云ふ見込で無闇矢鱈に大計畫をするのは却て大損害をする基ひとなるから着實なる計畫で利益を確實に得らるゝ樣にしたいと云ふに外ならぬのであります、餘り養蠶家が乗り氣になり過ぎて大損害を招きそうに見受けますから、一言婆心を述べた次第であります。

かげろふや馬の鼻のとろ〳〵と　傘下

繊度の説

遞信省會員
京都蠶業講習所技手　服部柳太郎

繊度不齊の生絲は、高價の繊物の原料としては、繰り上げ染色後の美を損害し、下等の繰物に向かぬ、値段の低下を問はず需用者のから、廣價の繊物には内直向かぬ、値段の低下を問はず需用者の意を忌み、繊度は至極最も大切なるものなれば、製絲に携らるものは萬人ながらこの希望を持つて驅命に働いて居るが、悲歎需用者の小言は依然として止まず、日本生絲の缺点として数へらるゝものは十年前と今日とも均しく繊度の不齊にあるのみならず前段に於て述べたが如く繊度の整齊は器械力の應用と反比例して因難の度を増して居る、製絲業者も亦至難の事業でないか。

繊度の(抑)繊度なるものは、世人が豫期して居るが如くに整齊し得べきものであるか、若又これに反して齊し得易からざるものとすれば、如何なる程度迄整齊(に)反して齊し得べくして如何なる程度以上は齊し得べからざるか、この解釋(この判断)は極めて有用であると信ずる、或は絶對的繊度の整齊は望んで得べからざるも、策略として暫く、或は至難を要求し、機業者、業者、寧ろ横濱生絲商人の計略に乗つて、齊し得ざる事の爲めに則ち徒勞に疲るる、吾等(製)絲業者と不幸である、これは想像にあらずして現時の實際である、則ち繊度の説ある所以である。

一、繭の繊度に就て

一粒繰の結果によれば、本邦種の繭は細きもの二「デニール」太きもの三「デニール」である、從て製絲に適當なる繊度は二「デニール」五分より三「デニール」七分迄なりと定して居る、これは何等據るべきの理由なき臆説であるが實際に於て二「デニール」七分前後の繭が多いから、臆説其まゝに害なる説明する程の必要もなければ、亦説明しも得る證拠もないとして、扨繊度の太きものと細きものとの比較が製絲に適當なりやと問はゞ、何故なれば、豐作の繭は繊度太く、不作の繭若くは品質(下)等の繭は繊度細く、實驗上爭へ難き實である、偶一粒繰試驗の結果、品質下等の繭は繊度細く解舒不良なるものにして繊度太きことあるは解舒不良のため繊度の細き繭の繊度が比較的細きことあるは、解舒可良なるより繰細き内外層までも一粒繰の出來た結果である、この理は、百回毎の繰糸繊度に細き繭の繊度が反して繰長多き繭の繊度が比較的細きことあるは、解釋が出來る、且又製絲上繊度細き繭の必要を認めない、何となれば、歐米諸方の需用に應じ細太兩樣の生絲を製せねばならぬ本邦に於て、繊度の太き繭は細き絲を製するに不適當なりとの考は、寧ろ机上の杞憂である、今日存する所の家蠶繭を用ひ繊度太きため細き絲が出來ないとの苦情は途方もなかつたいゝ製絲家の苦情は繊度細き下等繭を採用するものである。

二、生絲の繊度に就て

一粒繰して二「デニール」七八分の繭は、生絲繰糸しては繊度の細き繭の内外層が屑物となるから、三「デニール」以上に達するであらう、一粒三「デニール」の繭を用ひて、製絲すればこれが繊度の九中十二中十五中十八中等の生絲を遊ることは、さまで困難でない、とはいへども十中十一中十四中等の生絲と製することは難中の至難である、至難ではあるが、書用者は、這般の用者は、這般の書等には、一向頓着なく、十中十一中十三中十四中十五中十六中等の生絲を遊ひのまゝに要望しは拒むことは出來ぬ、思ひの注文が出て居る、きは十三中十三半中など、半「デニール」違ひの注文がある、而して繊度不整は許さるとゝよ、業主の過度工女の設言毎時これである、この辛勞は局外者の思ひ及ばぬとゝろであらう、試みに思へ一粒三「デニール」の繭は其物既に繰糸の始中終繊度に大差あれば繭の度に適應した生絲のみを遊るとしても中々困難である、況んや半「デニール」違ひの絲を遊れと云へば、勢ひ生絲の繊度に開きを設かねばならぬ、假令ば一粒三「デニール」の繭を數個合して十四中の絲を遊るのである、而して其目的を達し得るのは、十二中もあつて、始めて其目的の奏る事なるも、係らず、強て開きの違ひを遊らんとせば、自然開きは極めて寡く、繊度しも十五中に近き絲になつてベの不幸を見るのである、繊度太きに過ぐとの苦情を横濱より受くる製絲家の多くはこれである、而して今何か、繊度整齊の極限は開きの三「デニール」以内の生絲である、愚直なる製絲家は敢てこれを遊はない。

もとより決定して至難であらう、開き三「デニール」ならば偶然の出來物の異例と見做すべきものである、非進會品評會の出品中には、開き一「デニール」前後のものが珍敷ない、これはどうも異しい、斯の如き生絲を精査しなか

一粒繰して二「デニール」七八分の繭は、生絲繰糸しては繊度の細き繭の内外層が屑物となるから、三「デニール」以上に達

ば、必ずや繁き類が多い若も絽の表裏に於て特に多いであらう、繁き類の多い絲は別として、開差三デニール以内のものならば、總べて同等の價値と斷定してほしい。

要するに纖度は全力を傾注して整齊すべし、然れども纖度の開きを恐るゝと同時に、平均纖度が目的ぬ機用心肝要である、整齊にのみ盡力して目的の纖度を逸し勢して効なきを知るや、遂には「デニール」は化物なりなど自暴自棄するが如き誠に嘆ずべき次第である、業主の口よりも工女の口よりも「デニール」は運なりとの愚き言葉の出でざる樣希望するが爲めに、聊か説明を試みた、吾輩を以て纖度整齊の研究に偽みたるものと誤解すること勿れである。

横井小楠

布道孚心、物尤人、尤人根總、有所欲焉、勿正心、正心被害、君子之道在修身。

蠶絲業家と割烹

大日本蠶絲業會長
大日本禮節學會長
石井泰次郎

金絲玉子の拵方

鷄卵を、くだきて一つ宛小皿に入れては、鉢にうつし、かくいくつも割り入れて、(直に鉢に入るゝ時は、若し一つ悪しき玉子ありし時にはよき方の玉子まで共に悪つるやうになるもの故、はじめに注意して、一つづゝ小皿に割りては、鉢にうつすべし、箸にてよくかきまぜ、其中へ、砂糖一匁、醤油六匁(小匙一ぱいづゝ)の割合に入れて、交ぜ合し。

次に、玉子焼鍋へ、ごまの油をぬりて火にかけ、あたゝまりし所へ、右の玉子を、金杓子にてすくひ入れ直に鍋をうごかして、すみ〳〵まで、一面に行渡らせ、少し厚く焼けさうに思はれしならば、上面まで火の通らぬうちに、鍋のすみ

の所より、上面の未だ焼けざる玉子を、かくして、下の方の焼けしならば、四方の鍋に付きてある所を箸にておとし、一方より、うらかへして、上になりてありし方を少し焼き、板の上に取り出し、又鍋に油をひきて、前の如く焼くなり。

薄焼に焼けたるをば、端よりの巻きて、小口より細く切りまきたるを開き、二寸位づゝの長さに切り、皿に盛るなり。

絲紐玉子の仕方

鷄卵を、黄味と白味と別々になし、黄味は其まゝ、醤油砂糖にて味をつけ、前の如く薄焼に焼き。

白味の方は、二つに分ち、其一つは青粉にて、青く染め、一方は、白のまゝにて、同じく薄焼に焼く味を付て、別々に焼きたるを、前の金絲の如く細く切りて、其三色の絲となり、適宜に皿に組み合はして盛るべし、又青粉は、青菜より取り用ふべし、其取り方は。

青菜なれば何にても宜しけれど、まづ蔓草の、葉のみを摘みてよく洗ひ、すりはちに入れて搗り、水を入れて少しすり、下に鍋を置き、鍋の上に布巾を置き、青菜のすりたるを、布巾の上へとつぎ入れ、布巾にて漉すなり、布巾になりたる滓は、汁氣をよく、鍋中へしぼりて、捨て汁の入りたる鍋を火にかけるなり、煮立つに隨ひて、だんだん、青粉の浮び來て固まる故、それを杓子にてすくひて毛ふるひの上に半紙を置きたる上へと取り上げ置く時は水氣は、下におちて、青粉のみ、紙の上にのこる故、それを用ふるなり。

粽卵の拵方

よき仙過紙か、或は美濃紙にて、ちまき形(三角形)に袋を作り、合せ目の所をば、二つ折にして、細き針に麻絲を付て巾とふちとを、こまかに縫ひ、口の所はほそくして置き、玉子をわりてよくとき、醤油と砂糖を少しづゝ入れ、袋の中につき込み、口をくゝりて、蒸へ立ちたる湯の中へ入れて湯でるなり、ゆだりてかだまりたらば、水の中へと移し、紙を破りて、玉子を取り出し、笹の葉にて粽の如く包み、蒸籠に入れて、少しむす時は、笹の香、入りてよし。

取れて、少しむす時は、笹の香、入りてよし。

取れば、口取、又は少さく作りて、吸物のみなどにしてよし。

同盟罷工と消費組合

時事會員
貴族院議員　法學博士　桑田熊藏氏談

足尾の騒動以來各地の工場に於て兎角騒工に不穏の挙動あり殊に新紙の報ずる報道なる所此際桑田博士が之れに對し如何なる意見を有せらるゝかを知らんと欲し博士を本郷區千駄木林町の邸に訪ひ問き得たる談話は左の如くである。

同盟罷工と社會の同情

足尾の騒動ですか、ナーにアレ位の騒動は何んでもありません、歐洲殊に獨逸や佛蘭西の同盟罷工と來たら大變なものです、人は殺す、建築物は破壊する、出來うる丈けの暴行を遣って貴本家に迫るのですが、日本などでも將來工業の發達するに隨ひ劇烈の同盟罷工が益々多く企てらるゝやうになるかも知れない、が併し足尾のやうな同盟罷工では、社會は彼等職工に對して何等の同情を寄せないのです、ソーして彼等はアレ丈けの騒ぎを遣って賃錢値上の目的を達したかと云へば、敢てソーでもないやうであるから實に氣の毒なものであります。

足尾に於ける騒動は社會主義者の煽動……左様夫れも一體同盟罷工と云ふものは、勞力賃銀に就ての一種の商取引で勞力を賣る者と買ふ者との間に於て價格の折合は凡場合に於て相當に怪むこともないけれど、暴力を用ひて破壞殺傷を惡にするやうには社會は決して之れに同情を寄するものではありませんです、現今では血を流すやうな騒ぎをせずに極めて平和な手段を以て遂りますが、勿論資本家の方でも勉めて社會の同情を失はないやうにして居りますが、勞働者の方で全く同盟罷工を遂ると云ふ時には、双方ともイロ〳〵策略を施します。尤も彼の英國などでは普通分同盟罷工で慘狀を演じたものなどは隨分同盟罷工で慘狀を演じたものです。今では、勞働者は職工組合と云ふものが現はれて來て、勞働者の方で全く同盟罷工の時期や方法等を充分調査攻究した上で遂りませるのであるから、たとへ勞働者がナンボ遂りたいと氣込んで居つても迂闊に遂る譯にはいかんのです、假令ば茲に一つの職工組合があつて廣く各府縣に渉つて居るとせんに大坂の支部の職工組合が同盟罷工を遂るとしませうか、先づ以て其理由を東京の組合本部へ申し送るのであります、組合本部では其理由を調べて見て遂る丈けの理由が無いと認むれば許さない、併し此理由ならば遂つても良いと認めた場合には直に之れを許します、尤も遂つても良いが時期が悪るいと思へば適當の時期まで待つて云ふやうにしておいて、サー此方法で遂つても良いと云ふ時にはドシ〳〵遂らするやうな仕組になつて居る間は組合の基金を支出して職工に手當を致し、一週間でイケなければ二週間と云ふ風に、目的を達するまでは幾日でも繼續しますから、終局の勝利は大概は勞働者の方に歸し目的を達すれば休んで居つた職工はゾロ〳〵と工場へ來て仕事をすると云ふのが先づ英國邊の同盟罷工の遂り方であります。之れに就て面白い話がある或時英國の或工場で同盟罷工を遂つて一同休んで居りました、然るに二三人の職工が其工場の器械の掃除をして居りますから、見廻はりに來た或技師が何故に御前方は仕事をして居るのであるかと問ふた處が其職工の答には、アナタは未だ同盟罷工の本當の意義を知らないから平んな事を質問せらるゝのであるが吾々の目的は賃銀値上にあるので其目的を達すれば、明日にも來て就業せなければならん、其時に臨んで器械が錆付いて居つたなどゝ云ふやうなことがあつては忽ち仕事の妨げとなり工場主計りでなく吾々職工も亦損害を受くるやうになるやうに限らんからです、之れでことに社會の同情も得られ自分等の目的も達し易いことになると考へます。

桑田博士

消費組合と貯蓄

次ぎに私が我國の勞働者に向つて望むことがあります是は消費組合の組織である、消費組合とは如何なるものであるかと申しますれば、若干の人が集つて組合を組織し、其組合で組合員の必要品を共同に購入し夫れを組合員に賣捌くのであります、其賣捌く方法には二つあつて、其一つは組合が物を共同に購入して賣捌く場合と、其一つは原價に多少の組合費用を加へて賣捌く場合とがあります、此方法は原價に依ります物は安く買ひますが、貯蓄の目的には直接の關係はない唯物を安く買ふことが出來るから、各組合員が貯金を爲し得る機會を得ると云ふことに過ぎないのであります、ソコで今一つの消費組合は現今歐洲に於て盛んに行はれて居る組合の方法であります、そして其目的は全く貯金にあるので、矢張組合は組合員の必要品を共同に購入して夫れを組合員に賣捌かずに小賣屋と同じ代價を以て賣渡すのであります、ツマリ卸屋から共同購入して組合員に賣捌く場合の得る處の利益が組合員の利益即ち小賣屋の利益を一々積み餘き夫れを組合員の利益として保管するのであります、斯う云ふ仕組になつて居りますから、組合員は小賣屋と同値で買ひますけれども、卸屋から仕入れた値段との差額、假令ば

て多少安く買つたものを小賣屋の得る處の利益が組合員のものになりますから、小賣屋の得る利益を組合員の利益として保管するのであります、斯う云ふ仕組になつて居りますから、組合員は小賣屋と同値で買ひますけれども、卸屋から仕入れた値段との差額、假令ば

百圓の品物なら其一割で十圓とか一割五分で十五圓とかと云ふものを、其品物を買つた組合員の利益として組合に保管しておくのでイッの間にか貯蓄の目的を達するやうになる仕組であります。

（未完）

蠶絲業界多年の輿論

特別會員
衆議院議員　工藤善助氏談

夏秋蠶講習所設置に講習の熱誠なる注ぎ商務代議士と共に百方奮闘の勞を取られつゝある工藤代議士が編者に語られた意見の概要は左の如くである。

大藏大臣に再考を求む

夏秋蠶講習所設置に關する建議案ですか、夫れは佐藤、南條、星野、降旗、習所に關する建議案ですか、夫れは佐藤、南條、星野、降旗、朝倉の五氏と私との五人が連名で二月十六日に提出致しました、此建議案の本會議に顯はれたのは同月の二十三日です、當日は私も建議の理由を充分に述ぶる積りでしたけれど、何分此問題が一番後とへ廻されて最早退散間際でありましたから、未決の問題が其だけ、飼育の方法でも當業者に則るべきものであります、ツイ遷延の如く一年々歳々飼育者を增加し、産繭額を增加すると云ふことは如何なる理由であるかと云ふことはひまするに、之れは夏秋蠶が養蠶家の爲めに非常に有利なる點があるからであります、其有利なる點とは第一春蠶などゝは違つて普通農事の閑散となりたる時期に於て飼育し得るの利益がある、第二には秋霜に空しく落葉する桑葉を以て飼育し得ると云ふ利益がある、第三には養蠶は比較して小農の經營に適する蠶室蠶具や家族の手

然るに從來蠶業の研究は春蠶にのみ重きを置き夏秋蠶のことは殆ど不問に附してありました、之れは多くは彼の蠶種製造の方法で、飼育の方法でも當業者に則るべき標準を示したものは一つもないから、失敗者は春蠶よりも遙に多く、收穫得たる繭にも優劣の差が甚だしいのであります、ソーして而も此危險なる夏秋蠶に對し、數年前迄政府は之れを排斥したものですが、今日から考へて見ますれば、併し、前述の如く年々歳々飼育者を增加し、産繭額を增加すると云ふことは如何なる理由であるかと云ひまするに、之れは夏秋蠶が養蠶家の爲めに非常に有利なる點があるからであります、其有利なる點とは第一春蠶などゝは違つて普通農事の閑散となりたる時期に於て飼育し得るの利益がある、第二には秋霜に空しく落葉する桑葉を以て飼育し得ると云ふ利益がある、第三

島根県全郡の所有飼蠶種同共組織東京八代八王子和石巻廣町和石巻

して春及秋の三回飼育して一回三十貫づゝ都合九十貫の收繭があることになつて、昨年の繭相場にしますれば一貫目五圓とすれば大なる除外率を生ずることになります、此理由があるから一面には強大なる排斥を受け一面には何等標準と爲すべきものなく失敗の如く失敗するものも拘らず、年々進歩して來たのであります。

夏秋蠶研究の急務

信州等各地の真相を調べますれば、夫れは桑園が年一年に荒廢に歸するのを見ますが、果竟夏秋蠶飼育の結果如何とありますが、夏秋蠶飼育の結果は、而して此衰廢せる桑葉を以て飼育せる結果は、繭質が劣等となります上に、數回飼育の爲に蠶病の發生甚しくして收繭額の減少を來すと云ふ有樣である、夏秋蠶飼育の狀態如此なりとすれば、之れは非常の慘狀に陷るの憂なしとは云はれません、果して陷らば夏秋蠶に關する研究は眞に之

が併し乍ら蠶業先進地たる上州武州信州等各地の狀態を調べますれば、春蠶は大第の歩に進歩に在ります、夫れは桑園が年一年に荒廢に歸するのを見ますが、果竟夏秋蠶飼育の結果如何とありますが、夏秋蠶飼育の結果は、而して此衰廢せる桑葉を以て飼育せる結果は、繭質が劣等となります上に、數回飼育の爲に蠶病の發生甚しくして收繭額の減少を來すと云ふ有樣である、夏秋蠶飼育の狀態如此なりとすれば、之れは非常の慘狀に陷るの憂なしとは云はれません、果して陷らば夏秋蠶に關する研究は眞に之

ば近き將來に於て我蠶業界には非常の慘狀に陷るの憂なしとは云はれますまい、果して陷らば夏秋蠶に關する研究は眞に之魚用の急と絕叫するのも所以あるとと云はねばなりません。

夏秋蠶なければ輸出は減少

全體蠶業が我邦の重要物産たることは三歳の童子も皆知る處で有ます、昨三十九年の海外輸出總額が上逸して居ると云ひましても、生絲や絹織物の輸出額が其三分の一以上を占めて居るではありませんか、然れば其一盛一衰の國家經濟に重大の關係あることは云ふまでもないことです併し此多大の生産力を有する蠶絲業が年々增加の趨勢に在ることは事實でも、其生産力の增加したる唯一の原因は何であるかと云へば夏秋蠶の急增に依るのであります、試に三十一年から三十七年迄の有樣を御覽なさい、春蠶の增加は僅に百分中の二に過ぎざるに反し、彼の秋蠶の一つを取りましても二倍六割の增加をして居るではありませんか、昨年に於ける秋蠶の統計は未だ詳かでありませんが、優に三倍の增加を見ますせう、然れば我國の貿易がさん だ、或は富が增したなどゝ申しましても、此帝國の輸出に於て夏秋蠶と云ふ二つを引去りますれば、六七千萬圓の輸出を減んずることになるのですから、夏秋蠶の研究は忽にすることの出來ない問題であることは何人も能く首肯し得る事柄であるのです。

夏秋蠶發達の理由

上せられたるものを除去せられしかと、種々質問しましたことですが、ツイ遷延して委員會は全會一致を以て之れを可決し大藏大臣の再考を促がして散きました。

夏秋蠶研究の急務　夏秋蠶發達の理由

設置の意思なきは頗る奇怪なり

要するに數年前迄の農商務省の方針が夏秋蠶の排斥に在つたから、東西に蠶業講習所を設け各府縣に農蠶學校や試驗場を設けても夏秋蠶に關する試驗研究が存外等閑に附せられてあつたのでせう、而して春蠶など丶は違つて夏秋蠶に關する學理は歐洲より輸入すべきものが無いのでありますから、之れを學理的に闡明したものは全世界にない丶云つても宜しい故に全國農事會は數年前より當局大臣に對し、夏秋蠶研究の必要を建議し、關東區實業大會も亦其急要なることを建議し蠶業界の一大機關として歐米の斯業關係者にも信用を博しつ丶ある大日本蠶絲會も亦其必要を認めて本年之が建議案を當局大臣に建議したのであります、去れば夏秋蠶講習所の急設は實業界の一大輿論であると云ふことは明かであります、にも拘らず政府が之れを輕視して、敢て設置の意思なきは頗る奇怪とする處で又國家の爲に悲しまざるを得ないことであります、抑も政府は彼砂糖會社に對しては戻税の名の下に五百萬圓の補助を爲し郵船會社等海運業者に對し一千萬圓の補助を爲すことにし乍ら何故に此重要なる夏秋蠶講習所の設置に要する十萬圓内外と云ふ僅少の金を惜むのであらう、若しも之が一大會社の事業であつたならば、種々の關係より當局者の意思を動かし激烈なる運動にて議會の通過をはかるのであらうが、悲しい事には生産力が一億であるの二億であるのと云つても小農の片手間仕事で生産したる所謂零碎の金を集めてのものであるから、大なる會社のやるやうな働きが出來ない隨て之れが奬勵上機關設置の必要を唱導しても政府當局者の眼中に重きを置かれんと云ふ始末になるのですが、如何にも慨歎に堪へんことです、兎に角國家の命脈に至大なる關係を有する蠶業に對して僅かに十八萬圓やソコラの補助金で片隅に押付けて置かうと云ふやうな考へを政府當局者が持つて居るとすれば啻に斯業の爲めのみならず、國家の爲に喜ぶべからざる事であるから、大に論ぜねばならぬことゝ考へますが政府當局者に於ても少しは伊佛に於ける奬勵の狀態に鑑みて我蠶絲業界多年の輿論を容るゝ樣にせられたいのであり升。

工場主と職工

特別會員 貴族院議員 伯爵 正親町實正氏談

記者一日本會評議員たる正親町伯爵を麴町區富士見町の邸に訪ひ談偶々同盟罷工の事に及べり而して伯の縷々物せられたるもの頗る味ふべきものあるを以て綴りて聞を録左に之れを掲ぐることゝなせり世の工場主及び職工たる人々是非一讀せられんことを

工業の發達に伴ふ一種の弊害

此頃の新聞を見ると、足尾の騷動以來各所の工場に於て兎角職工が不穩の擧動をするやうなことが書いてある、或一面より觀察すれば社會黨など丶稱する輩の良からぬ思想を職工に注入するからでもあらうが、畢竟は工場主と職工との間に意思の疏通を缺くからである、併し同盟罷工は工業の發達に伴ふ一種の弊害にして、將來益々多くならんとするの傾向を有し、而かも此事たる、啻に個人の損害たるに止らず延ては國家の損害ともなるのであるから、今より之れに對する方法を充分攻究して置かねばならぬ。

平和の戰爭にも忠君愛國

而して工業の盛衰は直接國力の消長に關するのであるから予は世の工場主に對して忠君愛國の觀念に依り事業の經營をして欲しいと希望するのである、彼の日露の戰爭に於て何故に大なる露國は敗戰の位置に立ちしか…彼れが陸戰に於て將た海戰に於て一回だも勝利を得ざりしは全く露軍に忠君愛國の觀念を有する者が尠かつたからである、若しも彼等にして忠君愛國の觀念を有せしならば、將校は互に鬩がぬであらう、兵卒は能く將校の命令を聞いたであらう、惜むべし此觀念の無い爲めに、規律も立たねば秩序も亂れ攻守共に其宜しきを失して、遂に一敗地に塗れ和を請ふの止むなきに至つたのである、之れに反して何人が見ても勝てさうもない日本軍が強大なる勁敵に向て連戰連勝し得たのは、如何にも不思議のやうであるが決して不思議ではない、上は將校より下は一兵卒に至る迄、忠君愛國の心を以て滿たされて居つたからである、ソコで予は只銃火相見ゆるの戰時計りではなく、平和の戰爭たる事業の經營に於ても此忠君愛國の心を持て相働くやうにしたいと思ふので、戰爭ならば將校の位置に當るべき工場主に向へ先づ以て此希望を提供するのである。

岩手縣農學校の全景

工場主の慈愛と職工の從順

忠君愛國の觀念があれば自己の經營をして居る事業は皆之れ君の爲め國の爲めと云ふ考へになるから、其興廢の依て岐るゝ所容易ならざる結果を生ずると思ひ極力其業務の發展を圖ると同時に、私利私慾の行動を戒め、隨て職工などに對しても慈愛的の遣方をするやうになる工場主が慈愛的の遣方をすれば、如何に無敎育の職工でも大概は夫れに感化されて從順となる、從順となつた結果は能く場主の命に從ふやうになる、能く場主の命に從ひば規律も立ち秩序も亂れぬやうになるから、事業の經營難は容易に脫却することが出來るのである、事業の經營難さへ脫却すれば其事は必らず成功するのである、果して然らば事業の成功は即ち場主の幸福にして又國家の幸福と云はねばならんのである。

又職工に於ても單に工場主の仕事であると思はずに、工場主の損益は及ぼす處國家の損益になるのであると少しは高尚な考へを持つて、忠實に働くやうにしたいものであるが、兎に角、從順と云ふ美風丈けは失はぬやうにしたいのである日本人が長者に對して從順であると云ふことは、歐米人の羨む所であつて、我軍隊が戰爭に臨んで勇悍であると云はるるのも長者即ち將校に對して、從順能く其命令を遵奉するからである、ところで此從順と云ふことを屈從と云ふことと誤解してはならぬ、如何に虐待せられても、如何に非道に取扱はれても、牛馬の如くに働けと云ふ意味ではない、工場主と職工とは所謂主從の關係になるのであるから、主たる工場主が工場主らしい行動を取る場合に於ては、從たる職工は職工らしい行ひをして、苟にも他の煽動や敎唆に乘せられ足尾のやうな暴行を遣つてはならぬと云ふことである。

要するに工場主としては失費の尠くして收利の多からんことを希ひ職工としては勞銀の高からんことを欲するのは當然のことである、然れども收利多くして尚ほ低廉なる勞銀を以て職工を酷使せんとするが如きは所謂慈愛の念に富める遣方と云はれない、と云つて職工の方でも工場主の利益の尠いところへ、無理無體に勞銀の値上を强請するが如きは決して忠實であると云はれないのであるから、何事を爲すにも忠君愛國と云ふことを忘れずに、工場主は慈愛、職工は從順、そーして相互の意思を能く疎通し、主從とゝもに一體の如くに活動し、以て工業の發達を期せられたいのであるが、製絲業の如きは國家の命脈にも關係する大切の業務であるから、却へすも此點に於て深く留意せられんことを望むのである。

絲質の均一は器械の改良に在り（承前）

三重縣農業技師 安東潜氏談

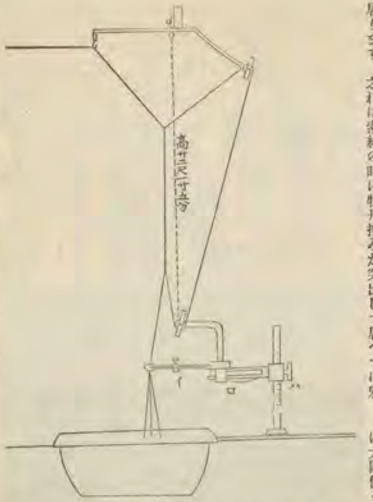
「ケンネル」器械の構造と特徴

そこで此器械を説明してみまするると、圖の（イ）の印は牡丹挾みに分銅を設けてあるのですが此分銅の重量で以て「デニール」の細太につき適度を定むることの出來る裝置でありまして之れが爲めには假令絲は切斷しても決して縒を逸することがない、夫れ故一度一尺の縒を數多の工女に命令してかけさせたならば、自然縒數の度合は一定する計りでなく、絲量にも大關係を生ずる譯けである、假令ば一升の繭數を三百粒と假定して一粒の繭に付三回切斷があるとすれば、九百回の切斷數となる、そこで一回の切斷に對す縒をかけ代へる爲めに少くも二尺の絲は指に卷付け空しく消費するのであるが、此二尺を九百回に乘ずるときは一千八百尺となるから繭一升毎に一千八百尺の絲を失ひ一綛を二升としても三千六百尺は切斷の爲めに失ふのであります、然るに私の器械では假令絲が切斷しても決して縒を失はないから繭一升に付三分以上必らず絲量を増加し且つ縒をかくるの煩勞を省くから一

人一日の繰絲工程は普通の「ケンネル」に比し二割以上を増加することは試驗の結果確實なのであります。

又圖面の（B）印の處が前後進退自由の出來るやうになつて居ります、之れは索緒の時に牡丹挾みが突出して居つては邪魔になりますから、前の押金を摘まめば後ろへ押し遣ることが出來、絲を引く場合には前に引出して適當の角度を得るやうの仕掛になつて居ります。

又（C）印の處を上下して其高低を自由にすることが出來ます、從來の器械は水面より牡丹挾の距離を二寸五分乃至三寸と定めて居ります、けれども細絲や中細又は細太（？）二十「デニール」等の製造を爲すには此水面の距離が絲量と附額とに大關係を持つて居るのであります。



兎に角斯う云ふ構造で目的の完全なる絲質を得ることになつたのでありますが、既に伊勢の關西製絲場（百四十人繰）同高岡製絲場（二百八十人繰）尾州の佐矢川製絲場（二百人繰なれども百人繰丈け本器を据付けたり）等は据付けまして顯著なる成績を顯はして居ります。

尤も本器の特色は大顆を減ずるにあるのですが、其譯けは牡丹挾に「ズルブシ」の上るときは忽ち牡丹挾に感じて動搖をするのであつて、恰も釣絲の浮きに魚の漁りの響くが如く顆の上るのが一々明かに譯りますから恰も顆の來ることを敎ゆるに似て居るから直に其小枠の回轉を中止して其大顆を取り拔け得るの便利があります。之に依て大顆は四割以上を減ずることが出來るのであります、イヤー之れは知らず〳〵功能を述べ立てましたが此上餘り述べ立てゝは却て良くないから此位にして止めませう。

工女の技術をのみ責むる勿れ

尚ほ一言御參考までに御話申したいのは或人の申しまするには製絲器械なるものは實に單純であつてイ器械の名稱は附け

難いものである、單に小枠の回轉と蒸氣を用ゆる丈けであつて、他に働きがないから器械とは云はれないと、斯う申したのであります、而して又多數の人も皆此製絲器械の何物たるかを感じないのでありますが、私は全然之れとは反對の考へを持つて居ります、と云ふのは多くの器械の中で製絲器械ほど緻密を要するものはない、其理由は勾配の角度が一ミリ違ひましても、絲は平扁となるのであります、又「ギリ」の車が一度回轉を狂ひば悉く此車に絲は摩擦されて平扁となるのであります、共撚と雖も矢張同樣の譯けて勾配の中心を得ずして一寸此中心を外づしたならば、二線の絲は必ずや其一方に一「デニール」以上の差を生ずるのである、抑々一「デニール」は日本の數量にして、凡そ一厘四毛に當ります、此一厘四毛は僅かのやうであるけれども、横濱取引の上に於て若しも一「デニール」の差が生じたならば到底取引は出來ないのである、一「デニール」は愚か半「デニール」てさへ取引は出來ない半「デニール」といへば八毛である、八毛で取引の出來ると出來ないと云ふ品は外に見ざる處てありませう、此一厘四毛の適當を得るが爲めに製絲は苦むのであります、彼の度量衡にしましても、最小の衡てなければ、八毛を正すことか

宮崎縣元農事講習所に於て疊桑なる秋田式に根植したるものにして圖は其三年目のものを撮影したるものなり第百七十四號參照

出來ない、如此き細密なる仕事は製絲以外に何があるでありませうか、此細密の仕事即ち絲を造ると云ふものを名けて器械と云はないで何を器械と名けませう、而して其生絲製造は一々器械の働き即ち器械の完全と云ふことを目的とせなければ到底優良なるものを得ることが出來ない、所謂其事を良くせんと欲せば其器を利すと云ふやうな譯けであるのに、世の製絲家の多くは器械の思想に乏しく如何に勾配が正當を失ひ如何に器械が狂ひを生じて居つても只其器械に餘計な費用でも失ふかのやうに考へて之れを改めやうともせず、獨り工女の技術をのみ責むるを本能として居る、之は大なる間違と云はねばなりますまい、如何なる優等の工女と雖も、其器械が完全ならざる限りは「デニール」を整一にすると云ふことは不可能であります。

昔も今も横濱取引の上に於て意外の失敗を招き遂には聲價を回復することの出來ない不幸に陷ゐる者が尠くない、夫は全く製絲家に器械の觀念器械調度の思想の乏しい爲めであります、夫れをも考へずに製絲は至難のものである利益の薄いものであると、切りに經營難を唱へる者がある、實に笑止千萬と云はねばならぬ中には又上等の絲を製しても利益がないから駄目であるなど

と抱腹絶倒の話をして居る者がある、ソーして折角蒸氣機關原動力を備ひ工女を抱へ乍ら座繰絲の直段にも及ばぬやうな下等の絲を造て居る者が尠くないのであります、其愚や笑ふべくして而かも斯業發達の上に大なる障害を與ふるのでありますが、實に殘念なことてあります。

年々原料の繭は高價となる計りてあるけれども、製絲には何等の改良を見る能はずして十年以前と變りがないから、憐むべし工女の僅々たる所得即ち賃銀も十年前と同樣である去れば物價高騰の今日工女が之に滿足するものではなく其結果段々工女に不足を生じて來て製絲經營難の聲が高まるやうなことゝもなるのであると云ふことは、前に既に述べたことでありますが、ドーか製絲家たる者は種々の迷想を打破して、共撚なり「ケンネル」なり其何れの器械たるを問はず器械の完全を期して絲質の均一を實行し着々改良の歩武を進めて以て工女の賃銀を增し先賣約條を行ふて其營業を銀行同樣確實にせられんことを切に希望する次第であります。

日本生絲の亂脈を矯正し斯業の發達を計るべし

終りに一言したいのは今や戰後の經營として蠶絲業の擴張と增進の一方に傾いて居るから近き將來に二億萬圓は慥に增加するであらう、然るに昨年の如き未曾有の市價暴騰するに從ひ、內地製造家は一時に巨利を占めんとして、晝夜の別なく製造に暇まなく、亂造粗製の競爭とも云ふ可き有樣て、唯外見さへよければドシ／＼賣行くと云ふのは、幸か不幸か此末が實に案じられる、內地に於て羽二重の經絲にも忌まれるやうな粗製のものも少くない、養蠶は進步して結構な繭が出來ても生絲が斯樣の有樣てあつては、遂に茶業經木サナダの悲境みるよふな惡運が來るかも知れない、余は此擴張奬勵の方針とともに改良を要するもの舉げて數ふ可らずであるが就中横濱市場取引の惡弊習慣は全く亂脈の原因であるから中央政府に於ても此點に留意され、蠶絲業調査會を設置されん事を希望するのである、是は學者と實業者より推撰して內外の情況を調査し改良進步の保護政策を取りたいと思ふ。

（完）

渡米及絹布に就て

「ブラジル國」公使法學士　內田定槌氏談

記者一夕紐育總領事より「ブラジル」國公使に榮轉せられたる內田法學士を牛込矢來町の邸に訪ひ日本勞働者の渡米及米人の絹布に對する嗜好心等に就て公使の意見を聞いたのである時節柄會員諸氏の參考にもと思ひ左に之れを掲載することにした

日本勞働者の渡米は難し

何か御用でもありますか、ハヽ此頃新聞などに喧しく書いてある、米國に於ける移民法修正案云々に就て私の意見を聞きたいと云ふのですか、夫れは御話しするも容易いけれど

外務省の内田が斯云つたなどと、新聞や雜誌に書かれては日本人よりも外國人がいろ〳〵と邪推をして困るから、折角の御繹ねてはあるが、善いとも惡いとも自分の意見は御斷りする事に合點し國へ行くことは許さなかつたのですけれども、現在の日米條約ですから、夫れは日本の勞働者が直接の關係者として行くことは許さなかつたのであれば甲地から乙地へ轉ずる事は、米國の法律にも別に規定してなかつたから自由に出來たのであります、例へば日本から布哇へ移住した者が、再び布哇から加州へ行く場合に、別に差支なかつたのです、故に加州に居る高餘の日本勞働者は大低は布哇を經て行つたのである、夫れを今は布哇から行かうが非律賓から行かうが兎て日本勞働者の渡米に關する制限を加へて、可成入れないやうにしやうと云ふので修正案が出たのであります、併し排日熱の盛なのは加州丈けであつて、其他殊に「デキサス」州の如きは日本人の行くのを大に歡迎して居ります。

日本勞働者の渡米法如何

然らば今後の日本勞働者が「デキサス」州へ行くのにはドーすれば宜いかと云ふに二つの方法があります、一つは農業視察と云ふ名目で行くのでありまして、今一つは「デキサス」州へ行きて居る者の組合員として行くのであります、農業視察と云ふ名目なれば、加州を始め合衆國中何處へも行けぬ處はありませんが、併し相當資產のある者でなければ地方廳で之れを許しませんから、ツマリ何も持たない者では行くことが出來ないことになるのであります、第二の組合員の資格であります、第二の組合員の資格ではありませんが、何をもたないでもかまはぬ、其代り向ふに知己が無ければ、知己があつて自分の組合員であると云ふことを證明して、紹介の紹介者に其事を風説して、總て紹介者から我外務省の力へ云つて來て、ソコで初めて旅行券が下つて行く事が出來るやうになるのであります。

「デキサス」州に於ける小作農業家の資本と利益

「デキサス」州は日本の二倍位で米が澤山出來ますから、將來は頗る有望であります、現在日本から行つて居る者は許りであります、「デキサス」州全體で出來る米は五百萬俵位であります、米は一人前の小作が百六十「エーカー」即ち日本の四十町歩を耕すのであります、一人前の小作が百六十「エーカー」即ち日本の四十町歩を耕すのであります、一四二百圓づゝとして一千二百圓は馬が六匹なければならん、一四二百圓づゝとして一千二百圓は夫れから鍬や鋤等の農具から行く旅費等を合算する時は、どうしても二千四五百圓なければならぬ、併し夫れは初の一年の事で其翌年からは開墾なく、ソコで其小作の一年の收穫はどの位かと云ふと、土地と天候との如何に依つて一樣ではないが、先づ四十町歩の田から一千五百俵の收穫があるから、千五百俵で四千五百弗、日本の金にすれば九千圓となる譯である、尤も其半分は小作料として納めなければならんから小作人の收入は四千五百圓と云ふ譯であります。

「デキサス」州の米作と日本の農業

「デキサス」州の米作が盛に出來て、「パナマ」運河でも開通した日には、米國の米一石が日本へ來て八圓位に賣れる樣になれば、至極結構であります、果してソーなるかは頗る疑問である、「パナマ」運河が開通しても唯貨物を通すだけであるのみならず日本には又輸入稅と云ふものがあるから、なか〳〵安くは賣れないことになるでせう、兎に角「デキサス」州の農業が盛に開ければ、日本の農業が大打撃を受くるやうに思ふのは大の早計であります、てこと十年や二十年は、決してソーなる氣遣はないから農民は安心して宜しい。

「デキサス」州の養蠶如何

「デキサス」州の桑でありますか、夫れは能く出來ます、併し何程桑が能く出來ても、第一勞力が不足で蠶など飼つては居られません、能く考へて御覽なさい、日本のやうに一人前の勞働賃が僅か五十錢なら宜しいけれど、米國では一人一日の賃銀が、三圓乃至五圓である、期る高い賃銀を拂つて收入の殘い蠶などを飼ふて居られやう筈はないではありませんか。

米人の絹布の嗜好心と人造絹絲

米國人の絹布に對する嗜好心ですが、夫れはモー普掃て居ります、毛織物より絹布の方を好んでは居るけれども、價格が高すぎる爲めに上流社會を除きては、着たくても着る事が出來ないのであります、故に價格さへ低廉なれば其實行等に就ては少しも心配はスリません、尤も米國の農作物の豐饒であるとは然らざるとは、絹布の需用に非常に好んで居ることは確かであります、價格の暴騰せざる限り、品質の劣等とならざる限りは、永遠に其需要を減ぜざるものと見て宜しいのであります。

人造絹布でありますか何にアンなものは恐るゝに及びません、天然絹絲の味を知つて見れば人造絹絲などを好んで着るものはありはしない、斯う云ふものがあれば却つて天然絹絲の嗜好を增す處の助けとなるのであります、敢て恐るゝ事はないでしせう。

二宮尊德翁の七誓願

夢の國　貧の國　夢の國　苦の國　財の國　惱の國　闇の國　苦の國
開　田　變　産　地　苦　民　土　變　貧　貧　富　盛　産　國　部　落
安　樂　除　一　切　國　民　所　思　一　切　人　民　所　好　悉　與　之。

講筵

『フオルマリン』檢定法

農商務省醸造試驗所技師
學士會員
辻　暢太郎

(二)濾過洗滌法　液と沈澱とを分離する方法に傾瀉法と濾過法との二種ある、沈澱の沈下が遠かつて上部に存する清液を安全に注出し得るか、又は「サイフオン」にて引出し得る場合には、液と沈澱とを分離するに往々傾瀉法を採用するけれども、多くは濾紙を用ひて濾過するの方法が行はれて居る。定量分析に用ゆべき濾紙は纖維の組織が緻密であつて氣孔の小さく且つ少ないものでなければならぬ、而して其大さは濾過するときに、其内容二分一以下に沈澱を容るゝことの出來る程度にせんければならぬ、普通の重量分析法にあつては直徑十二「センチメートル」(No. 589)のものを最も多く使用するのである。

定量分析用の濾斗は、形狀正しくして内面平滑で凹凸なく、可成薄常に四つ折にしてある濾紙の各部の密着して居る者でなければならぬ、而して濾斗の大さは、其上線より漏出した濾紙の上線迄の距離、凡そ二分一「センチメートル」位の程度でなければならぬ。

濾斗内面の形狀に應じ濾紙を四つ折になし、濾斗に入れて濾紙と濾斗とより密着するのを認めたならば、次に蒸餾水を以て濾し、内濾紙の折目を指頭にて輕く壓し、濾紙と濾斗との各部を密着せしめなければならぬ。

沈澱を濾過するには、同時に沈澱の手段を行はなければならぬ、故に始めて濾過を行ふに當りては、先づ「ピーカー」内上部の清液のみを濾紙上に移し、次に沈澱に水を加へて攪拌し、暫く靜置して上部の清液を濾過するのである、斯くの如くすること、三四回であつて後、沈澱を全部濾紙上に移すの手段をなさねばならぬ、「ピーカー」硝子棒の下端に嵌めてある小さき護謨管を以て摩擦した沈澱は、硝子棒の下端に附着し、硝子棒に附着せる沈澱を全部濾紙上に移すのである。

濾紙上に移した後は單に、洗滌の操作を行ふのであるが、之は所謂洗壜(噴出壜)を出して行ふのである、沈澱の洗滌をなすに當りては、濾紙上の沈澱を濾過し終らぬ間は蒸餾水を注入せないと云ふことが規定になつて居る。

洗滌をなすには、先づ沈澱の下部から漸次上部に水を吹き掛け、上部の沈澱を下部に降らしめ、終に濾紙の上線に至りて止めねばならぬ。

洗滌は總て可溶性物の洗去せられたのを以て充分であると

見做さねばならぬ。此點は最終の濾液一二滴を白金板上に置き徐々に蒸發せしめて檢査するか、又は試驗管内に於て特殊の試驗を行なひて鑑定をなさねばならぬ。

(四)乾燥灼熱法　數時間熱法　濾紙上の沈澱は濾斗と共に熱湯乾燥器内に入れ、數時間熱法して充分に乾燥しめねばならぬ。

乾燥せる沈澱は、其大部分を白金坩堝(其沈澱重量金屬なるときは磁製坩堝)内に入れ、次に濾紙を折つて白金線で卷き紙の下端に點火し、之れを坩堝の上方に持つて居て燃焼せしむるのである、斯くして得たる濾紙の炭塊を酒精燈の上に置きて灰となし、坩堝内に入らしめ次で坩堝を、徐々に熱し終に其底部を赤熱とし、水分の全く驅逐せしことを認めたるときは直に坩堝を乾燥器内に入れ、秤量する迄其儘放置せねばならぬ。(未完)

製絲原料繭について(承前)

蠶業講習所教師
東京蠶業講習所教師
小野くわ子

第三、縮　皺

繭の縮皺には、其模式が種々ありまして、通常其大なるものを見ちらと稱へ、其小なるものを縮緬ちらと申して居ります、又繭の長みに向て走るものは、縮ちらと稱へ、其幅に向て走るものは横ちらと稱へて居ります、其外浮ちら、綿ちゝとら等がありますが、是は蠶見の病的異狀及氣候の惡變等に由て、生ずるものでありまして、所謂不具のちゝらであります。

繭にちらゝを生ずるは、蠶兒の吐出したる絲の乾燥するに從ひ、其長さの收縮によりて、漸次繭の外層の絹絲を引き附けて、以て皺を生ずるのであります。

繭のちゝらの大小は、蠶の種類により、又結繭當時の氣候乾濕、温度の高低により、繭層の厚薄により、或は絲纖の細太によりて其ちゝらに大小の別を生じます。

今同一種類の繭中より其粗大なるものと、緻密なるものとを撰出して之を檢査しますれば、粗大なるものは概して、繭層厚く絲量多く、纖維が細くあります、之に反して其緻密なるものは、概して繭層薄くして絲量少なく、纖維太き傾向があります、故に繭のちゝらは、徐りに粗大にして浮きたる如き類あるものは、忌むべきものであります、けれども、餘り緻密なるものは宜しくありません、即ち稍粗大にして判然と區劃正しきものを撰ぶ事が肝要であります。

第四、緊　緩

繭の緊緩の如何は、直接に絲量の多寡と、解舒の良否に大なる關係を有して居ります、緊緩の要點は、第一繭層の厚薄、第二其質否、第三手觸の良否であります。繭層の厚くして各部の質不ぶなるものは絲量多く、繭層の薄く、且つ其手觸の良好なるものは繭の解舒佳良であります、故に繭層の薄きもの、及各部の組織に不同ある所謂片かけ繭と、繭層の手觸こつ〳〵として、いやに硬きもの等は、製絲經濟上、大も忌むべきものであり

ます。

第五、乾繭

繭の殺蛹乾燥の方法、其宜しきを得ると否とは、製絲工程上、幷に絲量、絲質上に、非常に大なる影響を及ぼすものであります。從來、製絲業の利害興廢の岐かる、所は、主として此方法の宜しきを得と否とにありし如く考へられます、即ち其方法宜しきを得て少しも繭質を損せざるものは、解舒可良にして、繰絲量多く、從て生絲の生產費用を少くし、尙絲量多く、屑絲少く、且つ生產の生絲は色澤優良でありまして顆節少く、配合佳良、總て一般の品位優等であります、故に殺蛹乾燥は繭質を良好に保全して、製絲に適當なる原料たる資格を失はしめざる方法として、最も研究をなさねばならぬ事であります、今左に其要點を示します。

（小野敬繪）　（金原敬繪）

印度の製絲業

印度の「バンガーレー」に於ける組織製法は、日本法を採用するに拠し「ブーサ」にても政府事業として同法に依り製絲し、而して「ボムベイ」にも亦同樣の計畫があると云ふことである。

一、乾繭の利益、繭は、必ず本乾燥となして、繰絲するのが、利益であります、從來生繭、又は殺蛹繭を以て繰絲するのが、利益であると云ふ事は、是は乾繭器の不完全なるか、又は其方法を誤りしために生じたる事と存じます、生繭又は殺蛹繭を以て繰絲しますれば、繰絲工程上、種々なる困難があるのみならず、生產の生絲は、色合惡しく、顆節多くして甚だ趣味に乏しいものでありまして、之に反して本乾繭にしたる繭はしつかりしたる、所謂腰の强き生絲が得られ、從て繰物となすに再繰、撚絲、繰上げの工程が極めて容易であります、機業家に歡迎せらるゝ處の生絲が得られますから繭は是非共、本乾燥となして製絲するを經濟上得策と致します。

蠶絲界の奮鬪者

佐野理八君

君蠶絲界に身を投じてより業に五十有餘年、其の間刻苦勵精に我蠶絲界を頑迷因循の間に救はんとして產を敝し身を危ふせしこと間なるみしらず廻も君が蠶絲改良に對する執着は愈々固く奮鬪を重ねて逆に我蠶絲界は今日の盛況を見るに至りぬ、皆謝せずして可ならんや、君老いて益々矍鑠其の偉大なる人格は洋人の常に畏敬して措かざる所、いでやこゝに其の歷史の一端を叙して如が高き心影に接せんかな。

君が故園は滋賀の天地

さゝ波や滋賀の都……と申しますといかにも四條派の繪を見る樣な心地が致しますが、弘化元年の而かも梅の花咲く春の二月を以て實に君は此の繪の樣な天地に生れたのです。父君は敬意と稱し古くより神崎郡佐野村に住む名主で君は其の二男に生れ幼名を次太郎と呼んだのであります。月を追ひ年を改むるにつれて此の繪の樣な滋賀の天地は君を感化させたかといふに決してさうではなく、所謂近江商人の氣風は比叡の雪と共に君の身に泌み込んで早く已にそこに奮鬪的人格の基を造り上げたのであります。

涙を揮つて主家を去る

安政二年の三月君は土地の豪商外村家へ仕へることになりましたが、是ぞ君が社會に其の驅足を延ばす第一歩で、實に十二歳の時であつたのです。外村家は代々の舊家で土地に知られた絹布蠶絲商でありました、ところが天流の然らしむるところか、此の業にかけての君は、中々に鋭く、體は古いが所謂二業の柄で慎で、時に壯者をも凌ぐ位でありました。であります から朋輩からは尊重され――主人からは重宝がられると云ふ具合で、安政四年には京都支店詰になり、文久三年には生絲買入の爲めに始めて瀛島へ下向をさへ命ぜらるゝに至つた。

かくて君はいゆ〳〵忠實に數年を仕へて居たが計らずも一つの問題が持上つて來た、といふのはいよ〳〵此の外村家を去らねばならぬといふ破目になつたからで……それはかうである、丁度明治維新の當時岩倉公が北陸道鎭征として近江國を御通になつたときに愛知郡の愛知川驛に御一泊といふことになつたが、丁度其の時近江の豪商といふ豪商を招いて、さて今度王征維新といふについては、朝廷でも少からぬ御失費であつて、目下の費用にも差支てゝ居る次第だから、どうか普夫々相應の同達金をして欲しいといふ樣な懇なお下命がありました、然るに外村家では頑として之を御諾致しませんでしたから、君は如何にも之を殘念に思ひ其に君恩の量るべ

からざるを說き、一意盡忠の事に出でられんことを希つたのである然れども少しも效能がない、ところで內はどうかといふと店員を始め主人迄が眼へや鉄の亂旋風、而かも明ても暮ても此の始末に事業の振起、國の思の洪大なこゝいふことは一向無頓着であり、之を見て自ら持する君一度は赫として怒り一度は淳々として諫め減心只之を見卵の危きに救はんとしたが、又如何ともすることが出來なかつたので、長嘆落涙只拱手傍觀するより外はなかつたのであります。

茲に至つては君と雖も萬事休す、之と水の如く、有爲の志亦貫くに由なく、而かも將に倒虛せんとする主家の危きを拱手傍觀するの止むなきに至つては寧ろ去つて徐に男兒百年の計をなすに如かずと、考へて明治五年六月、世は青葉の眺さにも拘らず、君の眼は涙を以て主家を去り任へてより十有六年君の歷史は是より其の頁を改むることになりました。

奮鬪史の一頁は如何にして染められしか

併し磯石に十六年一日の如くに働いた君に對しては外村家でも多大なる尊敬を拂つて、其の退くに際しては積立金六百六十餘圓に賞與として三百圓を合せ贈つたのであります。

氏は村役に就かれてから十六年程で、その間に生じた負債實に二百七十兩、一家族事七十之を憂ひて居られました、ところが君と主とに之れ忠なる君は明治元年に悉皆之を消却して茲に又孝の實を擧ぐるに至りました、君の生家を愛ふことは尙之のみに止まらず、右の賞與は之を悉く第三五郎氏に與へて老父母の國居所を新築させて領主から賞狀と米一俵とを賜りました、君の自身は生れたまゝのもとの木阿彌となつたのであります。

話は一寸後へ戻りますが、丁度外村家に在勤中でありました、よく外家へ出入する横濱二十八番館の生絲商があります、此の英人と君は非常に親しんで居られました、君折て、我國の生絲改良について說を述べまた其の意見をも叩き折て、我國の生絲改良について說を述べまた其の意見をも叩き顏に海外の消息をも知らうとせられた、ところで或る日其の英人が君に勸むるに蠶絲業視察の爲め兩三年間歐洲に遊ばんことを以てしたのである、もとゝ蠶絲改良に熱心なる君の心、茲に至つては動かざるを得ない、併し悲しや蛟龍未だ雲を得ず、さて渡航及滯在の費用といふ點にハタと當惑した、で其の人も如何とも仕方がなかつたのであります、餘りに君の熱心な心に感じ、將來大に爲すあるべき器量に憾れ込んで自ら切の經費を支出するといふのであります。

宿志を貫徹すべく決心した君が、曾て知れる大阪を抱ける故郷に內地のものではない、遂に明治五年九月渡英の途に上るべく老父母を後に孤影飄然、里なつかしき秋の木葉を拂へつ橫濱さして出達したのであります。

君が着くと間もなく舊小野組の總理小野善右衛門及古河市兵衛兩氏から至急御面晤を得たいとの手紙、はて何事ならんと、吐嗟出征髮の猶殘るなる、してさて段々、話の末が心に入る處へ出掛て先づ顧られ、君の心の動くのも尤なことで兎に角當時飛鳥も落ちるの勢の小野氏からの頼みでもあり、又是れによつて自分が希望達するの基ともなるであらう、して見れば必らずしも餘教逢ふらずとも十分であらうと、かう考へた君は早速例の英人の處へ出掛て此の顚末を話して自分の希を述べたところが英人も非常に賛成したので、こゝに全く渡航の念を絶つて小野組の爲めに各支店の改革を斷行することを承諾したのであります。

そこで其の月の二十四日といふに東京を出發して先づ顧られ支店に着いて疾くと其の內情を精査いたしましたが、驚いたのは內部の腐敗で、在昔此儘で過したならば餘命幾何もないといふ樣なのであります、これは獨り顧られ支店のみでなく全國七十餘の支店何れも皆さうなので、小野組の運命を危きに救ふは此時にあり、と是より日夜鞅掌修補、其の責任の許限を銳意之が緒に着いたのであります、其の結果、明治七年の春各店略ぼ整頓し、明快な頭腦は君が手腕はいかに奮鬪的に活動したであらうか、かゝる大事を僅か二年に出てずして早く已に處決したのに徵すれば實に想ひ半にも思はぬではありませんが。

然し乍ら決水はまた防ぐべからずで幾百萬の負債は遂に小野組をして其の年の十一月閉店の止むなきに至らしめました、君も亦退くの淵を思ふて翌年五月精算の絲局と共に全く小野組を解散したのであります。

君が奮鬪史はかくて其の第一頁を染めたのであります。

器械製絲の恩人（承前）

「ポール、ブリュナー」氏

製絲工女募集の困難

さて工女の傳習を開始したるものの、前述の如く據夷熱の餘炎猖地方に盛んなる時代であつたから、如何に奬勵するもナニ毛唐人に教ひ貰ふなどいふは穩らはしい、大切なる子女を預

ける譯には行かぬと云つて應ずる者が寂々寥々であつた、餘儀なく東京に舊幕臣即ちコッ旗本や御家人や與力等の子女を百人計り雇入れたのである、然れども三百人の工女を募集するのであるから、ナカ／＼其人數を滿すことが出來ない、於是乎庶務少輔の尾高惇忠氏（後勸業大属富岡製絲場長として創業以來八九年間盡力せし人）は率先して自分の娘を工女と爲し尚ほ他の官吏の子女をも督勵して工女たらしめ、一面與州の諸藩會津米澤仙臺等の藩々に命じて恰も政府が兵士を民間に徴するが如く役當工女と名けて強制的に百人許の工女を出さしめ、彼此合して三百人の頭を揃へ以て氏の教を受くるやうにせられた、處で不運にも傳習を開始したる當年の蠶兒が氣候不順雨天勝にて富岡附近の蠶家は大部分失敗したのである、之れを土地の人々等は石炭燃燒の祟りと爲し、喧しく抗議を申込むやら或は燒き拂ふなどゝ張札をする者さへあるに至り其困難名狀すべからざるものが有つた、然れども氏は一難每に勇氣を加へ、奮闘經營、自己の職責に向て邁往せられたのである。

繰返式と貯繭庫

當時我邦に於ける製絲法なるものは簡單なる手繰法にして洵に幼稚のものであつた、尤も富岡提下仁田提などゝ稱する座繰製絲は比較的評判も良かつたのであるけれど之れを輸出しては伊佛の精良絲に比すべくもあらず月鼈の差の夫れよりも甚しいものがあつたのである、又繭の殺蛹法の如きも悉日干法であつたから、其繭質を害し絲質を傷むることは甚しい斯かる幼稚の時代に於て氏は工場管理の方法や繰絲術、さては撰繭殺蛹の方法等を懇切に教授し以て本邦製絲業開發の種子を播下せられたのであるが、就中特筆すべきは氏が伊佛の各地に行はるゝ大枠直繰式を排して、小枠に繰りて更に大枠に繰り返す處の日本式を採用し、以て絲縷の膠着を防がれたることである之れは濕氣の多い我邦に適合したる卓見にして、爾來續々起る處の幾多の製絲場は皆此繰返式に則るに至つた、然れども貯繭倉庫の建築には多窓聯棚の歐洲式を採用し却て濕氣を招き繭を傷むることの多かりしは蓋し千慮の一失か流石の氏も遺は思ひ及ばざりし失策で有つたと自白せられたのである。

伊佛の當業者震駭す

氏の監督指導に依りて製造せられたる生絲の一度里昂市場に顯はるゝや、伊佛の當業者は之れを見て大に驚倒したのである、蓋し彼等は黃色人種を劣等視せるが如く東洋の生絲を以て絕對的劣等のものと爲し度外視し去つたのである然るに日露大戰の結果は黃色人種の眞價を發揮し得て、今更のやうに彼等歐米人も驚歎して居るのであるが、氏の一度我政府に雇はれて新式器械を應用するや忽ち玲瓏玉を欺くやうな優良なる生絲を產出したのであるから、伊佛の當業者が新に東洋方面に一大勁敵勃興せりと爲し、非常に震駭したのも無理ならぬことである、而して之れより官立富岡製絲場の名嘖々として里昂市場に顯はるゝに至つた。

上海に於ける器械製絲の濫觴

氏は明治八年其任滿ちて歸國せられたのである、而して明治十七年上海の米商「ラスセル」商會の聘に應じて再東上し專ら生絲購買の衝に當り、又同商會の爲めに六百六十人繰伊太利式製絲場を建設せられた之れを上海に於ける器械製絲の濫觴とするのである、亞て八百人繰の製絲場を興されしも明治二十三年「ラスセル」商會の破產に依て是等の製絲場は悉く氏の引受くる處となつた。爾して其原料繭なるものは無錫地方の優等繭であるから、其製出する生絲は實に我富岡や伊佛の最良品をも壓倒するに足る絕好の優等品たるを以て、上海の器械製絲は里昂と紐育の二大市場に於て大勢力を有するに至つた、爲めに上海では俄然製絲場建設熱を誘起し、多數の製絲場が簇出したのである、然れども互に原料繭の競爭購買、工女の誘拐賃銀の增加等を行ふたので其結果は收支相償はざることゝなり、片端より閉場するの悲境に陷つた、然れども氏は此時既に自己經營の製絲場を支那人に渡し單に歐洲向き生絲の仲買商のみ營むことにせられ格別の損失を見ざるのみか、上海に來りて二十有餘年の間に、蓄積せられたるの富數十萬圓であるとは、氏も亦慥に致富的成功者の一人たるを失はない。

本邦蠶業界に與へたる間接の功績

之れより先き氏は淸國の蠶種に微粒子毒の多きを認め李鴻章に對して顯微鏡檢查の急要を建白したのであるが、其事淸國に行はれずして我邦に行はるゝに至りしとは妙である、即ち明治十八年のことであつた、淸國上海の滬報新聞に氏が微粒子東漸の事より顯微鏡檢查の必要を李鴻章に建白せられた顚末が載せて有つたのである、夫れを我農商務省の報告課に勤務せる半井榮氏が見て直に陸產課の齋藤素軒高橋信貞の兩氏に見せ互に謂つて曰く本邦の蠶作の每年外るゝのは蓋し此病毒あるが爲めてはあるまいかと、而して時の農務局長田中芳男氏は半井氏をして之れを飜譯せしめたのである夫れより齋藤素軒高橋信貞の二氏相謀りて、上武信の三國より數十枚の蠶卵紙を取寄せ一々顯微鏡檢查をなさしめたるに無毒のもの僅少なるに驚き、早速之れが豫防法を講せねばならぬと、省内に於ける一問題とせられたのが、遂に蠶病試驗場設置の動機となり、蠶種檢查法發布の一因となつたとは某氏の懷舊談である去ば「プリユナー」氏は敢て直接我邦に建策したのでないから、微粒子に關するとは氏を云爲するの要なきが如きも、今日微粒子病に關することの斯く迄に進步せるは、全く氏が李鴻章に建白云々に出てたるを知らば、氏が我蠶絲業界に與へたる間接の功蹟か之れを沒了し得んやてある。

今昔の感に堪へざるものなり

氏は齡漸く傾くに垂んとするを以て此三四月の交に於て老を佛國の故山に養はるゝとのことなるが、其最初の經營地にして又愛女數名の誕生地たる富岡に戀々の情禁じ難く、且つは貧弱なりし我邦の蠶に富强に進める現況を目擊せんとの

念に驅られ客臘家族を携へて來遊せられたのである、而して原合名會社の顧問たる高橋信貞氏は嘗に氏と師弟の關係あるのみならず、今や富岡製絲場は原氏の管理に屬するを以て高橋氏は一日氏を富岡に案內せられた氏去て三十有年事の大小を問はず變化し居るもの尠からずてあるが就中氏の在任中三百人繰にして佛國式の共撚てあつたのが六百人繰伊太利式「ケンネル」と變じ又生繭は蒸殺して其乾繰は風乾てあつたのが、最進步の乾繭室を幾棟となく裝置し其貯繭庫は何十石何百石入りと云ふ大なるトタン張の室となり其貯藏せる繭の香氣馥郁たるに一驚を喫し氏の寢室として愛子の誕生せる室の今は工女部屋となれるを見て如何にも今昔の感に堪へざるものゝ如く俯仰徘徊去る能はざる有樣てあつたとのことである。

氏は富岡製絲場の變遷如此にして本邦蠶絲業の頓に其面目を改め居れるを目擊し必ずや驚歎すると共に一面には器械製絲の模範を示したるの効果空しからざるを思ひ大に滿足せられたてあらう、吾等も亦た深く氏に感謝の意を表する者てある氏よ庶幾ば健在なれ。

（本編を草するに當り川島忠之助高橋信貞の兩氏より有力なる材料を提供せられたり依て玆に深く兩氏の厚意を感謝す）

逸響

滿洲の蠶業に就て

通信委員　小田宗孝

滿洲に於ける蠶業は將來益有望なることは吾人の言を俟たざる所なり、然ども是が經營上大に注意を要せざる可らざるものあり、何や曰く近來滿洲經營の名の下に本邦人の渡航する者陸續踵を接するに至りたるは邦家百年の爲め大に慶賀すべき現象なりと雖、顧て渡航者の心事如何を觀るに滿洲は土地廣く且つ利源に富み勞少くして一攫千金を得へしと云ふ如き空漠たる考を有するもの比々皆然らざるなきが如し、此等の輩は渡航後忽ち失望落膽甚しきは朝夕饑渴に泣くの悲境に陷るに至る、今や日清國交愈々親密を加へ清國は本邦人の企業に最も便宜なる國土なりと雖も元來清國の建國は久しく幾數千の星霜を經たるを以て自獨特の人情風俗習慣あり故に苟も此地に於て一事一業を經營せんと欲せば、先づ此國人を知悉するか然らざれば良き手引あるに非ざれば五里霧中に徘徊するが如く到底成効覺束なかるべし是れ業の何たるを問はず苟も事業を經營せんとする者の大に注意せざる可からざる要點なり現に滿洲に在りて轗軻を呼ぶ吾同胞は豫め渡清後果して如何なる業務に從事すべきや若くは如何に事業を計劃すべきやを考究せざりし輩なりと云はざる可らず。

由來滿洲開拓の業は吾人同胞の力に待つもの頗る多く同胞の渡清者益多數ならんことは、最も望ましきことなりと雖唯徒らに渡航ずるも失望落膽に陷るに過ぎざるのみ故に將來渡航せんとするものは、須らく此等の點に就き大に留意すべし。

滿洲蠶業經營上研究せざる可らざる問題種々ある可しと雖前既に述べたる如く清國は本邦に於けると大に事情を異にするを以て本邦の蠶業を移して直ちに此國に採用するは當を得たるものと云ふ可らず果して然らば夫れ如何にせば可なりや一言の下に言明する能はずと雖要するに清國に於ける蠶業上の要素を調査し之れが計劃をなさざる可らざること緊要の事なりとす。

顧ふに滿洲に於ける一般農業の事情より蠶業經營上其要素如何と云ふに土地氣候及び勞力之なり而して此三者共に蠶業に適し且つ綽々として餘裕の存するものあり滿洲の地勢至る所山岳多く起伏嘗ならずと雖廣漠たる平野亦決して少きにあらず而して此等山間に介在する平地は至る所耕地にして且つ多くの山岳其半腹に至るまで既に開墾せられ又開拓に適する所少なからざるが如し加之水田なるものは絕て見ざる所にして大概皆畑地なりと云ふを得べし其土質は片麻岩花崗石及び粘板岩等の風化せるものにして樹木の栽植に適することと作物繁茂の狀況に依り見るも察知し得られざるに非ず殊に柞樹桑樹の栽培に好適なるは柞樹成育の狀況に依り又點々桑樹の能く繁茂するの實況を見て以て知るを得べし亦現今に於ける農法を改良せらるゝに於ては其畑地に餘裕を生ずべきのみならず新たに開拓したらんには柞樹或は桑樹の栽植に適する場所尠なからざるべし。

伊國の栽桑業（承前）

學務委員　峯村喜藏

予が各地に於て調査せる既に成木したる高刈仕立の桑樹につき記する所あるべし。

1. Argua Tetrarca（地名）に於て
幹周三尺六寸、高さ四尺より四幹となり、更に十二に別れ、夫より又分枝して新條の生ずる頭部六十四を有し、一頭部より約十三條づゝを發生せり、

2. 幹周三尺五寸、高さ五尺より四幹となり、更に十二に別れ、夫より又分枝して新條の生ずる頭部三十六を有し、一頭部につき、平均五條づゝを養成せり。

3. Arsego に於て
幹周六尺三寸、高さ五尺より二幹となり、夫より多數分枝せり。

韓國の蠶業（承前）

農商工部蠶業試驗場技手　長岡哲三

然れども前記特種のものにありては室の兩側に蠶架を立て蠶箔は方形の木枠に「チガヤ」を以て編み製したる簾を敷きたる者にして、蠶箔臺もあり細桑器もあり其の他大抵蠶具を備へたり、平壤を去る數里金某の如きは蠶箔同蔟細桑籃其他の蠶具は勿論鑑定をさへ日本より購入し、設備は殆んど間然するところなきもの、如くなれども、如何せん飼育術の拙劣なる結果は繭の收穫量極めて少なく、其の宜しきを得ざるとに依りて休業の姿にあり。

三、蠶の種類

韓國の蠶種は其の在來種は悉く三眠蠶にして幼蟻は琥珀紋を有するものあり有せざるものあり、成繭は綿繭種と黃繭種とあり、而して彼等は人爲淘汰を加へて種類を改良することなきが故に、現今彼等の飼育しつゝあるところの蠶種は極めて雜駁にして、成繭も二乃至三

韓人士地開墾の光景

（長岡氏寄贈）

色を混ずること珍しからず、飼育日數は比較的長きを要し、三十日乃至三十三、四日を要するもの、如く、後に給桑量は少からざれども收繭量極めて少なし、且つ繭形小さく繭層薄く絲長短く其の品質極めて劣等なり、是等のことは東京蠶業講習所に於ける數年の調査試驗に依り明かなる所なるが、桑業の劣惡なる飼育術の拙劣なる、韓國養蠶の收むるものは等しく同種の三眠蠶と云へども、東京蠶業講習所の毎年飼育して收めらるゝ成繭に比すれば、給桑量に至りては一層繭と層繭との如く差異あり、甚しきに至りては一見野蠶か見まがはるゝものあり、蠶種は韓國養蠶の改良發達上急務中の急務なり。

外國種として予の見たるものは主に日本産二化性にして、春期其の第一化を飼育し、是より蠶種を自製し、夏に夏期に於て第二化を飼育す、一化性の日本種も、予は春蠶時期を經過したる後視察したれども、邦人の經營に係るものは其の成績は以外に不良なるを見ざりし、予私かに思ふに一化性の日本種は一時一部韓人即ち前記比較的大養蠶家の需用少からざりしも、繭質の宜しからざるを見聞したる外國の韓人が其の原因を日本蠶種と日本的飼育法（極端な

2. 幹周五尺三寸、高さ六尺二寸より三幹となり、夫より多數分枝せり。
3. 幹周五尺、高さ六尺六寸より三幹となり、夫より多數分枝せり。
4. 幹周五尺四寸、高さ六尺より三幹となり、新條を生ずる頭部十七を有す。
5. 幹周三尺三寸、高さ五尺三寸より四幹となり、新條を發生する頭部十六を有す。

Kaiono Yamimura に於て

1. 幹周二尺三寸、高さ四尺六寸より四幹となり、更に二十七枝に別る。

Chiyo に於て

1. 幹周二尺八寸、高さ五尺より三幹となり、夫より十二頭を有せり。
2. 幹周二尺八寸、高さ四尺五寸より三幹となり、二十二頭を有す、植附後十七年目なり。

Cartosio に於て

1. 幹周六尺八寸、高さ六尺五寸より分幹分枝せり。
2. 幹周七尺一寸、高さ六尺五寸より分幹分枝せり。
3. 幹周六尺六寸、高さ六尺五寸より分幹分枝せり。
4. 幹周七尺四寸、高さ六尺五寸より分幹分枝せり。

以上四株は植附後百年餘を經過ず。

伊國にありては、野桑の接木せざるものにありては能く二百有餘年、家桑の接木桑樹にありては百有餘年の壽命を保つと云ふ。

耕耘

圃場の耕耘には、牛を使用するもの多く、馬を用ゆるもの至つて少なし、粘質に富みにありては、牛二三頭を合役し、其合力を利用して耕耘を行ふ、此耕牛一頭の價約一千法なり、前記の如く、時に所謂桑園なるもの少なきにして、時に桑樹の爲に耕耘を行ふには、あらざれども、專桑園にありては、年中三回にして、即ち二月頃、六月頃、一回八月頃一回とす、「パドヴア」蠶業試驗場桑園の如きは下部は悉く牧草場なるを以て、更に耕耘を行ふ事あり、牧草を收納する爲め、年内三回刈り取るのみ、一「エクタール」第一期三千五百基、第二期二千基、第三期は一千五百基、其之れ七千基にして、百基六法五十參に價し、總計四百五十五法となるなり。

施肥

桑樹の施肥は、其樹の大小により異なると雖も、概して三年毎に一回五十基の收桑ある桑樹に對し、約七十五基の堆肥を給す、又は毎年一樹に對し、五百「グラム」の過燐酸石灰と、五十「グラム」の鹽化剥篤亞斯を給するのあり、若し生長惡しき樹に在りては、更に百「グラム」の硝酸曹達を添加す、而して其施肥法は、樹の周圍に穴を穿ち此中に與へて直に土を覆ふなり。（未完）

る箱飼育法の知き）の韓國に不適當なりと思惟し、却て需用者を誤りたるものにあらざるなきか疑なき能はず、而して一般小農民にありては（日本より原種を求むる等の念慮もなく又方法をも知らず只々舊慣を墨守して蠶は運の盛なりと迷信し居るもの、如く眞に憐むべきものなり。

又支那種に似たる蠶兒を見しことあり、たるを以て彼等に向て其の種類及原産地等を問へたるに、單に洋種とのみ答へて要領を得ず予は蠶兒の體色のみによりて判斷しかね、卵を見んと欲したれども生憎卵もなく遂に不得要領に終りたりしか或は勞働者の媒介に依りて若くは日本を經て清國種の傳播したるものならんか。

（未完）

佛國昨年の收繭高

佛國農商務省の調査に據れば昨年の佛國收繭高は七百五十二萬四百十七基にして其前年分八百萬九千九百三十八基に比し四十八萬九千四百六十一基の減作せる所以は昨春氣候不順にして養蠶の運滯せしに加ふるに蠶卵孵化高の如き亦三十八年に於ける十八萬九千三百七十九「オンス」より減じて昨年に於ける十七萬八千三百三「オンス」に降りたるに基因するものなるが如し。

今茲に佛國養蠶業昨年の統計を掲ぐれば左に表示するが如し。

養蠶地方　縣　二四　孵化高　一七八、三〇三「オンス」

養蠶者員數　一三二、〇四五人　生繭收穫高　七、五二〇、四七七基

最近十箇年間年々の佛國收繭高及養蠶者員數は微々たる變動あるに止り、殆と不動の姿なることは左の統計に因りて寛知せらるゝ所なり。

年次	養蠶者の數 人	蠶卵孵化高 オンス	生繭收穫高 基
明治三十年	一三三、二五三	七、七六〇、一三二	七、七六〇、一三二
同三十一年	一二三、二八八	一八四、九八〇	六、九五三、〇三三
同三十二年	一二八、一一四	一八二、九四五	六、九五三、三三九
同三十三年	一二六、五一四	二〇五、五八四	九、一八〇、四〇四
同三十四年	一二三、六九四	二〇五、一七四	八、四五一、八三九
同三十五年	一二八、一九九	一九八、四二一七	七、二八六、五四一
同三十六年	一二〇、六六	一八二、七一二	五、九八五、四八一
同三十七年	一二五、二四四	一八三、四四三	七、八二五、四八五
同三十八年	一二三、七六一	一八九、二七九	八、〇〇九、三九八
同三十九年	一二二、〇四五	一七八、三〇三	七、五二〇、四七七

前掲統計に因り各年の孵化高を以て其收穫高を除せば每「オンス」の平均生繭產額を知ることを得べし乃ち最近三箇年間年々の該產額を算するに平均四十二基強に達せるを見る繭質の善惡は大に生絲產額に關係する所あるを以て各年に於ける收繭高の增減は比例的に生絲產額の增減を表示するものにあらずと知るべし即ち佛國昨年の收繭は絲量豐にして解舒好良なるの結果其減作を多少償ふ所あるべしと。（山田蠶業報告）

問答

不眠其他の件に就ての質問

長野縣通常會員　木島太藏

（一）余の飼育する春夏種蠶は共に齡間極て健全に發育すれども、各眠に際し比較的多くの不眠蠶を生じます、之れが原因及豫防法等御明教を願ひます。

（二）催青器は本邦養蠶家に將來益々奬勵すべき要具ですか要具であるとすれば何氏の發明に係る何式のものの最も宜しいですか、之れが販賣店及價格等に付御教示を願ひます。

（三）「ホルマリン」液を以て上等座敷に撒布消毒するも、天井及戸障子を汚し、又誤て之れを撒布したる衣類は如何なる工合に汚れるですせう、又其保存上毫も差閊のないものですか。

答

學務委員　土屋泰

（一）不眠蠶の生ずるは飼育中左記の缺點あるに因るものが多い。

（イ）蠶床冷濕に過ぎて、鐵沙中往々徴を催ふすが如きもの。

（ロ）蠶床常に乾燥に過ぎ給桑の枯干速かにして、食桑中の水分缺乏を告ぐるもの。

（ハ）飼育室の區劃宏大に過ぎ溫度の調和宜しからず室內概略冷濕にして溫度に劇變あるもの。

不眠蠶と飼育法との關係は概略前記の如くであるから、之を豫防せんには前記各項の弊なからしむる在るのである而して不眠蠶は慣と病原を同ふするから、傳染するものであると云ふことを忘れてはならん、即ち蠶室蠶具類の消毒を嚴密に行ひ且飼育中に生ずる該病蠶は努めて速かに之を除去せねばならん

（二）蠶種催青器の忽にすることの出來ないことは今茲に言ふを俟たざる所であるけれども、近來世間に用ひらるゝ催青器は概ね小型にして、溫度を調和し易き同時に少費の失念ありて亦劇變を來し易き弊がある、故に安全なる催青法を講ずるは養蠶者の急務である。

（三）「フォルマリン」液は色素に對し、何等の變異を與ぬ性質を持て居るから、衣類其他室內の裝飾品等に撒布するも適當へのないものである、然れども天井板、襖、障子等に塵埃

或は煤等の着き居る場合は、之に撒布せば爲に幾分の痕跡を殘すの虞なしとは云はれない、又衣類等に浸潤するも保存上には少しも障害のないものである。

桑樹の病害に就ての質問

愛知縣 通常會員 田中榮太郎

本縣寶飯郡等の桑園では、一二年前より毎年九月上旬より、桑葉の裏面に淡黄色の粉末を撒布したやうの斑紋を生じ漸次褐色に變じて桑葉が枯凋しますが、之れは赤銹病ではありませんか、又同一の桑園でも比較的遲く刈り取り、多少發育の盛ならんと思はるゝ十文字種の如き晩生桑には多く、之れに反して遠州高助種の如きものは殆んど徵候を認めない又九月上旬頃は當地方で盛んに秋蠶を飼育する時期であるゆゑ、該桑葉を五齡二日目の蠶兒に給與せるに、少しも嫌忌する狀態なくして喰ひ盡しましたが是れが爲めか又は他に原因ありたるためか、一二日間に俄然多數の軟化病蠶を生じ失敗を受くるに至りました、依て被害の有無に關して左の疑問を生じたから詳細に敎へて下さい。

一病名並に病原

一該桑葉を蠶兒の飼料に供し蠶兒並に成蠶に及ぼす被害の有無若し被害あらば其豫防方法

一同一桑園內でも桑種に依り被害の有無ある理由

答

學藝委員 農學士 理學士 堀正太郎

質問の病害は「フイルアクチニア、コリレア」と稱する病菌の寄生に依りて起る者て、裏白澁病と稱する病害である、本病は桑葉の勢力が衰へたときに發生するのであるが、降雨多ければ特に發生し易い、種類に依りて被害の有無多少あるは即ち桑の種類に依りて遲くまで勢ひよく成長するものと、秋季に至りて早く勢力の衰へるものとあるからである、又肥料の如何に依つても同一種の桑に斯の如き差異を生ずることがある。

被害桑を蠶兒に與へて害のあるかなきかは常に起る質問であるが、我輩は常に無害であつて又多少の害もあるであらうと答へて居る、何となれば、病菌其ものは蠶兒に無害と信ずれども本病の發生した病葉は勢力の衰へたものであるから養分が少ない、從て蠶兒に給桑しても發育が宜しくなからうと考へられるから、白澁病の附かない桑を與へるやうではない併し病桑を與へたならば病蠶が多かつたと云ふ話は病桑の爲めか他の原因かは、不單純な事實で解決は出來ない、前にも言つた通り降雨の多いときに發生するから濕桑を給したかも知れん、又空氣の濕氣の多かつた爲めかも知れん、何にせよ病蠶の多かつた理由は充分の調査をしなければ解決し難い問題て、之を單に病桑直接の害といふことに斷定することは出來ない。

「ゴム」質に就ての質問

熊本縣 通常會員 上田理一

(一)解舒の惡るい繭は「ゴム」質の固着であると聞いて居りますが實際ですか。

(二)「ゴム」質とは如何なる成分より出來たものですか「アラビヤゴム」のやうなものとは違ひますか。

(三)生絲より「ゴム」質を全然分解し得るものですか。

答

學藝委員 農學士 中村雅次郎

(一)繭の解舒惡しき原因は大約左の二である。

甲、上蔟時期中の多濕、過溫の殺蛹乾繭及び過乾等に基因する「ゴム」質の固着。

乙、過溫度の殺蛹乾繭、過乾及び貯繭の方法を誤りたる爲めに原因する絲質の脆弱。

(二)繭層は主として「フイブロイン」(絲素$C_{15}H_{23}N_5O_6$)及び「セリシン」(絲膠$C_{15}H_{25}N_5O_8$)と稱する二成分より形成したるもので、所謂「ゴム」質とは右の「セリシン」を稱し、彼の「アラビヤゴム」とは全く別物てある。

(三)繭層若くは生絲を一、「パーセント」の炭酸加里溶液若くば炭酸曹達溶液を以て一時間許り沸煮するか、若くば無水繭層又は生絲量に對し、四分の一量の「マルセー」石鹼溶液を以て繭層若くば生絲を四十分間沸煮し、此工程を二回反覆したる後三、「パーセント」二、「パーセント」一、「パーセント」(無水原繭絲量に對し)の結晶炭酸曹達溶液にて順次三回洗滌したる後、微溫湯にて再三洗ひ、最後に醋酸の二、三滴を加へたる水中にて洗滌を施す時は「ゴム」質の殆ど全部を除去し得べし、彼の練絲は即ち「ゴム」質を分離したるものてある。

然れども實際製絲をする上に於て徒に「ゴム」質を除去することに努むるは不利益であるから、解舒惡しき繭でも、繰絲湯中に藥品を加へて解舒を助けんとするは危險である、されば解舒不良なる繭にありては(貯繭を誤りたる場合を除く)豫め多濕室內に一晝夜間放置し、繭層內に濕氣を含有せしめたる後繰絲するがよい、又貯繭を誤りたる爲め解舒不良に陷りたる繭にありては(其害甚だしからざる時は)再び乾燥して繰絲せねばならぬ、以上の如くすれば危險少なくして繭の解舒を稍々佳良になし得るのである。

不要存置國有林野拂下に就ての質問

德島縣 通常會員 吉岡要藏

(一)會報第百七十五號に御掲載の不要存置國有林野桑園拂下に關しての手續及方法等を御設明下されたい。

(二)官有林野は如何なる手續きにて何官署宛出願すべきや。

(三)舊道路の如きは如何なる手續きにて、何官署宛出願すべきや(新道路開通の爲め舊道不用の箇所等)

(四)河川沿岸地及谷川沿岸地並に共有地の如きは如何なる方法にて何官署宛出願すべきや。

答

學藝委員 農學士 加賀山辰四郎

一、國有林野の賣拂豫約出願の手續は、明治三十二年農商務省令第二十五號國有林野法施行規則に付承知せられたし願書は同規則第二號書式に依り大林區署長に提出せらるべ

し、尚同規則は明治三十九年十一月二十日農商務省令第三十一號を以て、一部改正せられたるから之をも參照するが良い。
二、前號に依り明瞭であらう。
三、四、舊道路、河川沿岸等の土地は國有林野であれば、第一號に依り賣拂豫約を出願することが出來る。

上杉鷹山

一國家は先祖より子孫へ傳候國家にして我利すべき物には無之候
一人民は國家に屬したる人民にして我私すべき物には無之候
一國家人民の爲めに立たる君にて君の爲に立たる國家人民には無之候
右三ヶ條御遺念有間敷候

天蠶及柞蠶飼育の利益

通常會員　靑木勘平

我信州南北兩安曇郡の如きは夙に天蠶及柞蠶の利を認め盛んに之れを飼育し、苟も櫟林櫧林の存在せる箇所は盡く飼育地となし、更に進んで千葉愛媛北海道等に出張飼育をなし、或は土着人をして經營せしむるの氣運に向ひつゝありと雖も、世人は未だ全く天柞蠶の何物たるを知らず。隨て斯業の利を說くもの曉星の感あり故に余は聊か之れに就て述ぶる處あらんとす。

天蠶及柞蠶は野生蟲なり、之れを秋季空しく落葉泥土に歸せしむる櫟葉櫧葉を利用して、枝打若しくは拔き代りをなしたるものに、放養せば、即ち滿足の結果を得べし、今當地方に飼育せる天蠶柞蠶に對する收支計算を舉示すれば下の如し。

天蠶二丁歩に對する收支計算（天蠶は二丁歩に一升柞蠶は一町歩に一升放養す）

樹木の疎密土地の其否氣候の順不順により收繭の量一樣ならずと雖、概して二丁歩に對し原種一升（一升乃卵種は約十四萬粒）を飼育し得べし、而して此收繭上作五萬粒普通作三萬粒とす、今普通作により勘算すれば、一萬粒に付價格平均七十圓（七十圓より八十五圓迄あり）なるを以て、三萬粒乃ち金二百十圓外に薄皮繭九萬粒此代金十五圓計金二百二十五圓の收入なり。（本年長野縣に於ける天蠶の統計を見るに掃立數量一升に對し三萬三千粒の收繭なり）

右に對する支出

金貳拾圓借地料、金貳拾五圓蠶種一升代、金參拾錢糊及紙代、金拾五圓蠶種放付人夫及保護監督人夫賃（害蟲驅除又は飼料の欠乏したるとき林樹の蠶兒を他の繁茂したる樹木へ放し替へをなし又は收繭をなす人夫賃延日數五拾日間とし日當參拾錢を支給す）金壹圓五拾錢乾燥料、計金六十壹圓八拾錢

右收支を對比すれば收入金貳百貳拾五圓なるを以て差引金百六拾參圓貳拾錢の利益なり、即ち一町歩に對し金八拾壹圓六拾錢の純益なり。

春柞蠶一町歩に對する收支計算

柞蠶も天蠶と同しく樹木の疎密土地の適否等により收繭量に多少の差あれども一町歩に對し春秋二季に於て原種二升内外を飼育するを得べく、而して此收繭上作十萬粒普通作七萬粒今普通作により勘算すれば、一萬粒に付き平均貳拾圓（一萬粒拾五六圓より參拾五圓迄あり）なるを以て此金壹百四拾圓外に屑物拾圓計金壹百五拾圓の收入なり。（本年長野縣に於ける天蠶の統計を見るに掃立數量一升に對し三萬四千粒余の收繭なり）

右に對する支出

金六圓借地料、金六圓蠶種一升代、金參拾錢糊及紙代、金九圓蠶種放付及監督人夫賃、（…….）內天蠶に同じ、金壹圓五拾錢、繭乾燥料計金貳拾貳圓八拾錢秋柞蠶も之に準するにより支出を倍すれば金四拾五圓六拾錢となる。

右收支を對比すれば收入金百五拾圓なるを以て差引一町歩に對し春秋二季に於て金百四圓四拾錢の純益あり。

備考　林相を仕立つる爲め每年秋季一町歩の櫟林より得る樹枝は五駄を得へし一駄金參拾錢とすれは金壹圓五拾錢なり右收入は手數と相殺す而して一町歩より得る下草二十駄一駄金參拾錢此代金六圓は下草刈人夫を差引餘りあれば收入となるべし尙計算書中天蠶二町歩柞蠶一町歩は天蠶に比し放付量少きによる恰も天蠶二町歩は柞蠶一町歩飼に同し

長野縣南安曇郡西穗高村岡村廣吉氏本年茨城縣東茨城郡に出張飼育を爲したるもの丶成績を擧げ之れを事實に示さん

支出

金壹百七拾六圓　借地料山林反別五十八町六反歩（一町歩參圓平均）
金五百拾七圓五拾錢　天蠶種掃立數量二斗七合　一斗代金貳百五拾圓
金拾圓五拾錢　種付人夫
金四　圓　糊及紙代
金四拾五圓　蠶兒保護監督人夫賃（一日平均三人づゝとし延人員百五十人一日參拾錢）
金參百貳拾五圓　繭乾燥料及收繭人夫井に運搬賃（此運搬賃は茨城縣より鄕里迄）

支出總計金千〇七拾八圓

收入

金四千五百五拾圓　天蠶繭　六拾五萬粒（一萬粒平均七拾圓の相場）
差引金參千四百七拾貳圓　純益金
乃ち一町歩に對し金五拾九圓貳拾錢の利益あり（監督人夫に於て稍不足の感あり）

本調査は本年八月東京蠶業講習所技手松下憲三郞氏と同氏の宅を訪問し元帳によりて勘算したるものなり

柞蠶に付き愛媛縣東宇和郡にては明三十八年始めて飼育し其成績頗る良好にして、爾年共數十萬粒收繭し亦天蠶に付きては石見國に於て本年飼育をなし、三十萬粒の收繭を爲せしと云ふ、右は何れも製絲工場のなき爲め、本郡の製絲家の手に引取れり、依て以上の計算に徵すれば耕地も尙及ばざるの純益あり、況や耕地となすこと能はざる薪炭材用地の山嶽を利用して、光澤絕美なる蠶繭を收得するに於てをや、而して我邦の地勢と天蠶柞蠶飼育との關係を見るに頗る好望なるあり、今我國の山林面積は約千九百萬方里なりと聞く、此內櫟林櫧林のある箇所を十分の一と假定し、更に飼育の行はるゝ箇所を又此十分の一とせば、約十九萬方里に飼育するを得べくして、現在の林相に一步を增さゞるも尙五千萬圓の新財源を得て彼の繭質粗惡なる清國柞蠶絲の輸入を防ぎ、內地の需用を充たすことも容易なるべし、天下遺利の甚しき如斯ものあらんや、依て余の實際に鑑み飼育者の參考ともなるべき事項を列擧す。

一櫟林が飼育に適するや否やを調査すること必要なり即ち天蠶は乾燥地にあらざれば宜しからず且旱天を直しとす、反之柞蠶は天蠶の發育不良なる土地にあり

ても何能く成長を遂げ多少降雨を好むものゝ如し左れば同川敷岸にして洪水のため土地流沃となり樹木の繁茂する場所は天蠶に適せざれと作蠶は之を飼育するか得之蠶に水分多く加之枝葉交叉繁さため日光の透射不良なるに因るあるんか、而して飼育場所糸付せる場に於ては可成東方若くは南方に面し日光の透射宜しき場を選まるへからず又地形の發育に亦考を加へ有すること肝要なるなり第一まず場畝の土層赤土若くは混土質にして下層小石なるか第二とす是等は宜しく天蠶の飼場を選ひに必要にして作蠶は餘り土質を選まざるも一般の場に飼育することを得。

二原種にして不良なりしか如何に飼育に精を盡し如何に必要を尽すと雖若甲種なし故に蠶種の良否を飼育する以前論其製造場たるや益も吟味せざるべからず。三事業經営の場合には位置の選定林相住立方政は客良蠶除法等種々の研究を要項あるに付故常に精通し多年の經驗ある者の第一は蠶業に當らしむる事

以上の如くにして其始め場勢政は蚕業の如何を察し、飼育を試みなば本邦を農業縣郡下に於ける知り好成績を得て國家の富源を開拓する如くなり又主如者に於ては新業の奨勵を謀る為めに天蠶作蠶飼育の為め要存設備有林野の樅又は樅の伐採后二年乃至四年生のものを借受けんこと出願するものある場合には、左の二項を確守するものに對し當分茨城縣野郡縣を限り一ヶ年間貸付けらるゝことあるべしとの意原を明治三十六年十一月發せられたり。

一普通蠶又は樅蠶の作為飼育する種量の作為飼育する程度に食せしめ樹木の成育を害せざる樅相當の設備を施すこと

森に識和協約の結果として新潟一帶の柞蠶飼育場に於ける損利ある我國に收得せる今日迄、に一段の有望なるを確信して疑はざるなり。

蠶種郡送に對し當局者の注意を望む

農業會員　馬場政五郎

個の試驗を以て斷定下さんとするか如きは早計にして、黒種には風穴貯蔵の危險發生蔵見の枯死等尚大に研究を要すべきものあり。

秋蠶の起源は生種にして現に年々産額を増加し日五十萬枚余の蠶種は一般蠶家に歓迎せらるに見て、生種には何等かの特長あるか知るべし、要するに生種の特長知て之か蠶種の製造に改善を加へ、黒種の短所を補ふて風穴貯蔵の安全か計らは秋蠶業の發展は期して待つべし予は此邊に向て世の學者蠶業家が秋蠶の奔駆に顧慮するなく設意一層の研鑽を望む。

鹽類と衛生

鹽基要法實驗以來鹽民の苦むこと甚しであるが、全體鹽類と云ふものは吾人の衛生に如何なる關係を有するものであらうと云つて之れを調べて見れば、餘り鹽類を多量に用ゆるは命脈害あれとも、亦餘り少量にするは宜しくない、少量であると消化器筋肉及神經の機能等を興奮せしむる處の虞れがあるからである。

資料

蠶絲業の根柢を堅固にせんと欲せば、桑園の増殖培養に努めざるべからざると、今更喋々を要せざる處なり、夫れ然るにも不拘一年一年に桑園の荒廢甚しきを加へんとするは、識者の痛歎措く能はざる處にして、之れが救濟の策を講ずるは目下の急務なり、而して此救濟策に就ては世間種々なる方法を主唱するものなきにあらざるも、其多くは經濟上の調査を等閑に附し、未だ以て吾人を首肯せしむるに足るもの尠きは、甚だ遺憾とする處なりしが、此際長野縣下の伊那郡松尾村の人木下富之助氏の調査せられたる、桑園經濟の如きは、大に當業者の參考になるべしと信ずるを以て左に之れを掲ぐることゝ爲せり。

臨時桑園經濟調査

農業會員　木下富之助

金沢縣鳥羽縣宮城縣山形縣の三縣下へ蠶種を送越せしに、去る一月より米年一月迄に數回該蠶種柞蚕の被害を生じたり、北蠶種を飼育するに一様ならず、或は孵化二寸過り、或は其一角或は其殆面の中部分等にして、障害の起因は何れの點に存するや、而して鳥羽業者中には東北地方へ送越したる蠶種に對し同一の被害を被りたる者二三に止らざるなり、思ふに同一蠶種を各地へ送越したる中に於て特に東北地方へ送りたるのゝみ多く異狀を伝たるとより見れば、或は夫れ農業の指導なるやはて各縣傳員が防塞の爲め「テーブル」の下に火力を用ひ居りつつ之を顧みずして無意に其卓上に蠶種入れの行囊を置ふたりがかためもんが、又間設育森行の設送には嘗氣盛烈の地方なるか只に防塞の爲め厚り蒸氣熱を加へらるゝとあれば蠶種を入れたる行囊を其送熱箱の上に置くことなしとも限らざるべし、電に角蠶種の枯死は其他に關れたる結果なる事言を俟たざる處なれば以上は予が現に說述したる實況を述べたる處なるが、政は夫れ冬氣の發送に極る蠶種中今日其害を顧みざるも、已に幾多の熱氣に障害を被り居る蠶種をして蠶種中今日迄の如く孵化せしめ居る事は、本邦の富源を開拓する上に於て大に遺憾とする處なり、故に當局者に寄き注意を加へられんこと事を望む。

尚大に研究を要す

特別會員　鳥羽久吾

生か殺か技師にむかつて調査上の見解につき質問みなやや、本角氏は試驗表を掲げて高敬を乞れたる、尚に敬答に堪へず而して其題する所。

生種は結實良しきも結繭量か多い

生種は結實良しきも結繭量か少ない

との二點を以て、生種は黒種に劣りたりとの斷案を下さんとするにあるも、君は未だ秋蠶生種の蠶見徒部諸設發育等一なる風儀を知らざるを惜とす、蚕に繭量の減少絲量の増加は飼育者の技術により容易になし得べく、且つ君の試驗は種製名稱は何種なりし記載なき故以て明かならざれ共、小生が第來の種類試驗によれば二化性中、大良龍千代鶴の如きに在ては繭量一匁の繭量年により多少の相違あるも約三十貫以て足り、其正論は三貫匁下らず繭量百匁中十一匁余あり、如此く繭量繭量等の増減は甲乙飼育家が異にするに從ひ殺かる能はず、本角氏一

一、調査理由　本桑園は明治三十四年より同卅九年に亙る六ヶ年間に植込みたるものを同卅九年度に於て對登段歩の經濟を調査せしもの

一、調査月日　明治三十九年九月十八日

一、場所　下伊那郡松尾村大字毛賀

一、地質　壌土

一、等級　等

一、地價　壹坪に付六合五勺

一、小作米　七十五圓

一、桑樹種類　小牧

一、植込株數　五千四百本

一、仕立法　根

一、植込間數　唯市或尺五寸　株間八寸

一、雇命　六ヶ年

明治三十九年植込

初年

支出之部

種目	數量	價格	單價	備考
小作米	一、九五〇	三五、三四〇	一八、一二五	
計		三五、二四〇		
植付 整地 苗木	五、四〇〇本	一六、二〇〇	三〇	苗木は二尺以上のもの用ゆ
整地	七工	二、四五〇	三五〇	
植付 移植	八工	二、八〇〇	三五〇	
計		二一、四五〇		
肥料 人糞	一〇荷	五〇〇〇	五〇〇	
堆肥	二〇〇貫	四〇〇〇	二〇〇	
豆粕	五枚	一〇〇〇	二〇〇	
計		二〇〇〇		
合計		三〇、二〇〇		

種目	數量	價格	單價	備考
中耕除草	一二工	四、二〇〇	三五〇	桑葉密度し雑草の發育銭から以て大に人工を減ず
施肥	八	二、八〇〇	三五〇	
害虫驅除	一	三五〇	三五〇	
計		七、三五〇		
刈取運搬	二	八〇〇	四〇〇	
桑葉	三六〇貫	七、二〇〇	二〇	
桑株	二人	八〇〇	四〇〇	
計		八、八〇〇		
器具損料 紙		一〇〇		
鍬		五〇		
其他		一五〇		
計		一〇、二一四〇		
合計		三〇、二一四〇		

収入之部

種目	數量	價格	單價	備考
春蠶刈桑	七〇〇貫	八七、五〇〇	一二五	
夏期桑	五〇貫	一〇、〇〇〇	二〇〇	一株に付其本数を取る下部より一尺極乃至一尺位迄の間を取るものとす
同繭	四〇貫	一三、三三三	三三三	
秋期繭	一三、三三三	九六、〇〇〇	三〇〇	
桑	三〇貫	九六、〇〇〇	三〇〇	
合計		二〇六、八三三		

損益計算

支出	収入	損	益
一〇二、一四〇	二〇六、八三三		一〇四、六九三

絲況

横濱市場

二月上中旬に於ける横濱生絲市場の光景は、商勢兎角振はず取引曾無の姿にて閑散を極め、絲價亦た下向きつゝ上一番格將に一千二百圓臺を破らんとしたりしが、下旬に至りて又々定期絲の活躍せると、海外より新規注文到れるとに依り、相場上進の歩調となりて、上一番格再び一千二百七十圓迄引戻し氣勢頗に軟回したり、而して全月中に於ける手合三千、百〇六個賣了九千、五百三十、九個にして、之を昨年の同期に比すれば、手合に於て四千、八百、五十九個、賣了に於て五千、二百、十五個を減じたるも、昨年來生絲貿易隆盛の結果、産地よりの入荷次第に薄らぎ、隨て市中の在荷空乏を告げたるが爲にして寧ろ在荷の割合より之れを見れば、其商況の順調に在りしことを推するに難からざるなり。

而して茲に特に注意すべきは、昨年度に於て太上一番格の賣行好況なりし際には、優等品の相場は其割合に直間き鈔かりしも、昨今は之れと反對に優等品は格高に手合出來しつゝあること之れなり、斯くて現下の好景氣は一時的のものにし

て永續すべきものにあらざるか、或は夫れ春引絲の出廻はりと共に更に一層の好況を示すものならんか、之れに就ては强弱共に氣迷の姿なるが如しと雖も、初商談以來二月末日迄に新絲の先約定せられたるもの四千俵に達し、伊國の如きも本年十一月迄の先約定續々締結せらると稱し、一面歐米に於ける機業の大勢より觀察すれば、適品の拂底は勢ひ絲價をして空位を擁せしめ或は延て一時下落の趨勢を示さずとも計り難きも、目下の成行より甚しく下位に降るべしとも思はれず、旁々本年の製絲界は多望なるが如きも、當業者の爲には頗る警戒を要するものありて存せん。

而して本月中に於て最も高價に賣行きたるは、山梨縣矢島組銀太の千三百圓にして、最も低價なりしは長野縣中野館太千百七十五圓なりとす、今一月以來の最高價と前年の夫れと對照すれば左の如し。

生絲最高價月別前年對照表

	明治四十年		明治三十九年		價格之差
一月	山梨縣矢島組金太	一、三一五圓	愛媛縣河野製絲太	一、〇九〇圓	二二五圓
二月	山梨縣矢島組金太	一、三〇〇	神奈川縣兄弟社細	一、〇九〇	二一〇

今左に本月中の生絲集散種別表を掲げて參考となさん。

明治四拾年二月自一日至二十八日生絲集散表

	持越	入荷	賣了	地方積戻	繰越
器械	九、〇六二	四、七七五	八、四六一	七八九	四、五八六
座繰	一、六四四	二五二半	一、〇七八	三一八半	五一〇半
折返	四九	三〇	—	五一	二八
雜絲	一六	五	—	一七	四
合計	一〇、七七一	五、〇六二半	九、五三九半	一、一七五半	五、一一八半

備考

一、表中單位個は九貫目を指す

二、持越とは客月より本月に持越したるものにして本月一日の調査繰越とは本月より翌月に繰越すべきものにして本月末日の調査に係る

三、前月分の繰越と本月分の持越と其數一致せざるは商談中のものありしに依る

四、繰越以外に商談中のものありと知るべし

五、賣了中米國に輸出せるものは四千八百六十六俵にして歐洲に輸出せるものは四百三十八俵なりとす

但一俵は拾六貫目なり

尚左に生絲集散日別表を示すべし

明治四十年二月自一日至二十八日生絲集散日別表

器械太 □　同中 △　同細 ○　座繰 ×　折返 +

日	入荷	手合	賣了	引戻	輸出	地方積戻	國名	社名	種別	最高直・最低直	摘要
一日	三五四	一〇	五五二	一九	—	一八	岩代 / 信濃	長製社赤 / 中野館	× / □	一、三三五 / 一、一七五	一ト際靜況にて新規手合更になし
二日	二三〇	二六	九五五半	一一七	—	四八半	但馬 / 信州	但馬共同 / 渡邊製絲館	□ / □	一、二六〇 / 一、二〇〇	引續き陰たる商談なく何れも納まり發表のみにて捗々しからざる成行なりし
三日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	日曜日
四日	四五〇半	—	二六七	五七	—	—	武藏 / 同	改伸社菊 / 小口組銀	× / □	一、二五〇 / 一、二〇〇	さして實需なく亦格別新注文も入り込まず新規手合は皆無なりし
五日	二三九	六一三	一七〇	九一	—	二二	備中 / 美作	山陽社 / 美作製絲	□ / □	一、二三〇 / 一、二二〇	一般に返電待ちと成行見の有樣なるに三井物產會社に太上一番手二百二十圓替手合出來したり
六日	二一五	一〇五	一七〇	—	六九四	二〇	下總 / 上野	絹江製絲 / 碓氷社製	□ / ×	一、二二〇 / 一、一八〇	各館とも氣乘薄にて殆ど商談なく靜況なりし
七日	三九三半	二二〇	三三一	一二	—	二三六（七日・八日）	遠江 / 美濃	橫須賀社 / 丹光社	□ / □	一、二四〇 / 一、二一〇	座繰其他に手合出來したれど相場は變なく捗々しからざる成行なりし
八日	一八一	五一	八五	—	—		—	—	—	—	引續き靜況にて氣乘何となく弱含に見受けられたりし
九日	一三九	三六	一七五	七〇	一、三五三	二五	駿州 / 伊賀	駿陽社 / 東海製絲	□ / □	一、二六〇 / 一、二三〇	前日同樣不味の成行なりし
十日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	日曜日
十一日	六八三（十一日・十二日）	—	—	—	—	—	—	—	—	—	大祭日
十二日		一〇三	三一八	—	—	六二	甲斐 / 上野	甲盛社 / 令組銀	□ / □	一、二五五 / 一、二一五	當用向一兩口出來せし外は總て商談なく一と際沈靜なりし
十三日	二一七半	—	三六一	—	—	—	丹波 / 相摸	氷上共同 / 改良社	□ / □	一、二三五 / 一、二二〇	氣配益々靜かにて新規手合は皆無の姿なりし
十四日	一九五	一二一	四一六半	—	—	六九	信濃 / 同	天佑社 / 精業社	□ / □	一、二二〇 / 一、二〇五	頗る品薄の爲め捗々しき注文を寄せず只々當用口出來せしに過ぎざりし
十五日	一七七半	五一	二〇七	—	—	二八	—	—	—	未定	變りなく些少ながら弗々補充談を見受けたりし
十六日	一四三	四六一半	二二五	—	八六二	三〇	駿河 / 信州	駿陽社 / 信正社	□ / □	一、二四〇 / 一、二二〇	米向の新注文達したる向あり手合出來し相場も品により幾分か高直なりし
十七日	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	日曜日

十八日	二〇二	一七二	六八六	ー	ー	二一	甲斐 / 武蔵	矢島組舎 / 日新社	□ / □	一、二六〇 / 一、二三〇	割に新手の買入さてはあらざりしか太筋には引續き弗々商談を存し手堅く持合つゝ成行けり
十九日	二〇六	四〇一	三八三半	五	ー	九八	近江 / 上野	近江製絲 / 交水社若松	□ / ×	一、二三〇 / 一、二〇〇	在荷拂底の折柄勢ひぢり〳〵高足取を以て進行せり
二十日	九〇	一二三	二三〇	ー	ー	六六	甲斐 / 丹波	廣盛社 / 氷上共同	□ / □	一、二六〇 / 一、二三七半	一日毎に品かすれ行く一方とて花々しき商變を迎ふる餘力を有せざれど續いて買含み居れり
廿一日	一一八	二三一半	六八五半	ー	九六八	六一	上野 / 薩摩	下仁田社一桃 / 大重製絲	× / □	一、二四〇 / 一、二三〇	彌々必要口へ手合出來し品により十圓乃至十五圓方高直なりし
廿二日	六〇	一六六	六二六半	ー	ー	七八	上野 / 信州	下仁田社織倫 / 岡谷社	× / □	一、二八〇 / 一、二二五	歐米とも品薄の爲め買氣續け居り適當品は幾分か高直出來せり
廿三日	一五九	八八	四一一	ー	一二三	一〇四	甲斐 / 信濃	金凰社 / 中野館	□ / □	一、二六五 / 一、二三〇	適當品非常に必迫の爲め商談振り少し落付たるも氣配異狀なし
廿四日	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー		ー	ー	日曜日
廿五日	二一五	五〇	六八九	一一	ー	四三半	備後 / 上野	庄原製糸 / 交水社若松	○ / ×	一、二六〇 / 一、二一五	各館とも買氣を續け居れど何分適當品拂底の爲め中には先約に向て商談を進めつゝある向もありし
廿六日	一一六	八	七六七	ー	ー	四一	甲斐 / 武蔵	八幡社 / 太陽社	□ / □	一、二八〇 / 一、二一五	前日同樣別に變りなかりし
廿七日	二〇五	二五	四一九	ー	一、三〇四	四七半	甲斐 / 上野	矢組銀 / 今組	□ / □	一、三〇〇 / 一、二六〇	商談ちと落付きに見受けたるも別に氣配は變りなし
廿八日	七一	四五	四〇九	三六	ー	五七	羽前 / 上野	後藤製絲 / 交水社竹	□ / ×	一、三〇〇 / 一、二二〇	現物には靜々しき取組なく太筋物の先約は何分か出來しも非常の品拂底にて餘々手合出來せざるも氣配堅調に保合へり
合計	五、〇六二半	三、一〇六	九、五三九半	四一八	五、三〇四	一、一七五半	ー		ー	ー	

尙左に本年一月以來の生絲集散の狀況を明かならしめん爲め月別表を示すべし

生絲集散前年對照表

年月次	持越	入荷	賣了	積戻	繰越	輸出 數量	輸出 價額
四十年一月	一三、九六二俵	一〇、一六七俵	一〇、四三四半俵	一、〇二〇俵	一二、六七四俵	六三〇、一一五斤	七、七五一、四四六圓
四十年二月	一〇、七七一	五、〇六二	九、五三九半	一、一七五半	五、一一八	六三九、四〇九	七、八九五、一二六
計	ー	一五、二二九	一九、九七四	二、一九五半	ー	一、二六九、五二四	一五、六四六、五七二
三十九年同上	ー	一二、八四二	一九、三九二	二、二二四半	ー	一、三一七、〇〇二	一二、七四八、一五五

里昂市場

千九百六年(明治三十九年)蠶絲商況

昨三十九年に於ける里昂蠶絲商況に付一月八日付小田領事の報告は頗る參考に値するものあるを以て左に之れを揭ぐべし。

昨三十九年中蠶絲商況の大勢を通觀するに需要の著大なる增進と絲價の不斷的昇騰とは其特色として認むべきものなるに似たり、試に當市場に於ける年末の市價を年首の分に對較するに其等級幅度に因り、廣東生絲は三割五分乃至三割八分、歐洲近東本邦生絲は二割乃至三割、支那白絲は一割乃至二割の騰貴を示せるを見るべし、昨年度に於ける絲價の昇騰を招致したる主因は、一昨年の世界蠶絲製產額に約二百萬基の減少を告げたるに、加ふるに需要著しく增進の結果、昨年收繭の其前年分に比し增作なりしに拘はらず、各市場に於ける生絲在荷高猶較不潤澤にして、卽ち供給が需要に伴はざるの姿なりしに存するものゝ如し。

昨年間蠶絲需要供給の狀況前述の如くなるに拘はらず、最初九ヶ月間は概するに絲況不活潑にして絲價の進步徐々たりし所以のものは、「モロッコ」問題に關する佛獨外交の危機に切迫したるが如き、歐亞蠶の成績をトするの說區々にして前途の方針一定せざるが如き、北米製絹業の一時不景況を告げたるが如き、絹布價格の原料絲の騰貴に伴はざる如き等、當時の狀況の下に製絹業者は一般に絲價昇騰の永續を信ぜざりしより愼重の態度を採り以て日々當座用原料絲買入の外進て仕入を爲さゞりしに因るものと謂ふべし。

然るに其後北米絹業界の形勢遂に一變して大に買氣を示し來ると、同時に歐洲製絹業者も亦其豫想に反し、絲價は依然昇進の趨勢なるを認めざるを得ざるに至り、而して絹布の價格も亦漸々改良の傾向を示せる所より、決然進んで原料絲の仕入れに着手せり、茲に於てか各市場に於ける蠶絲在荷高の手薄なることは益々事實として顯はれ殊に撚絲の如きは昨年夏季に於ける歐洲大罷業の撚絲業に及したる影響として、其供給に大に不足を感ずるに至りたるが如きは、以て最終三箇月間に於ける絲況の活動及絲價の進追を說明するに足るべし。

昨年に於ける絲價一般の騰貴は近時未曾有の昂點に達したるものにして、我機械生絲一番手九十一の品物年末の相場五十九法乃至五十九法半に進みたるが如きは、蠶絲及羽二重の前途を慮るに客觀的現象として認むべきものなるや否やの問題たる、今茲に豫め斷言し得べからざる商況今後の成行に因りて解決せらるゝは蓋し近き將來にあるべしと思惟す。

偖養蠶季節の開始するや各養蠶國の地方は其收穫上種々の變化を現はし來れり卽ち廣東の第一期及第二期の收穫は減少を來たすべき現象を示し、佛國及伊太利は桑葉霜害を被り又上海及日本は當時收穫の增加は思はしからずとの報を傳へし其他東歐の如きも減作の豫報達せり、然るに爾後歐洲にありては天候回復し就中伊太利は前年に比し二割乃至二割五分の增收、日本も當初の豫想より增加あるべき旨報じ越し、是等の好報の爲に當地市場に氣配は稍見直し、殊に各市場共在荷高小數の爲め市價は暫く維持し、而して廣東絲の如きは此一歳常に上進の氣を持續し得るに至れり。

養蠶の收穫各地にて終り新繭の相場は歐洲の各市に於ては略ぼ前年同一にて立て始めたりしが、絲量は先年より遙かに善良なりき、爾後各地の收穫は各々其數量判明するに至れり、卽ち此歳の全世界各邦の繭產額は左の數に達せり。

一九〇六年　二〇、五〇〇、〇〇〇キロ

之に對する前年の產出數は

一九五年　一八、五〇〇、〇〇〇キロ
一九四年　二〇、五〇〇、〇〇〇キロ

七月には各市場共氣配一定せずして明暗孰れ共分ち難き狀況を示せり。

又同地駐在山田領事よりの電報左の如し。

生絲商況は少取引に止り依然靜穩なるも製絹業活潑にして機家原料絲の貯も追々減しつゝあれは賣手は需要の回復遠きにあらざるべしとの見込なるか如し羽二重商況は不振なるも氣配良し（二月十二日着電）

生絲商況は今週に入り活氣を示し相場昇騰せり五十九法半乃至六十法（三月一日着電）

紐育市場

紐育に於ける生絲市況に付同地駐在小池總領事よりの電報左の如し。

生絲市況靜、相場持合の姿（二月十四日着電）

生絲市況爾三日來稍か買氣萌める模樣相場横濱に連れ强氣本日機械一番五弗十

五仙及賞(二月二十日發電)

生絲買手多く相場機械一番五弗二十仙内外(二月二十七日發電)

生絲買手續き好況先値獨の見込已に騰絲商談を開ける向もあり機械本日續伸一番五弗三十五仙内外(三月六日發電)

廣東市場

廣東に於ける一月二十二日より二月四日に至る生絲商況に付き、上野領事より本月四日付を以て報告せる處左の如し。

本期間に於ける生絲の取引は買手設に賣手共に躊躇の態にして、紐育及歐羅巴よりの注文に對し、二三の取引者ありし外、他は皆其主張を曲げて應價に賣出すに至らざりき。

昨年以來今季に於ける今日迄の生絲の輸出額は三萬千担にして、此後輸出せらるべき生絲の量は六千五百乃至七千担なるべければ、今季に於ける生絲の總輸出額は四萬國内外なるべし。

本季間に於ける取引高は總計四百五十担にして、内二百担は紐育商「シルトマール」なり、今正賣相場を掲ぐれば左の如し。

廣純昌	一一一三	弗(六道)
愼如倫	一一一三	(六道)
忠信恒	一一一九〇	(六道)
	一一八〇	(六道)
	一一六五	
(ボル) 二	二二一六	
	二四一二八	
忠信恒	九二〇	(六道)
永和盛倫恒	一四一一六	(五六道)
福昌盛	一四一一六	(五六道)
謹和盛	一四一一六	(五六道)
倫	一四一一六	(五道)
祥	一四一一六	(五道)

上海市場

二月二十三日上海松村洋行發の報告左の如し。

前便以來西暦正月の賞め市場に全く休業せしより何等取引なく漸く新荷注文ありたれども僅かにて左記の如き取引實段にて其他注目すべきものなし。

銀孔雀一番七百廿五兩半、二番七百二十七兩半、青鶴子一番七百二十五兩半、二番七百十五兩半、二番七百十五兩半、二番七百四三番七百四

尚ほ統計表に依れば昨年一月一日より本年一月二十二日に至る輸出絲綢は左の如し。

黄絲九千四百七俵、白絲二萬三千四百八十五俵、合計三萬二千八百九十二俵

内譯英へ九百二十七俵、佛蘭西一萬一千六百五十四俵、伊太利及地中海沿岸へ七千七百七十一俵亞米利加へ四千八百五十三俵孟買及印度一千百四十三俵、墨國絲歐洲向輸出六千二百七十俵亞米利加二千四百四十九俵、香港其他一千四十三俵にして、尚現今の在荷數は白絲一千五百四俵黄絲三百四俵外に掛蠶絲三百五十俵あり。

愛友會發會式

生絲檢査所に勤務せる女子の人々は各自の品性を涵養する機關にせんとて此程愛友會なるものを組織せられたるが去九日午後一時同所控所に於て所が發會式を擧行せられましたる常務所長は發會式の挨拶に續けて來賓課上の講話を爲せられ次工取締吉田米子會員を代表して挨拶を述べ次に賞賜課長の修身上の講話、渡谷醫士の眼の衛生に就ての講話が有て午後三時散會せられたそうでありますが寔に喜ばしき會合ではありませぬか。

時報

會務錄事

支會長の囑託

本會支會規則第四條に依り、今回會頭の推薦を以て　總裁殿下より左の通囑託せられたり。

滋賀支會長　川島　純幹　　山口支會長　渡邊　融

從來地方委員部の設置ありし茨城、岐阜、熊本の三縣及岩手縣に本會の支會を設置し、支會長には支會規則第四條に依り、會頭の推薦にて　總裁殿下より左の通囑託せられたり。

茨城支會長　森　正隆　　岐阜支會長　薄　定吉

熊本支會長　押川　則吉　　岩手支會長　笠井　信一

地方委員長の囑託

今回石川、岡山、愛媛の三縣に本會地方委員部を設ち、同規程第三條に依り、會頭の推薦にて　總裁殿下より左の通囑託せられたり。

石川地方委員長　村上義雄　岡山地方委員長　寺田貼之

愛媛地方委員長　安藤謙介

支會副會長以下囑託

今回各支會長の推薦に依り、支會副會長、幹事長は　總裁殿下より、商議員、委員部長は會頭より左の如く囑託せられたり。

茨城支會副會長　小田切磐太郎　同幹事長　丹羽寛次郎

下野支會副會長　深野錬太郎　同　上　田村律之助

同　幹事長　井上　伍鹿

同　委員部長　河内　梅村　寛逸　上都賀　長井　誠三　下都賀　古屋　雄一

安蘇　大塚　順吉　足利　中森　茂八　芳賀　青木鶴次郎

三重支會副會長　鶴見左吉雄　同幹事長　堵子德之助

同　商議員　服部富之助　奥濃郡數馬　伊藤　小左衛門

伊藤勝次郎　熊澤市兵衛　丹羽太一郎　山田　重松

駒田定五郎　小野横吉　中山　武平　長谷川　藤次郎

井田勘十郎　大森孫十郎　上出又吉　細木虎吉

幹川喜吉　吉田勝之助　森川友蔵　前田魁蔵

濱地安兵衛　馬村德次郎　仁保清作　山本元三郎

中村善七郎　川口豊三郎　勝島政次郎　町井信郎

岡崎實吉　北島　稔

靜岡支會副會長　昌谷　彰　同　上　依田佐二平

同　幹事長　針谷　吾作

同　商議員　鈴野長男　細田多次郎　合志修敬　寺尾昌太郎

矢田部孫一郎　月倉惣兵衛　清水孝一郎　横田　保

久保田龜次郎　岡部竹次郎　石橋倫松　山下耕叡
後藤角平　伊藤仙太郎　長岡長吉

信濃支會副會長　岡田孚之助　同　上　工藤善助
同　上　羽田桂之進
同　幹事長　菅　正懿
同　商議員

片倉兼太郎　尾澤琢郎　下村龜三郎　武井覺太郎
越壽三郎　牧　新七　上原一二郎　三井仁兵衛
小山久左衛門　大里忠一郎　市川喜三郎　神津金太郎
上田幸次郎　小池平藏　木下　富　三尾熊之助
保刈祐次　曾根原數太郎　伊藤勝次郎　安川保次郎
宮澤貞助　浦野眞右衛門　轟小三郎　細川吉次郎
佐藤尾之七　鹽澤　瀬　百瀬　渡　伊藤喜代次
齋藤粂吉　宮澤槇藏

群馬支會委員部長に一名の缺員ありしが、左の通囑託せられたり。

利根　直井三郎

地方委員副長以下の囑託

今回地方委員部規程第三條に依り、地方委員副長は總裁殿下より、地方委員支部長及地方委員は會頭より左の通囑託せられたり。

佐賀地方委員副長　安河内麻吉

同地方委員支部長

佐賀　柳田　泉　神埼　郡山軍助　三養基　荻原善太郎
杵島　酒井茂馬　東松浦　原田守造　西松浦　太田辭助
藤津　梁木義榮　佐賀市　石丸勝一

同地方委員

牟田口宗六　森　太一

山形支會第二回品評會受賞者人名（承前）

春蠶種　五等賞

山形縣　本木粂次郎
同　佐々木作藏
同　細　茂八
同　和田十兵衛
同　渡邊作内
熊本縣　右田農搗
山形縣　舟生ツヽ
同　影澤佐兵衛
同　五十嵐德治
同　高橋米吉
同　高橋庄彌
同　設樂保藏
同　齋藤己六右衛門
同　多田庄四郎
山形縣　齋藤相次
同　秋保傳四郎
同　長岡清太郎
同　手塚藤吉
同　山川金三郎
同　横山壯輔
同　遠藤常吉
同　長谷川守壽
同　吉田慶太郎
群馬縣　富賀養蠶教習所

秋蠶種　五等賞

長野縣　立石友吉
同　小池昇山
福島縣　菅野宇兵衛
山形縣　仁藤庄七
山形縣　武田作右衛門
同　菅柳大吉
同　多田庄四郎
同　佐藤善七
同　多田清次郎
同　安藤蠶種生產所
同　五十嵐靜語
長野縣　桃井三保
同　津金宇平
山形縣　渡部金六
同　松田宗兵衛
同　興蠶館
同　大協普作
長野縣　河西甚五郎
山形縣　江口長六
山形縣　佐藤權藏
同　石川理右衛門
同　多田貞治
福島縣　菅野宇兵衛
群馬縣　山口正太郎
山形縣　鈴木金治郎
同　峰田文七
長野縣　小林善之助
山形縣　岩淵安祐

春蠶繭　五等賞

山形縣　草刈次郎左衛門
同　佐藤喜兵衛
同　佐藤小治郎
同　長谷川久五郎
福島縣　遠藤金三郎
山形縣　中川吉三郎
同　青木金太郎
群馬縣　杉井邦治
山形縣　山川寶一郎
同　佐竹高藏
同　市川權藏
同　長與仙松
同　加藤喜之助
同　菅　宇兵衛
同　岡部峰吉
福島縣　松木治作
熊本縣　細谷久一郎
山形縣　本木粂次郎
同　田村彌惣
同　大河原平次

山形縣　佐藤仁太郎
同　遠藤眞作
同　岡部七右衛門
同　矢口留五郎
同　阿蘇贊治
同　石山善藏
同　横山孫助
同　伊藤周藏
同　渡邊源吉
同　宮川　儀
同　柏倉嘉七
東京市　牧野軍吉
山形縣　黒澤金次郎
同　矢作幸吉
同　齋藤貞藏
同　三澤木藏
同　海野惣彌
同　栗橋龜七
群馬縣　清水恒太郎
山形縣　山本與三郎
同　佐東作榮
同　戸屋駒次郎
同　松田貞吉
宮城縣　野地嘉吉
岩手縣　梅津善次郎
山形縣　安孫子善吉
同　佐藤粂三郎
同　荒川佐五左衛門
同　伊藤安藏
同　小白川蠶業組合
同　太田幾右衛門
同　飯塚山五郎
同　佐藤眞太
同　黒田秀内
同　齋藤利三郎
同　安孫子龜太郎
同　松田善七
山形縣　富樫　長
同　佐藤乙吉
同　高橋長右衛門
同　佐藤芳美
同　鈴木登太
同　森谷善内
同　細　熊吉
同　鈴木民之助
同　多田文七
同　荒木周藏
同　伊藤　鼎
同　本間周治
同　安藤蠶種生產部
同　五十嵐喜兵衛
同　伊豆倉庄治
同　千喜眞藤作
同　山口角次
同　高橋德治
同　佐藤益人
同　水落鎰次郎
同　伊藤兵武
同　設樂長次郎
同　平山東作
同　設樂保藏
同　中里宗吉
同　富樫眞作
同　越澤卯八
同　澤田三吉
同　原田仁太郎
同　吉岡祐太
同　加藤金彌
群馬縣　粂島宗助
山形縣　姉崎覺右衛門
同　松浦文八
同　本田鶴吉
同　農科二年生徒
同　加藤菊治
山形縣　門脇太作
同　庄司清次郎
同　矢口德之助
同　今田ヤン
同　今田瀧江
同　菊地丸次
同　佐藤平八
同　佐藤久治
同　小松久吉
同　小松治吉
同　最上郡蠶業講習所
同　太田政之助
同　海老名千歳
同　萩原田次
同　武田龜治
同　仁藤重右衛門
同　芳賀末松
同　加藤五右衛門
同　菅野富重
同　太田俊賢
同　後藤虎吉
同　中野竹次郎
同　阿部清七
同　沼澤千代松
同　今野久右衛門
同　鈴木長六
同　西方岩藏
同　森谷善内
同　佐藤甚太郎
同　重野友次
同　伊藤長次
同　蠶業改良振興社養蠶傳習所
同　我妻軍平
同　大浦甚之助
同　遠藤重記

夏秋蠶繭　五等賞

山形縣　逸見儀兵衛
山形縣　齋藤庄作
同　片山清吉
同　岡崎庄之助
同　丸子菊治
同　平田彦彌
同　佐藤善六
同　青山平助
同　大山惣八
同　齋藤九兵衛
同　今野德太郎
同　齋藤相次
同　大森寅治
同　武田文四郎
同　伊藤澤治
同　齋藤孝太郎
同　渡邊源五郎
同　山川定七
同　根際蠶業組合代人鈴木傳吉
同　武田庄藏
同　鈴木清七
同　青木虎四郎
同　齋藤權六
同　佐藤儀兵衛
同　稲葉泰市郎
同　小浅常藏
同　齋藤利作
同　吉田德治
同　熊澤安五郎
同　鈴木泰四郎
同　佐藤貞次
同　佐藤美喜彌
同　久坂部文男
同　島貫菊次
同　長橋彌一右衛門
同　名佐原一右衛門
福島縣　石幡新之亟
山形縣　片桐岩治
山形縣　沼澤千代松
同　渡邊吉太郎
同　高山悌次郎
同　鈴木平四郎
同　大類七藏
同　山川次郎治
同　菅野泰三郎
同　椿　長雄
同　松田彦太郎
同　仁藤庄七
同　五十嵐長兵衛
同　山川德治
同　稲村熊治
同　太田富右衛門
同　星ウメホ
同　我彦幾次郎
同　渡部利兵衛
同　鈴木篤藏
同　田畠興吉
同　齋藤利三郎
同　青山芳吉
同　尾形彦作
同　佐藤勇吉
同　森　重次郎
同　日野祐太郎
同　設樂八郎
同　佐藤友幸
同　菅原惣吉
同　長澤叠太郎
同　齋藤甚三郎
同　長谷川久五郎
同　吉田榮吉
同　岡崎眞助
同　代人鈴木喜内
同　黄木勝吉
同　佐藤金治
同　伊藤忠助

宮城縣	入巻雄三郎
山形縣	大木竹五郎
同	須藤吾勤
同	中川吉三郎
同	山口藤吉
同	西荘小學校
同	長岡清太郎
同	齋藤又七
同	長岡シヤ
同	佐田安治
同	森谷與作
同	鈴木豊太
同	澤口政吉
同	遠藤嘉吉
同	竹田眞喜太
同	工藤庄三郎
同	佐藤菊藏
山形縣	宮城一三郎
同	齋藤吉藏
同	加藤徳治
同	齋藤長次郎
福島縣	松原藤吉
山形縣	五十嵐長八
同	坂木榮六
同	白石長藏
同	松村信平
同	加藤長五郎
同	齋藤與左衛門
同	設樂藤作
同	岩田岩藏
同	吉田五郎治
同	佐藤静十郎
同	高橋長四郎
同	梅津茂作
山形縣	駒形喜助
同	三浦忠兵衛
同	長谷川久吉
同	伊藤忠恕

生絲五等賞

山形縣	高取菊太郎
同	群山社新屋敷組
同	同橋上組
同	菅野元吉
宮城縣	菅原浩
山形縣	平山東作
同	群山社坂ノ上組
同	今野喜代太
同	相澤喜一郎
同	東旭社製絲場
同	大網社製絲場
同	柏倉嘉藏
山形縣	丹野久作
同	群山社中組
同	齋藤利兵衛
同	齋藤重次郎
同	太田最右衛門
群馬縣	下仁田水上組合
山形縣	松木傳次
同	石澤長吉
同	石垣ヤチ
同	庄内社山戸工場

桑苗五等賞

山形縣	近藤政次郎
同	山川定七
同	大坂今朝次
同	山川定七
同	坂野久兵衛
同	鈴木丹藏
山形縣	渡邊源藏
同	佐藤福藏
同	齋藤藤兵衛
同	高橋市五郎
同	齋藤藤藏
同	齋藤長太郎
同	齋藤政治
同	後藤市三郎
同	石山與市
同	山川源之助
同	金子喜知内
同	金子豐治
同	武田長七
同	山川金三郎
同	林一郎

蠶具五等賞

山形縣	菅野リウ
同	奥山利作

（完）

會員動静

明治四十年一月中の入會者左の如し。

府縣	入會 特別	入會 通常
東京	四	三
京都	—	三
新潟	一	一
群馬	三	六六
茨城	—	二
三重	—	三〇
愛知	—	二
福島	—	五
山形	—	七
栃木	一	五
島根	—	七
徳島	—	一
千葉	—	二
廣島	—	一
静岡	—	一五
山梨	—	一
岐阜	二	三
長野	一	三
青森	—	二
大分	—	二
計	一二	一八二

又同月中通常會員より特別會員に變更せられたるもの六名なり

本會會員現在數（明治四十年二月末日調）

會員總數　一萬四千三百七十九名

内

特別會員　四百四十一名

通常會員　一萬三千九百三十八名

蠶桑雜観

▲**山梨縣製絲工女の功績表彰漏れに就て**　本會第二回總會に於て功績を表彰すべき工女は八十二名の多きに達したるも、山梨縣よりは本會の照會に對し期日に至るも一名だに推薦し來らざりしを以て、同縣には本年は功績を表彰すべき者更に無之ものと認め居りしに、其後段々の調査に依れば、右は全く本會より同縣知事に宛て發送したる照會狀の途中紛失して同縣へ到着せざりしものなることを確め得たり、實は是迄本會發着の郵書の往々紛失し若くは延着して、爲に生ずる錯誤と迷惑とは一方ならず、返へすがへすも當局の不都合は鼓を鳴らして責めざるを得ざることなるが、其は兎に角一人も表彰の撰に入る者無かりしと云ふに至つては、同縣當局及當業諸士か痛く遺憾となせるも至極尤もなることにして、工女の落膽も如何許りなりしならんと轉た同情の念に堪へざる處なるが、本會に於ても斯かる行違ひより此有數の製絲業地より、一人の表彰者を擧け得ざりしことを深く憾みとなす處なり、去れど過ぎたるは既に及ばずと諦め今一年の日月を長しと待たて、一意專心斯業の爲に盡瘁せられんことを望む。

▲**製絲組合の創立**　前橋製絲同業組合にては去二月二十七日臨江閣に於て創立總會を開き出席同業者七十六名縣廳よりは託摩商工課長田中屬の兩氏臨場し午後一時より會議に入り定款第七十四條に修正を加へたるのみにて其の他は原案を可決し直役七人會議員二十名の選擧をもなしたりと云ふ。

▲**明治三十九年の各縣生絲産額**　三十九年中に各府縣より横濱に入荷せる生絲の個數合計十七萬八千七百七十二個にして府縣別左の如くなりと云ふ。

長野	六一、四八〇	静岡	五、一九四	兵庫	一、八九三
群馬	一七、六五七半	山形	四、八七四	岩手	一、七二八
福島	一三、一三〇半	神奈川	四、四三一半	京都	一、六二一
山梨	一二、九一九	宮城	三、九五六半	島根	一、五一七
埼玉	一一、八一八	茨城	三、二〇八	鳥取	一、三八一半
愛知	八、六〇五	東京	三、二三三	新潟	一、二六九半
岐阜	七、〇四〇	三重	二、一一三	千葉	一、二六四
滋賀	八九六半	鹿兒島	六〇三	和歌山	三九〇
栃木	八三三半	山口	四五四半	高知	三八二
岡山	七九四	秋田	四五三半	福岡	三三八
宮崎	七五一半	大分	四五二	富山	三二九半
愛媛	六九八	熊本	四二八	福井	二二七
奈良	一六〇	石川	三九	青森	一六半
北海道	八六半	長崎	二五	徳島	二
廣島	六四	大阪	二一		

▲**福井縣生絲の檢査勵行**　福井縣生絲檢査所設立以來受檢者僅少なりしが、去月二十五日同縣生絲商並に機業家の委員會合し水分の協定率を協議し本月一日より實行する事の契約を締結したる由なるがその契約の主なる要旨左の如し。

一生絲は總て福井縣羽織物同業組合の生絲檢査所の檢査を受け賣買取引するものとす

一生絲の水分協定率は正量（正量は無水量に無水量の一割一分の水分を加へたるもの）以上原料の千分の二十三まで水分を含むも支障なきものとす

但本水分協定率は滿一ヶ年を有効とし更に協定するものとす

一前記協定率を超過せる生絲を賣買したるときは其超過せる量目に對し價格を支辨せざるものとす

（備考横濱に行はるゝ協定率は正量以上原料の千分の二十）

▲**桑園造成の目的**　新潟縣にては近年桑園の痛く荒廢せるを救濟せんとし、縣に秋田式栽桑教師として福井勉太郎氏を雇聘したるが同氏の桑園造成の目的なるもの左の如しと。

一　第一の急務は在來自然立木を改良して若か返らせ桑葉を増收して春夏秋蠶を飼育するを目的とす

一 秋田式を施行するは樹命長く澤山の桑葉を得て春夏秋三回の飼育に充實するを目的とす

一 切桑式の根刈及中刈仕立をなすは桑葉を早く摘み春蠶兒飼育を目的とす

一 晉桑及丸葉晉桑實生苗を以て省に速成式と稱する仕立を施行するは專ら秋蠶飼育を目的とす

一 自然養木仕立をなすは手數を多くかけず壽命長く桑葉を摘み春蠶の飼育をなすを目的とす

一 垣根及境界に桑を植付くるは一方に收葉をなし一方に垣根として境界をなすの兩得を目的とす

一 前述の事項を心得て遂成するは國家の富を造るの途なり

▲養蠶學校の設立　宮城縣柴田郡にては本年度に於て郡立養蠶學校を設立する由にて其經費豫算は六千圓とし二ヶ年の繼續事業となして目下設計中なりと云ふ。

▲高等蠶業講習會　本會宮城支會に於て二月十五日より向ふ十日間、同縣遠田郡涌谷町に第二回高等蠶業講習會を開會し、其講師派遣方を本會に請求し來れるを以て、東京蠶業講習所に交渉し同技手岩淵平介氏を同會に派遣したるが、各講師の擔任科目は養蠶法、病理は岩淵平介氏、消毒法は中條庄藏氏、桑樹栽培は古藤泰助氏、生理解剖は金成金彥氏にして頗る盛會なりしと云ふ。

▲本年の豐凶豫想　東京蠶業講習所の實習部に在りて十年一日の如くに精勤せる矢島常七翁は農作物の豐否は培養の適否よりも、天候の眞否に支配せらるゝもの多ければ、豫め其年の天候如何を豫知して以て稼穡をなさゞるべからずとなし、日月星辰の光輝に鑑み、朝風暮靄に察し、若くは雲霧風雨に考へ、之れに依りて天災地變の有無農蠶物の豐凶を卜するを常となし、其豫言なるもの往々肯綮に値するものなきにあらざれば、頃日翁が編者に對し語られたる豫想談を左に揭げ果して事實に當るや否やを卜することとせん。

本年は五十年以來の大干魃にして、時に寒暖の劇變ありて霜或は雹の襲れあり霜は四月二十四五日より六月中旬迄の間に在り、雹は例年よりも大なるもの數次襲來すべし、地震は平年より强震にして三月より六月の間に多し、養蠶は春蠶平均八分作、夏蠶風穴上々作、生種は七分作以下ならん、桑葉の收穫は七分作以下、肥培耕耘に注意すべし、大麥の早蒔は八九分通蒔は五六分にして、小麥の早蒔は八分以下通蒔は六分以下なり、陸稻は乾燥地に栽培するは宜しからず、濕地文は濕地の場所收益多し用率も亦同じ、畠は乾燥の爲に平年作よりも三分減なり、大豆は關東は三四分なれども北國は上作なり、稻作は平年よりも一段の上作なり、但關東及之に接したる方面は天災の爲め平年作よりも一二割減なり、本年は蟲害多し又人畜に對し流行病多し注意せざるべからず、尙ほ晴雨の大要を圖に示せば左の如し但し白部は晴天黑部は雨とす。

一月 ○ 霽、風雨四北風多し　二月 ○ 風多し　三月 ○ 西國地方强震、　四月 ○ 二十五日以後霜雹あり　五月 ○ 雹及霜あり、溫度八十度なることあり劇變甚し

六月 ○ 降雹あり暴風あり溫度九十度內外のことあり　七月 ○ 上旬九州中國に亘りて旱あり　八月 ○ 旱り極めて甚し溫度百度地震雷あり

九月 ○ 下旬關東に暴風あり　十月 ○ 上旬暴風あり下旬に雷及び地震あり　十一月 ○ 雷地震甚し雹の氣味あり

十二月 ○

闇炎の如き天候にして本年は稻作及蠶作は非常の好出來なれ共、干魃甚しく且つ暴風雨襲來等の虞れあるを以て、航海業者は勿論農蠶家は大に注意警戒する處なかるべからず云々。

▲生絲檢查所月報　横濱生絲檢查所に於ける二月中の檢查成績左の如し

檢查件數

檢查年月	原量	正量	品位	撿減	計
本月	—	二、四九三	一、八二七	—	四、三二〇
前月	—	二、六五四	一、九一八	—	四、五七二
昨年當月	—	三、三七七	二、二四七	—	五、六二四
本年累計	—	五、一四七	三、七四五	—	八、八九二
昨年當月	—	六、六九一	四、六五三	—	一一、三四四

正量檢查

一檢查件數	二、四九三件	含水量百分比例	
一總全量	一九二、五六九斤	平均	一一、四六
一總風袋量	三、七七一斤	最多數	一五、四七
一總原量	一八八、七九八斤	最少數	七、八五
一總無水量	一六七、二〇三斤		
一正量	一八五、五九五斤		

品位檢查

絲別	檢查件數	再繰中切斷數	纖度 平均 デニール	纖度 細太差 デニール	額節 大額	額節 小額	强力及伸度 纖度 デニール	强力及伸度 强力 グラム	强力及伸度 伸度
細絲器械	三一	七回	一〇、九五	三、九五	一個	三二四個	一〇、九五	四一、八	二〇、〇一
中細器械	一四三	四	一三、〇四	四、四四	一	二一〇	一三、〇一	四六、七	二〇、〇八
同座繰撚造	一三	七	一三、一四	六、三三	—	—	—	—	—
太絲器械	一、〇六八	四	一四、四七	四、六七	三	二〇九	一四、九八	五五、五	二〇、二二
同座繰撚造	六四	六	一四、六四	三、七一	三	一六六	一四、七一	四四、六	二〇、一五
拵太器械	六	一	二〇、〇四	三、四〇	一	一七〇	二〇、〇四	七六、三	二〇、二七
同座繰撚造	三	三	一七、三三	七、七五	—	—	—	—	—

蠶海涓滴

▲米國加州　議會移民制限の外更に邦人の土地所有を禁する法律を制定し益凌辱を加へんとす噫我外交の當局者全く尸位素餐の徒か何ぞ大に抗議せざる。

▲戰勝國民　桑港市中濶步すと思ひきやハローのヤシプと御辱せられ人間あしらへ受ずとは 歸朝者の憤慨基督教國を 標榜する赤髯奴人道を 解するや否。

▲屈從盲從　之れ事とし六億一千萬圓てふ巨額の豫算案を電流の夫よりも速に通過せしめたる三百頭顱嚴正なる輿論に顧されて嘸ぞ愧しきを增せん矣止。

▲生絲市場　の景氣は實に未曾有の盛況にして新絲の先約定せられたるもの既に巨額の數となり養蠶地方の人氣亦頗る昂進し一貫目の價格六七圓にして。

▲先約定盛　に成立すと斷くて人氣の沸騰は自然春蠶の掃立を激增し結局桑不足に蠶兒水葬の慘を演するなきか蠶家絲家共に失敗せぬやう御用心々々。

▲巨船ダコ　タ號の沈沒近來の珍事共船員乘客に異常なかりしは實不幸中の幸か去るにても憐むべきは白濱村長惜むべきはフランク船長の處置ならずや。

▲近年米國　絹織物の需要下降に及び前途益好望なるより一大製絹會社ベシネツト氏に依て組織せらるとは眞か斷かる風聞は聞くだに寔と嬉しからずや。

▲本會々頭　松平男爵夫人發起の下に多數貴婦人の贊同を得今春蠶兒飼育の目的にて目下着々其準備中なり之れぞ新業獎勵の爲には好個の模範ならずや。

▲營利會社　に寃や角理窟を附けて巨額の補助金を交付せし當局者何故焦眉の急たる夏秋蠶講習所の設置を遷延せんとするか其意不可解の甚りならずや。

▲人造絹絲　會社播州網干に設置せられんとの噂さ頻々なりしも其後ドーやら立消の姿なり、デも油斷は大敵天然絹絲の生產者奮起研究の步武を進めよ。

▲農科大學　教授佐々木博士開講二十五年記念基金の募集を爲す實に博士か我農蠶界に與へたるの功績偉大なり、其恩惠に浴せる者奮て大に醵金を爲せ。

▲信州諏訪　昨年の製絲釜數一萬五千三百廿七釜にして其利益平均一釜二百九十三圓卅八錢に相當し各工場共競て業務の擴張を爲すと云ふ其盛や可觀哉。

風吹かぬ日は我なりの柳散　　梭遊

樂園

花翁宗匠を訪ふ

南嶽

余一日野外散策目黒の歸途香雪散る處花翁宗匠の邊に立寄り俳句の事を問ふた翁は笑つて答へずて有たが其うち淺々獻酬數杯雅談佳境に入た時に、翁酔に乘じ氣焔萬丈例の雄辯を弄した、其日ふ處は斯ふて有る、國歌、漢詩、正風變風、共に皆性情の自然吾曉詠歎の餘に發する者、俳句も亦國歌の流派古史に散見し、王公士庶の翫びて今に至りしもの、其甚因頻る舊しだ、現今の習俗元祿時代の芭蕉流を呼て蕉派と云ふ其に抱腹絶倒て有る、古くは宗祇、守武、宗鑑、中古は貞徳、季吟、松堅、宗因 鬼貫の徒雅海に雄飛したる名士である、然るに芭蕉を尊信する者はこれを謬稱し、宕嶽者流は芭蕉流を讓る、これら皆和樂の俳味斯道の德義を知らざるを自白する者、邪ろ大いに愍むべして有る。

花の本花翁宗匠

後水尾院御製等を拜誦する時は、即座に頭痛齒疼み位は忘るゝ恩澤に浴し得るでは無いか。

あせみそな飛こへ摘むやえつとこな
おもしろきたまらぬ春の小雪かな
あたら雪に齒形を付るおほうけた
白炭や燒かぬむかしの雪の枝
歸る雁つなく絲かな二十五弦ほと
二つとりいつれうぐひすほとゝぎす
馬合羽雪うち拂ふ袖もなし

元日

蓬萊の山はこぶかきところかや

戊申正月東南に白氣立ければ

あまのはら雲の帶する子持月

金閣寺へ行幸の時田を刈るを叡覽有て

早稻中稻おくてかるたの一二三

國歌で天地を動かし俳句で雨を降らしたなととは馬鹿らしき言草なれども、頭齒痛疼み位は忘るゝ句の出來る時も有る、自他の紳氣を慰め吉凶祝弔の俳句などは誰にても纒まるべくだ、尤も此俳句を作るには己の靈魂がふは〳〵と胡蝶のやうに舞遊びて攫らぬ者には迚も出來得る事でない、各自墾韓一番第一に家業々々を勵み、勵て心身疲勞したる時これを慰撫したり、又餘暇には集會相爽し、貴賤結び老若親しみ、花鳥を愛、風月を翫ふ樂園のおもしろみは、門外漢の窺知し難き甘味ありて、此閑内に遊ばざる者是亦實に憫むべきであると、呵々大笑左の句を吟じ、盃纏出する處へ俗客二名の襲來て、他日を期して引揚げた。

はたらけばこれも大牢草の餅

花の本宗匠撰（前號の續き）

感吟

霞ひく濱の山や結ふ繭　羽前　枯葉
曉咲の梅や蠶の花暦　武藏　佐次郎
錦も穴を後ろに遊ふ霞哉　山形　福原
聟にとる人とは知らす梅貰ひ　但馬　一叟

風任せ水振床しき野梅散　福島　鳳城
善き人の梅の夜道を戻りけり　長野　紳川坊
月か瀬に折る花のなし梅の枝　伊勢　草眠
海苔賣の春の薫を廣け鬼　上野　旭鷺
鶯や櫻竹洗ふ水の上　簗川　甲子
梅の花人の寒さも寄ひけり　信濃　櫻園
生海苔や初荷の船の香にけふる　下野　藤庭
嬉しさや春告鳥のたち歸る　信濃　柳枝
採み海苔や手際のなきも馳走振り　埼玉　一泉
蠶室の掃除する日や句鳥　諏訪　可笑
鶯や雨にもぬれぬ法の聲　山梨　紫月
楼橋やけふも絲荷の賑む程　群馬　澄翁
鶯にきても靜な工女かな　埼玉　華月
梅咲や牛もゆきかふ里の丘　靜岡　芳川
間の窓事足る梅の薫りかな　甲斐　玉漁
有来さくやはや蠶築も程近し　郡山　潤東
梅か香や暖さうな牛の夢　靜岡　若莖
鶯や御代を八千代と祝ふ聲　信濃　淸櫻
福引や獲たる杓子にくむ笑ひ　廣島　鷺醉
蠶家は未たあら壁や梅の花　群馬　小林
鶯や匂體らしき朝の聲　甲斐　不盡木
梅白し雪の汚の眼立つ程　長野　翠家
寢た鳥も起て來よかし梅に月　群馬　英窰
鶯や氣はゆるされぬ貯蔵繭　埼玉　春海
福引や富の卵の蠶たれ　山梨　露松
児を連て海苔舟を漕く女かな　靜岡　其人
淺草の海苔や昔の偲ばるゝ　山形　晴雲
鶯の啼や苦もなく越す峠　甲斐　蘆舟
黄鳥に一棹立る出船かな　越後　北雷
霞けりさして行く山隣る山　信濃　東山

青海苔や濱の薫りもほんのりさ　埼玉　春樹
佐保姫も生絲引けん初霞　羽前　樂山
梅の花退つ進つ眺めけり　長野　春雨
鶯や昨日にまさる聲の巾　安藝　吳山
梅か香や椽の日暖きまふし折り　信濃　加山
鶯の初音も遲し出羽の奥　羽前　熔娥
黄鳥や胛にきいくる玉の聲　三重　若水
長居して鐘等う聞く鶯哉　群馬　豊樂
かすまれて汽笛の床し諏訪の里　越後　龜育
山里や水も茶の間も梅薫る　長野　竹露
代を偲ふ石燈籠や有来の花　埼玉　一島
傳癡の遺花流しぬ梅の宿　福島　I A
蠶飼する日を指折るや梅の花　四ヶ原　蠶友
桑植る人も夕のかすみ哉　信濃　半年
鶯や去年の初音も今日の頃　羽前　可愧
よき里や四に東に梅屋敷　常陸　壽郎
黄鳥や呼び起したる絲相場　甲斐　一羽
ほし海苔や世に薫る名も美くしき　長野　滯
梅咲て挾き心地や道の幅　羽前　一民
鶯の春をみちびく調かな　鹿兒島　小竹女
うくひすや鈴ふる猫を抱てきく　群馬　三友
福引を歸りて二度の笑ひ哉　備後　天外
花實よき梅や今年も咲後れ　信濃　四海
月と梅只鶯の待たれけり　上野　旭源
梅見かさ問はるゝ鶴の薫り哉　石見　北僊
鶯や思へは安き絞の地租　甲斐　山本
手綱程霞引けり生駒山　常陸　桑山
風の油斷松原包む霞かな　甲斐　潮月
打やめて春も更けり海苔礎　群馬　錦水
鶯や筆に花さく庵の主　羽前　嶂子

君か筈心つくしや梅の花　三河　其考
眼にしみる嘸みや梅の初雫　甲斐　寅作
試心の馨ふや海苔の淹手紙　愛知　閑水
鶯や野心な嗜雅の春　桑名　誠俊
黄鳥の來て黄鳥なく鳴ぜけり　群馬　芳春
梅咲や個はかる國の宮　山梨　好山
鶯や逝毛吹かるゝ風先　伊勢　竹水
海苔の香や磯邊の景も鄙ほろゝ　備後　櫻里
波あり山ある里の豐かな　豆江　松甫
丹誠の薫りも殘し窟の旅衣　群馬　源水
脱ぼ荷の重し鶯の旅衣　甲斐　龜水
鶯の聲も書こむ手紙俊　丹波　絲翠
梅か香や夜も捨られぬ窟の闇　静岡　可雅
海苔の香や飯に沓撓く朝旅籠　信濃　守梅
散て窟北野の梅の匂ひけり　甲斐　米泉
黄鶯や風も障らぬ鶯代の聲　信濃　南泉
梅咲や朝酒甘き東窟　山梨　一齋
呼つきの梅や親しき垣隣　静岡　南畝
盜後や鶯の鶯な船のゆく　武蔵　應機
鶯や花のなき木も日の馨ひ　長野　山人
梅か香やほろ〳〵酔の廻り道　岡山　一空
鶯けりひさきの雛も音絶えて　上野　松月
鹿鳴た野の春早し初鶯　信濃　溪水
鶯の盛りを拂ふぼつつ音かな　廣島　仙水
梅咲やもう鶯の來る時分　長野　磐洲
鶯や桑にも見える黒の富　群馬　溪月
梅か香や檜に嗜き星の影　信濃　信南
黄鳥や伏家の北の梅柳　伊勢　花月
鶯や萬里の春み小枝から　陸奥　子瀧
うくひすや寝床は梅の花蹇　岩代　七三

程々や海苔とる棧も國の篤　伯馬　午藏
黄鶯や子飼は知らぬ谷渡り　甲斐　嶺
窟み者た樹に鶯の初音渡　越後　耕邨
福引や梅料の中の金袋　丹波　玉石
初旅や海苔に興津の窟休み　信濃　水湖
鶯は行船は入來る霞渡　静岡　桑宇
孝に名の知れた乙女や海苔干場　武蔵　霧月
鶯や逮なき山の力杖　甲斐　波山
主床し谷間の庵に薫る梅　周防　柳意
時代から此鶯しみか月と梅　越後　俊徹
いさけなき文や梅さく初便り　山梨　精逸
鶯の二度に懸める初音俊　塔玉　其芳
海苔の香や深川よりの贈りもの　松江　竹園
鶯や寓の桑にも崩染み振り　丹後　桑洲
寿る筆は古ひて梅白し　群馬　五峰
鶯けつる牛の黒まよ梅の花　信濃　山水坊
電燈の光に驚るや門の梅　丹波　吉水
妹か手の屠かて無事や軒の有米　福島　清絲
黄鳥やけふ初聲の東より　秋田　檜村
夜の闇な枝に鶯れて梅しろし　下野　愛鶯
行く人な暫しと留る野梅俊　福島　稻
丹精の古ひし床し鉢の梅一枝　岐阜　冷泉
嬉しさや香に立つ闇の梅一枝　丹波　名の夜
海苔の香や親しみ深き磯の春　丹波　名の夜
鶯や水曾は初音も花の頃　甲斐　波山月
梅か香やきのふの雪の玉襷　信濃　化
畑中に鶯のあとや梅白し　信濃　青
春霞豊な晴さん花の女　伊勢　虎秋

人

鶯の來さうて忙し庭掃除　福井　雲隣
梅咲やそこらか春の門らしい　地
福引や智惠も力も手傳はす　天
鶯や嗜習ふ間の藪ゑらみ　追加

撰者　花の木花翁宗匠
題　鶯　雲雀　白酒　桃　長閑
（入花無料原稿〆切三月三十一日限り一日後到着の分は浸書することあるべし）

懸賞
天（一人）會報一ヶ年分
地（一人）會報半ヶ年分
人（一人）會報三ヶ月分
一題一句一人に付五句限り○用紙郵便端書に限る○便宜上東京市麻布區六本木町三十一番地松林花翁宛送らるべし神田區美土代町へ到着の分は次號廻しとす○應募者は本會々員に限る○住所姓名及び雅號を明記さるべし

規則

撰者　花翁

懸賞俳句募集

新刊紹介

明治三十八年外國貿易概覽　大藏省主税局刊行

年々發達しつゝある本邦の海外貿易は稍近如何なる成績を示しつゝあるか、之れを勢知して商して生産の増加を促し、貿易の發展を期するは國民として最重要の事であらう、乃ち本書は讀んで興味の如く、一昨三十八年度に於ける我海外貿易の狀態を統計的に編纂せられたるものであるから、國民諸氏に思ひ存に貿易の盛衰に致し、之れか根作に熱心せらるゝの士に取つては、何より好個の參考と云はねばならぬ。（非賣品）

自明治三十五年一月　至明治三十九年六月　耕地整理施行地一覽（第三次）

農商務省農務局刊行

耕地整理の利は今改めて贅々するの要はない、只一日も早く耕地の多く於整理せられんことを望むのであが、本書は去三十三年一月以來即ち耕地整理法を施行せられた時から昨三十九年六月末日迄に於整理發起の認可を受けたるもの、施行したる個所數地區面積其他整理費用豫算表等を詳細に調査し、表示せられたるもので巻頭には耕地整理施行地面積累年比較表圖を附せられ、一目の下直に各府縣の耕地整理か如何なる狀況に在るかを知るに足るのである。

寄贈書目

盤石農友會報	第八號
鶯のすゝめ	第九八號
經濟的育蠶法	第三八號
北海道蠶絲會報	第六七號
農林	第一號
千葉縣蠶絲時報	第三四號
土地建物月報	第二四號
稲業雜誌	第二一—二二號
白鳥會報人會報	號外
農談樂	第三號

盤石農友會	
大日本蚕蠶奬勵會	
鹽谷伊三郎	
北海道蠶絲會	
島根縣農林學友會	
千葉縣蠶絲時報社	
東京繊物株式會社	
日本稲業協會	
桜代勤業協會	
農談樂社	

東京府農會一覽		東京府農會
愛蠶時報		愛蠶時報社
蠶業之友	第一四號	蠶業之友社
下伊那蠶事報告	第四四號	下伊那郡蠶絲業組合
東北之蠶業	第一二號	東北蠶業社
南海蠶報	第五〇號	南海蠶業同志會
紳田新報	第三號	紳田新報社
明治三十八年外國貿易概覽		大藏主稅局
會報	第一號	帝國農家一致協會
北海道農會報	第七三號	北海道農會
農業世界	第二ノ一―二ノ二號	博文館
大日本農會報	第三〇八―三〇九號	大日本農會
大日本山林會報	第二九〇―三九一號	大日本山林會
動物學雜誌	第二一九號	東京動物學會
中央農事報	第八二―八三號	全國農事會
植物學雜誌	第二四〇號	東京植物學會
蠶業新報	第一六六號	蠶業新報社
教育公報	第三一五―三一六號	帝國教育會
三田商業界	第三ノ一號	三田商業研究會
武德誌	第二ノ一―二ノ二號	武德會
日本蠶友會報	第一九―二〇號	日本蠶友會
昆蟲學雜誌	第一―二號	昆蟲學會
北越之蠶業	第一卷第一―二號	新潟縣蠶絲會
染織時報	第二四三―二四四號	大日本織物協會
工業化學雜誌	第一〇七―一〇八號	工業化學會
大日本私立衛生會雜誌	第二八四―二八五號	大日本私立衛生會
兵庫縣蠶業會報	第七一―七二號	兵庫縣蠶業會
通商彙纂	第一―一二號	外務省通商局
農業新聞	第一〇六―一〇七號	農業新聞社
蠶友雜誌	第七八號	蠶友組合本部
城丹蠶絲時報	第一三―一五號	城丹蠶絲時報社
統計集誌	第三四〇號	東京統計協會
農事雜報	第一〇五號	農事雜報社
學士會月報	第二二七號	學士會
工業雜誌	第三五五―三五八號	工業雜誌社
新民	第一ノ一〇―一ノ一一號	報德會
山梨蠶業時報	第一五號	山梨蠶友會
農業教育	第六七號	東京農業教育研究會
京都府農會報	第一七四號	京都府農會
岐阜縣農會報	第一六六號	岐阜縣農會
廣島縣農會報	第二三九號	廣島縣農會
新潟縣農事報	第三七號	新潟縣農會
福岡縣農會報	第九三號	福岡縣農會
横濱貿易月表	第一―二月分	横濱稅關
月報	第一二四號	横濱商業會議所
大農園	第二〇八―二〇九	帝國農家一致協會
何鹿實業月報	第九五―九六號	何鹿郡蠶業會
中外商業新報	第一―二月分	商況社
生絲日報	第一―二月分	原合名會社
防長實業界	第三九―四〇號	山口縣農會
北海道農會報	第七三號	北海道農會
關西之蠶業	第二一號	關西之蠶業社
土佐生絲時報	第五〇號	土佐生絲同志會
愛國婦人	第一一九―一二〇號	愛國婦人會
興業雜誌	第一四六―一四七號	興農園
圖書月報	第五ノ四―五ノ五號	東京書籍商組合
岩手縣農會報	第四八號	岩手縣農會
埼玉農報	第二二號	埼玉農報社
九州蠶業時報	第九號	九州蠶業時報社
德島縣農會報	第四〇號	德島縣農會

會報	第一五號	長野縣蠶種同業組合
島根縣農會報	第一〇五號	島根縣農會

Bulletin Des et Des Soieries. No. 1544–1551
Revue, hebdomadaire Lyonnaise indédendante
Bollettino di Sericoltura No. 1–3 Pubblicata a cura dell'Associazione dell
Industria a del Commercio dello
Sete inIli

人事彙報

▲押川則吉氏 本會特別會員にして岩手縣知事たりし同氏は熊本縣知事に任じ高等官一等に敍せられたり

▲鈴木定直氏 本會特別會員にして滋賀縣知事たりし同氏は高知縣知事に任じ高等官二等に敍せられたり

▲伊澤多喜男氏 本會通常會員にして警視廳警視たりし同氏は和歌山縣知事に任じ高等官三等に敍し三級俸下賜せられたり

▲岩藤馬太郎氏 本會特別會員にして岩手縣技手たりし同氏は岩手縣技師に任じ高等官八等に敍せられたり

▲林　輝作氏 本會學務委員にして蠶業講習所技師たりし同氏は東京蠶業講習所製絲部長を命ぜられたり

▲加賀山辰四郎氏 本會監事にして農商務省製絲課長なる同氏は從五位に敍せられたり

▲片岡　謙氏 本會通常會員にして農商務技師なる同氏は正七位に敍せられたり

▲石居一郎氏 本會評議員にして東京蠶業講習所技師なる同氏は從六位に敍せられたり

▲永井米藏氏 本會特別會員なる同氏は從六位に敍せられたり

▲石川準太郎氏 本會學務委員にして京都蠶業講習所技師なる同氏は從六位に敍せられたり

▲町田　穰氏 本會特別會員にして蠶業講習所技手たりし同氏は蠶業講習所技師に任し高等官七等に敍し十級俸を下賜せられ東京蠶業講習所舍監を命じ同所在勤を命ぜられたり

▲芳賀權四郎氏 本會學務委員にして生絲檢查所技師なる同氏には從五位に敍せられたり

▲相良　步氏 本會通常會員にして群馬縣事務官なる同氏には正六位に敍せられたり

▲武井　格氏 本會通常會員にして福島縣耶麻郡長なる同氏には正六位に敍ぜられたり

▲關銈三郎氏 本會通常會員にして群馬縣多野郡長なる同氏には從六位に敍せられたり

▲馬川潛藏氏 本會通常會員にして宮城縣加美郡蠶業學校長なる同氏には正八位に敍せられたり

▲宮場市松氏 本會通常會員にして群馬縣利根郡長なる同氏には四級俸下賜せられたり

▲吉池慶正氏 本會理事にして農商務技師なる同氏には高等官六等に陞敍せられたり

▲松田昌德氏 本會學務委員にして農商務技師なる同氏高等官七等に陞敍せられたり

▲鎗居龜太郎氏 本會通常會員にして群馬縣邑樂郡長なる同氏には高等官七等に陞敍せられたり

▲直井三郎氏 本會通常會員にして群馬縣屬なる同氏には群馬縣利根郡長に任ぜられたり

▲齋藤美知麿氏 本會特別會員にして福島縣事務官なる同氏には高等官六等に陞敍せられたり

▲針塚長太郎氏 本會學務委員にして目下獨逸國へ留學中なる同氏には盛岡高等農林學校教授に任ぜられ六級俸下賜せられたり

乃龍

啼さへ
調子合けり
春の雨

AVIS.

1'. Le bulletin de l'Association s ricicole du Japon est l'organe des membres de cette societé qui compte actuellement plus de 14.379 membres.

2'. Cette Association a pour but de développer toutes les industries de la soie en publiant un rapport mensuel, dans lequel il sera mentionné tous les faits et études sur la soie émanant de savants et intéressés.

3' Dans ce rapport sera inscrit dans les langues européennes le mouvement mensuel de la Condition des soies de Yokohama, lequel sera distribué aux intéressés étrangers.

4'. L'Association recueillera et publiera les essais et études faits par les interessés étrangers en matière des soies.

La Direction de l'Association Sériciole du Japon.

NOTICE.

1) The report of the sericultural Association of Japan are intended to serve the interest of the members of the association, whose number is over 14.379

2) This association has for its objec the development of all silk industries by publishing a monthly report containing the facts and studies on silk by specialists and persons interested in silk.

3) In this report the monthly statement of the Yokohama Silk Conditioning House will be published in a European language for distribution among foreigners interested in silk.

4) The association will collect and publish articles and studies foreigner of topics concerning silk.

The Direction of the Sericultural Association of Japan.

交詢餘錄

●柘苗分與　柘苗數百本所有せり希望者に分讓す至急申込あれ　水戸市上市大町二〇　倉持鑑吉

●種子分讓　水稻（稿坊主）は主として早生種にして品質良好牧穫多量なり一人壹袋（目方三十匁）郵劵三錢封入申込者に分讓す　信州南安曇郡豊科村一、一四八　鳥羽農場

●會報要望　左記大日本蠶絲會報不要の方は相當代價を以て讓渡しを請ふ　農商務省　廣谷清多郎

（二十五年四月八一號）三十七年六月廿四號）三十八年六月三十六號）同十一月（四十一號）二十九年一月四十三號）二月（四十四號）三月（四十五號）七月（四十九號）

●柞蠶飼育法頒布　「天蠶柞蠶飼育奬勵の爲め」「天柞蠶飼育法」往復はかきにて請求あれば一部贈呈す　信濃國豊科局區内　尙農園

特別廣告

一金百圓也　東京府　森田退藏君

一金參圓也　島根縣　千家尊紀君

右金額ゞ本會へ寄附せられたるを以て之れを受領し基本金に入れたり

大日本蠶絲會

大日本蠶絲會報廣告料

	特等	並等
一頁	半頁	四分ノ一頁
一回乃至二回ニ付	十五圓	八圓五十錢
三回乃至六回ニ付	十二圓	七圓
七回以上（一回ニ付）	十圓	六圓
	六圓	三圓五十錢
	五十錢	八圓
	三圓	五圓
	八圓	五圓
	五圓	三圓
	三圓	

四分ノ一頁以下ハ一行ニ付金參十錢ヲ申受ク

會員ハ右料金ノ二割引トス
特等ハ四分ノ一頁未滿ハ謝絶ス
料金ハ前金ニアラサレバ掲載セズ
一頁ハ一行二十七字詰七十二行トス

●本報定價　一冊金拾五錢　一ヶ年分前金壹圓七拾錢

明治四十年三月二十日印刷發行

編輯兼發行人　東京市神田區英士代町三丁目二番地　小池市松

印刷人　東京市神田區英士代町二丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區英士代町二丁目一番地　三秀舍活版所

發行所　東京市神田區英士代町三丁目二番地　大日本蠶絲會（電話本局一四七三番）

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI PAR JOURS.

DIAGRAM SHOWING DAILY MOVEMENT OF RAW SILK.

Jours. Days.	Arrivée. Arrived.	Vendue. Sold.	Renvoyée Sent back.	Exportée. Exported.	Noms des filateurs. Names of filatrs.	Prix. Prices.
	Soie. Silk.					Maximum du prix. Highest prices.
	Piculs.	*Piculs.*	*Piculs.*	*Piculs.*		*Yen*
1	199	311	10	—	Ryoseisha.	1.235
2	130	537	27	—	Tajimakiodôsha.	1.260
3	—	—	—	—		—
4	253	150	—	—	Kaishinsha.	1.250
5	134	96	12	—	Sanyôsha.	1.230
6	121	96	11	390	Kenkôsheishijo.	1.220
7	221	186	133	—	Yokosukasha.	1.240
8	102	48		—		—
9	79	98	14	761	Shunyôsha.	1.260
10	—	—	—	—		—
11	384	—	—	—		—
12		179	35	—	Koseisha.	1.255
13	123	203	—	—	Higamikiodosha.	1.235
14	110	214	39	—	Tenyusha.	1.220
15	100	116	16	—		—
16	80	126	17	485	Shunyosha.	1.240
17	—	—	—	—		—
18	114	386	12	—	Yajimagumi.	1.260
19	116	216	55	—	Ômisheishikwaisha.	1.230
20	51	130	37	—	Koseisha.	1.260
21	66	386	34	545	Shimonitasha.	1.240
22	34	352	44	—	Shimonitasha.	1.240
23	89	255	59	69	Kinpôsha.	1.265
24	—	—	—	—		—
25	121	388	24	—	Shôbarasheishijô.	1.260
26	65	411	23	—	Yawataseishikwaisha.	1.280
27	115	236	27	734	Yajimagumi.	1.300
28	40	230	32	—	Gotosheishijô.	1.300
Total	2.851	5.366	661	2.984		

1 yen vaut environ fr. 2.50. 1 Picul = 60 kilg. environ.

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI EN DIVERSES INDUSTRIES.

(Février 1907.)

TABLE OF MOVEMENT OF SILK IN DIFFERENT INDUSTRIES.

(February 1907.)

		Report. Brought over.	Arrivé. Arrived.	Vendu. Sold.	Exporté. Exported.	Renvoyé. Sent back	Reexporter. Brought forward.
		Picul.	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*	*Picul.*
Filature.	Filature.	5.097	2.686	4.700	—	444	2.580
Zaguri.	Retsel.	925	142	606	—	179	281
Kakeda.	Orikayashi.	28	17	—	—	29	16
Autres.	Other.	9	3	—	—	10	2
Total.		6.059	2.848	5.306	2.984	661	2.979
1906.		15.876	1.667	8.300	7.092	1.186	8.058

MARCHÉ DE YOKOHAMA.

Voici la situation de notre marché au mois de Février dernier.

Pendant les vingt premiers jours le marché a été très calme les transactions ont été presque nulles et les prix ont accusé graduellement la baisse. Au moment où l'Extra No 1 paraissait s'abaisser au dessous de *yen* 1.200, dans la dernière dizaine, le marché a repris son ancienne activté et les demandes nouvelles sont arrivées des pays étrangers de sorte que les prix, prenant son nouvel essor, ont accusé par degré la hausse. Aussi, arriva-t-on à coter Extra No 1 pour *yen* 1.270. Le nombre de balles traitées pendant ce mois ont éte de 3.106, celui de balles livrées 9.539½. Si nous comparons ces chiffres à ceux de la même période de l'année dernière, il est vrai qu'on trouve une grande diminution pour cette année-ci. Mais cela n'étant qu'un résultat de la pauvreté des stocks dûe à l'activite des affaires depuis l'année dernière, il est à présumer que le marché est plutôt en état régulier si l'on envisage l'affaire au point de vue des stocks.

Les tableaux suavants indiquent d'ailleurs le mouvement des soies durant la même période.

MARKET OF YOKOHAMA.

Condition of our rawsilk market of Yokohama in the month of February is as follows: —

At the first and middle ten days the market was so calm that no bargain was carried and the price, as the result, became low gradually—indeed Best No. 1 was close upon 1.200 *yen*. But at the last ten days the condition has recovered suddenly by reason of the activity of periodical rawsilk and the arrivals of new orders from foreign. So the price tended to be high and Best No. 1 rose to 1.270 *yen* again. Through the month there was the number of bale of 3.106 at bargain and of 9.539½ at sale. The number showed extraordinary diminution in comparison to that of the same period in last year, but we must assent as the natural result from the prosperious trade since last year, by which the stock of market made up a deficiency. Nay, it is considered that such a condition was rather active, having observed from the number of the stock.

Following tables show the movement of the rawsilk market during the same period.